

一般国道9号米子道路埋蔵文化財発掘調査報告書 IV

鳥取県米子市

オダカ オタテヤマ イセキ  
**尾高御建山遺跡**

オダカ コフングン  
**尾高古墳群**

1994

財団法人  
建設省

鳥取県教育文化財団  
倉吉工事事務所

## 正誤表

(尾高御建山遺跡・尾高古墳群)

頁		誤	正
74	挿表2 SK-05	長方形	隅丸長方形
	SK-13	不定形	隅丸長方形
	SK-15	隅丸長方形	長方形
	SK-20	長方形	隅丸長方形
	SK-37		SX1
75	SK-58		SX1
	SK-61	SX4	SX5



尾高御建山遺跡から東方を望む

# 序

鳥取県西部地域の米子市・淀江町周辺は、北に雄大な日本海、南に秀峰大山を控え、美しい自然環境に恵まれた地域であります。さらに、古くから遺跡の宝庫としても知られており、西日本では珍しい縄文時代の櫛が出土した井手腕遺跡、本州では唯一の出土であり九州との関連性が考えられる国重要文化財「石馬」、切石積石室をもつ国指定史跡「岩屋古墳」など後期の前方後円墳が集中する向山古墳群、彩色壁画や3基の塔心礎の出土で注目される上淀廃寺など、当時の活発な交流を物語る遺物・遺構が数多く存在しております。

当財団では、このような遺跡地帯を平成2年度から一般国道9号米子道路工事に伴い発掘調査を実施してまいりましたが、平成3・4年度も鳥取県教育委員会文化課が建設省倉吉工事事務所と協議の上で、財団法人鳥取県教育文化財団が委託を受け、西部埋蔵文化財調査事務所が発掘調査を実施いたしました。

その結果、落し穴跡と考えられる多くの土坑群、古墳時代の住居跡と考えられる遺構、尾高古墳群に属する3基の古墳などを調査しました。特に、3基の古墳は形や葬られ方が異なるなどバラエティーに富むものでした。これは、葬られた人を考えるときに非常に興味深いことです。これらの調査結果は、未解明な部分の多い郷土の歴史を解き明かしていくうえでの貴重な基礎的資料であります。今後一層の調査研究が期待されるところであります。本報告書がそうした調査研究の一助となり、ひいては文化財保護、教育文化の向上に寄与できることを願うものです。

本報告書が多方面にわたって広くご活用していただけることを心から願っております。

最後になりましたが、この度の調査の実施および報告書の作成にあたり、御理解と御協力を頂いた地元の方々をはじめとする関係各位に心から感謝申し上げる次第です。

平成6年3月

財団法人鳥取県教育文化財団

理事長 西 尾 邑 次

# 序 文

建設省が管理する一般国道9号は、京都市を起点として福知山を経由し、蒲生峠から山陰地方へ入り、日本海に沿って鳥取・島根両県を西走し、山口県下関に至る延長約609kmの路線であり、山陰地方の産業・経済活動の動脈として大きな役割を果たしています。

このうち建設省倉吉工事事務所では、東伯郡泊村から米子市（鳥取・島根県境）までの76.4kmを管理しており、各種の道路整備事業を実施しています。そのうちの一つに西伯郡淀江町及び米子市地内において、将来の国土開発幹線道路として、当面活用できる機能を有する高規格な自動車専用道路である米子道路の整備を進めています。

米子道路は米子市及びその周辺部における一般国道9号の交通混雑を緩和するために計画され、昭和47年から事業に着手し、現在までに米子市尾高～陰田町間約8.1km（一部ランプ使用）を供用しています。

現在、西伯郡淀江町今津から米子市赤井手及び米子市陰田町から県境までの間を自動車専用道路として施工中です。

このルートには、多数の古墳・散布地がありますが、鳥取県教育委員会と協議を行い、文化財保護法第57条の3の規定に基づき文化庁長官へ通知した結果、事前に発掘調査を行い記録保存を行うことになりました。

このうち今年度は、「大下畠遺跡」「泉中峰・泉前田遺跡」「尾高御建山遺跡」「陰田久幸山遺跡（仮称）」の4箇所について財団法人鳥取県教育文化財団と発掘調査委託契約を締結し、鳥取県教育委員会の指導のもとに発掘調査が行われました。

残りの箇所についても、工事工程等と調整を行い、来年度以降引き続き発掘調査委託契約を締結し、発掘調査を進めてもらう予定です。

本書は、この調査結果に学術的な考察を加え、「記録」として保存するためにまとめられたものです。この貴重な「記録」が文化財に対する認識と理解を深めるため、並びに教育及び学術研究のために広く活用されることを期待するとともに、建設省の道路事業が文化財保護に深い関心を持っていることにご理解をいただければ幸いに存じます。

おわりに、事前の協議をはじめ現地での調査から報告書の編集に至るまでご協力をいたいた鳥取県教育委員会及び財団法人鳥取県教育文化財団の関係各位のご尽力に対し感謝いたします。

平成6年3月

建設省倉吉工事事務所長

濱 谷 武 治

# 1992年度調査

尾高御建山遺跡1区・2区

尾高古墳群

## 例　　言

1. 本報告は、一般国道9号米子道路工事に伴い1992年度に実施された米子市尾高に所在する尾高御建山遺跡、尾高17・18・19号墳の埋蔵文化財発掘調査記録である。
2. 発掘調査は、建設省倉吉工事事務所の委託により財團法人鳥取県教育文化財團 西部埋蔵文化財調査事務所が行った。調査担当調査員は西川・仲田である。
3. 本報告書に収載した尾高古墳群は周知遺跡であるが尾高御建山遺跡は新発見の遺跡の為、調査着手段階では遺跡名が確定しておらず発掘調査通知等では「尾高所在遺跡」と呼称した遺跡である。
4. 調査地に国土座標第5系に対応する10×10mのグリッドを設定した。方位は真北、レベルは海拔標高である。
5. 本報告書に掲載の地形図は国土地理院発行の5万分の1地形図「米子」を使用した。
6. 本報告書の作成は調査員の討議に基づく。本文は調査員が分担して執筆し、編集は西川が行った。  
遺構・遺物の実測並びに浮写、遺構・遺物写真的撮影は調査員、調査補助員を中心に実施した。  
本報告書の作成には、鳥取県埋蔵文化財センターの協力を得た。
7. 出土遺物・図面・写真等は鳥取県埋蔵文化財センターに保管されており、出土遺物は将来的には米子市教育委員会に移管する予定である。
8. 尾高御建山遺跡のプラント・オパール分析を古環境研究所にお願いした。
9. 尾高御建山遺跡の土坑埋土の脂肪酸分析を株式会社ズコーシャ総合科学研究所にお願いした。
10. 尾高19号墳第2主体部から出土した玉類の産地同定を原石産地研究会の東村武信・葉科哲男の両氏にお願いし、玉稿をいただいた。
11. 尾高御建山遺跡の土坑内出土炭化木の<sup>14</sup>C年代測定を京都産業大学理学部の山田治教授にお願いし、玉稿をいただいた。
12. 現地調査及び報告書作成にあたっては、下記の方々に指導・協力を頂いた。  
(敬称略、五十音順)  
赤木 三郎　　福田 孝司　　岩田 文章　　門脇 鞍文　　久保藤二朗　　小原 貴樹  
下高 瑞哉　　杉谷 愛象　　田中 秀明　　中原 齊　　中山 和之　　根鈴 輝雄

## 凡　　例

1. 発掘調査時における遺構番号と報告書の番号は基本的に一致する。
2. 本報告書に収載した遺物には観察表中の〈取上番号〉をネーミングしてある。遺跡名は「OD」と略称した。
3. 本報告書における遺構記号は下記のように表す。  
S I : 穴穴住居跡　　S K : 土坑・土壤墓　　P : 柱穴・ビット
4. 本報告書における遺物記号は下記のように表す。  
Po : 土器　　S : 石器　　J : 玉類　　F : 鉄器類
5. 土器実測図のうち、須恵器は断面白黒塗りで表した。その他は断面白抜きである。遺物実測図における記号は以下の通りとする。  
→ : ケズリの方向(砂粒の動き)
6. 遺構挿図におけるセクション・エレベーションの基準線標高は H = の記号で表す。
7. 遺物観察表における法量の欄の番号は次の通りとする。なお、数値の後についた△は復元値、△は残存値であることを表す。  
①口径 ②器高 ③胴部最大径 ④底部径 ⑤脚径 ⑥脚高 ⑦長さ ⑧幅 ⑨穴径

# 目 次

序  
序 文  
例 言  
凡 例  
目 次  
挿 図 目 次  
挿 表 目 次  
図 版 目 次

## 第1章 調査の経緯

第1節 発掘調査に至る経緯.....1

第2節 調査の経過と方法.....1

第3節 調査体制.....2

## 第2章 位置と環境

第1節 地理的環境.....3

第2節 歴史的環境.....4

## 第3章 尾高御建山遺跡の調査

第1節 尾高御建山遺跡の概要.....9

第2節 壁穴住居跡.....9

第3節 土坑・土壙墓.....13

I. 落し穴.....13

II. 袋状土坑.....30

III. 土壙墓.....31

IV. その他の土坑.....34

第4節 円形周溝.....44

第5節 方形周溝.....45

第6節 古墳群形成以前の土器・石器.....46

## 第4章 尾高古墳群

第1節 尾高17号墳.....48

第2節 尾高18号墳.....56

第3節 尾高19号墳.....63

遺構一覧表.....74

遺物観察表.....76

## 付 論

尾高御建山遺跡から出土した遺構に残存する脂防の分析.....81

尾高御建山遺跡 2 区の液体シンチレーション<sup>14</sup>C 年代測定結果.....89

尾高御建山遺跡出土の玉類の産地分析.....90

# 挿図目次

挿図 1 遺跡位置図	3
挿図 2 周辺遺跡分布図	5
挿図 3 遺構全体図	7 * 8
挿図 4 S I -01遺構図	9
挿図 5 S I -01土器実測図	10
挿図 6 S I -02遺構図	10
挿図 7 S I -02溝部遺構図	11
挿図 8 S I -03遺構図	12
挿図 9 S I -03土器実測図	12
挿図10 S K -01遺構図	13
挿図11 S K -05遺構図	14
挿図12 S K -06遺構図	14
挿図13 S K -07遺構図	15
挿図14 S K -14遺構図	15
挿図15 S K -18遺構図	16
挿図16 S K -19遺構図	16
挿図17 S K -20遺構図	17
挿図18 S K -21遺構図	17
挿図19 S K -22遺構図	18
挿図20 S K -23遺構図	18
挿図21 S K -24遺構図	19
挿図22 S K -27遺構図	19
挿図23 S K -32遺構図	20
挿図24 S K -36遺構図	20
挿図25 S K -37遺構図	21
挿図26 S K -38遺構図	21
挿図27 S K -39遺構図	22
挿図28 S K -40遺構図	22
挿図29 S K -41遺構図	23
挿図30 S K -42遺構図	23
挿図31 S K -43遺構図	24
挿図32 S K -44遺構図	24
挿図33 S K -46遺構図	25
挿図34 S K -47遺構図	25
挿図35 S K -48遺構図	26
挿図36 S K -50遺構図	26
挿図37 S K -51遺構図	27
挿図38 S K -52遺構図	27
挿図39 S K -53遺構図	28

插图40 SK—55遺構図	28
插图41 SK—57遺構図	29
插图42 SK—58遺構図	29
插图43 SK—03遺構図	30
插图44 SK—04遺構図	30
插图45 SK—02遺構図	31
插图46 SK—02土器実測図	32
插图47 SK—02鉄器実測図	32
插图48 SK—11遺構図	33
插图49 SK—15遺構図	34
插图50 SK—08遺構図	34
插图51 SK—09遺構図	35
插图52 SK—09土器実測図	35
插图53 SK—10遺構図	35
插图54 SK—12遺構図	36
插图55 SK—13遺構図	36
插图56 SK—16遺構図	36
插图57 SK—17遺構図	37
插图58 SK—25土器実測図	37
插图59 SK—25遺構図	37
插图60 SK—26遺構図	38
插图61 SK—28遺構図	38
插图62 SK—29遺構図	38
插图63 SK—30遺構図	39
插图64 SK—31遺構図	39
插图65 SK—33遺構図	40
插图66 SK—34遺構図	40
插图67 SK—35遺構図	40
插图68 SK—45遺構図	41
插图69 SK—49遺構図	41
插图70 SK—54遺構図	42
插图71 SK—56遺構図	42
插图72 SK—59遺構図	42
插图73 SK—60遺構図	43
插图74 SK—61土器実測図	43
插图75 SK—61遺構図	43
插图76 円形周溝遺構図	44
插图77 円形周溝土器実測図	44
插图78 方形周溝遺構図	45
插图79 方形周溝土器・鉄器実測図	46
插图80 繩文土器実測図	46
插图81 石器実測図	47

插图82	17号填西侧周溝内集石検出状况	48
插图83	17号填墳丘測量図	49·50
插图84	17号填墳丘遺存図	51·52
插图85	17号墳遺物出土位置図	53·54
插图86	17号填土器実測図	55
插图87	18号填墳丘測量図	56
插图88	18号填墳丘遺存図	57·58
插图89	18号填石室実測図	59
插图90	甌出土状况図	60
插图91	高坏出土状况図	60
插图92	把手付椀出土状况図	60
插图93	坏出土状况図	60
插图94	18号填遺物出土位置図	61
插图95	18号填土器・鐵器実測図	62
插图96	19号填墳丘測量図	63
插图97	19号填墳丘遺存図	64
插图98	第1主体部遺構図	65
插图99	第2主体部玉類出土状况図	66
插图100	第2主体部遺構図	67
插图101	第2主体部玉類実測図	68
插图102	第3主体部土器実測図	70
插图103	第3主体部遺構図	71·72
插图104	19号填周溝内土器出土状况図	73
插图105	周溝内土器実測図	73

## 插 表 目 次

挿表 1	玉類計測表	69
挿表 2	土坑・土壤一覧表	74
挿表 3	土器観察表	76
挿表 4	石器観察表	79

# 図版目次

巻頭カラー図版 尾高御建山遺跡から東方を望む

図版 1 尾高御建山遺跡全景	図版10 18号墳遺出土状況
S I-02完掘状況	18号墳高坏出土状況
S I-03完掘状況	18号墳把手付腕出土状況
図版 2 S K-37断面	図版11 19号墳完掘状況
S K-38断面	19号墳第1主体部断面
S K-40断面	19号墳第1主体部完掘状況
図版 3 S K-39炭化木検出状況 (同)拡大	図版12 19号墳第2主体部断面 19号墳第2主体部玉類出土状況
S K-20完掘状況	19号墳第2主体部完掘状況
S K-23完掘状況	図版13 19号墳第3主体部検出状況
図版 4 S K-02検出状況 S K-02断面	19号墳第3主体部完掘状況
S K-02遺物検出状況 (同)拡大	19号墳第3主体部蓋石除去状況
図版 5 S K-11検出状況	19号墳第3主体部土器出土状況
S K-11完掘状況	図版14 S I-01土器
S K-15完掘状況	S I-03土器
図版 6 方形周溝調査風景	S K-09土器
方形周溝検出状況	S K-61土器
方形周溝断面	円形周溝土器
図版 7 方形周溝完掘状況	縄文土器
円形周溝完掘状況	石器
円形周溝土器出土状況	図版15 S K-02土器・鉄器
図版 8 17・18号墳測量風景	図版16 17号埴土器
17号墳墳丘検出状況	18号埴土器(1)
17号墳墳丘断ち割り	図版17 18号埴土器(2)・鉄器
図版 9 18号墳墳丘検出状況	19号埴土器・玉類
18号墳石室	
18号墳石室	

# 第1章 調査の経緯

## 第1節 発掘調査に至る経緯

鳥取県西部地域における一般国道9号米子道路工事に伴い、埋蔵文化財発掘調査が西部埋蔵文化財調査事務所によって平成2年度から開始された。平成2~4年度の西伯郡淀江町内の福岡遺跡、平成3・4年度の西伯郡淀江町内の井手跡遺跡、平成4年度の西伯郡淀江町内の今津塚田遺跡、平成5年度の西伯郡淀江町内の大下畠遺跡、米子市内の泉中峰・泉前田遺跡の調査が実施されている。

一般国道9号米子道路のルートにあたる米子市尾高地内には周知の遺跡である尾高古墳群が含まれるうえ、平成2年度に米子市教育委員会が実施した試掘調査によって遺跡の存在が予想された。そのため、建設省中国地方建設局倉吉工事事務所は鳥取県教育委員会文化課と協議し、財団法人鳥取県教育文化財団が記録保存のための発掘調査の委託を受け、西部埋蔵文化財調査事務所が調査を担当し、平成4年4月より調査を開始した。

## 第2節 調査の経過と方法

調査開始に先立ち、業者委託によって調査前の地形測量と調査地全景写真を撮影した。

発掘調査は4月6日より開始した。まず、土層確認と遺構の広がりをつかむために計32本のトレンチを設定し掘り下げた。特に、斜面部には横穴墓が存在することも考えられたためかなり密にトレンチを設定したが、結果としては横穴墓は存在しなかった。並行して古墳の調査前の墳丘測量を行う。

4月23日より重機による表土剥ぎを開始した。

表土剥ぎ終了後は業者委託によるグリッド設定を行った。グリッドは国土座標第5系に対応させて10m方眼に区画した。基線は東西方向を西から1~13、南北方向を北からA~Jと設定した。杭名はその基線の交点で表し、グリッド名は北西隅の杭名を用いることにした。基線およびグリッド名の設定にあたっては、次年度以降も継続して実施される調査地も含めることができるように配慮した。グリッド杭の位置は、A-1杭が〔X=-63500 : Y=-83780〕、A-13杭は〔X=-63500 : Y=-83660〕にあたる。

調査地南側の谷部は、トレンチ調査やプラント・オパール分析の結果に基づき調査地の見直しが必要となり、鳥取県教育委員会文化課を通して建設省と協議した。その結果、谷部を平成5年度以降に繰り延べる代わりに次年度以降に調査を予定していた調査地東側部分を今年度調査することになった。この追加調査地を尾高御建山遺跡2区、それ以前の調査地を1区とした。2区は9月11日から重機による表土剥ぎを開始した。

現地説明会は古墳の墳丘が残っている期間にと考へ、9月26日に実施したところ約120名もの参加者を得た。その他、調査期間中には大山小学校の香取分校や赤松分校、伯仙小学校の生徒など多数の見学者があった。この経験が発掘調査や埋蔵文化財に対する興味や関心を持つきっかけとなればと願っている。

古墳の調査は10月20日に、調査地全体の調査も11月13日に終了した。

### 第3節 調査体制

調査は、鳥取県教育委員会・鳥取県埋蔵文化財センターの指導・助言のもと、下記の体制で実施された。

#### ○調査主体 財團法人鳥取県教育文化財団

理事長	西尾邑次(鳥取県知事)
副理事長兼常務理事	坂田昭三
事務局長	若松良雄

#### 財團法人鳥取県教育文化財団 鳥取県埋蔵文化財センター

所長	土井田憲治(鳥取県教育委員会文化課長)
次長	山根豊己
調査指導係長	田中弘道(鳥取県埋蔵文化財センター次長)
庶務係長	山根夏男(鳥取県埋蔵文化財センター庶務係長)
主任事務職員	木下利雄
事務	嶋村八重子

#### ○調査担当 財團法人鳥取県教育文化財団 西部埋蔵文化財調査事務所

所長	永原功
主任調査員	太田正康
調査員	西川徹 仲田信一 原田雅弘 志田睦
調査補助員	樋口友枝 山崎裕子

#### ○調査協力 米子市教育委員会

下記の方々に発掘調査作業員・整理作業員として協力していただいた。記して謝意を表したい。

##### 発掘作業参加者

秋里登志子	井上みのり	大塚和子	加藤智恵子	門田正美
金田千枝子	河井節子	佐藤節子	下本愛子	高田茂
谷ミサ枝	露無克子	長尾茂	中本貞子	野口君枝
野口稔	野坂貞子	長谷川昇	平井節子	松原園子
松本良子	安田貞則	吉田一子	吉田繁	吉田学
吉原三代子				(敬称略、五十音順)

##### 整理作業参加者

遠藤和子	岡田千秋	左藤博	清水房子	杉田千津子
瀧川友子	塙田文子	二宮さおり	山本久美恵	(敬称略、五十音順)

## 第2章 位置と環境

### 第1節 地理的環境

#### 鳥取県

鳥取県は中国地方の5県の内の1つの県である。中国地方は瀬戸内海に面する山陽地方の3県と、日本海に面する山陰地方と呼ばれる2県に分けられる。両者の間には標高1200mを越える山々が存在し、両者の環境を大きく異なるものにしている。その違いは特に冬に顕著である。比較的晴れて温暖な気候が続きあまり雪の降らない山陽地方に対し、山陰地方ではどんよりとした曇り空が続き雪がかなり積もるのである。鳥取県はこのような山陰地方に属している。

鳥取県は、北側に日本海があり、南側を岡山県と広島県、東側を兵庫県、西側を島根県と接している。鳥取県の面積は3,492.34km<sup>2</sup>であるが、その8割近くが林野である。県内は千代川水系に属し鳥取市周辺を中心とする東部地区、天神川水系に属し倉吉市周辺を中心とする中部地区、日野川水系に属し米子市周辺を中心とする西部地区に大きく分けられる。これらの地域は、中国山地から日本海に向けて流れる県下を代表する3つの河川の中・下流域に発達した冲積平野に依拠しているのである。また各平野の海岸線には、全国的に有名な鳥取砂丘をはじめとして、河川によって運ばれた多量の砂により大小の砂丘・砂州が発達している。

鳥取県は、前述した3市に国内でも有数の漁港をもつ境港市を加えた4市を中心に39市町村から構成されている。人口は61万4789人（平成5年12月1日現在）である。

#### 米子市

米子市は、鳥取県の西部に位置し市域は100.1km<sup>2</sup>、人口は13万3571人（平成6年1月1日現在）である。

東は淀江町や大山町、南は岸本町・会見町や西伯町、西は境港市や島根県安来市、北には日吉津村があり、日本海とも接している。地形は中国山地より流れでた日野川によって形成された米子平野、日野川と合流する法勝寺川流域に形成された法勝寺平野などの冲積平野が基本となっているが、周辺部には低平な山地や台地が迫る。特に、東方には中国地方の最高峰である大山（1713m）から続く広大な台地状の山麓が広がっている。なお、海岸部には弓ヶ浜半島のような砂州が広がり、変化に富む地形となっている。



#### 調査地域

調査地域の米子市尾高は、米子市と東側にある淀江町の境界近くに位置し、大山から壹瓶山に向かってびる山麓縁辺部を形成する台地が米子平野と接する地点に位置する。ここは平野部に広がる水田に向けて比高差約20mの急な斜面となっており、遺跡の中心となる段丘上は平坦な地形となっており、標高は34m前後である。

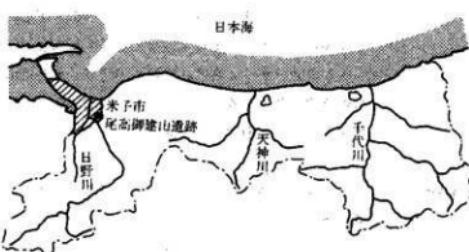


図1 遺跡位置図

## 第2節 歴史的環境

**旧石器時代** 米子市・淀江町域に限らず、鳥取県内には旧石器時代の遺構とされるものは確認されていないが、大山山麓一帯を中心としていくつかの旧石器が発見されている。淀江町小波出土の東山・杉久保型系統の黒曜石製ナイフ型石器、溝口町長山第1遺跡出土の細石刃（マイクロ・ブレイド）などが発見されている。旧石器時代～縄文時代草創期とされる有舌尖頭器は、黒曜石製が淀江町中西尾から、サヌカイト製のものが米子市奈良喜良遺跡・会見町諸木遺跡(34)・岸本町貝田原遺跡(23)をはじめ大山町の坊領や荘田地区などでも発見されている。

**縄文時代** 鳥取県内から草創期の土器は発見されていない。しかし、大山山麓の縁辺部で有舌尖頭器が出土していることを考えると、今後この時代の遺構・遺物が大山山麓を中心に発見される可能性が高いであろう。

早期になると大山山麓を中心に押型文土器を伴う遺跡が発見されている。米子市の上福万遺跡(17)では多くの土坑や配石墓と考えられる集石が発見されている。土器や石器も多く見つかっており、早期の拠点的な遺跡となっている。尾高御建山遺跡(7)からも若干の押型文土器が出土した。

前期になると遺跡も増えてくる。前期から中期を中心とする米子市の目久美遺跡からはドングリを蓄えた多くの貯蔵穴が検出されている。陰田遺跡からは人為的な痕跡の残る多くの獸骨が見つかっている。淀江町の船ヶ口遺跡からは多くの土器や石器が見つかっている。土器のなかには九州に特徴的な曾式土器に類似するものも含まれており注目される。

中期に新たに始まる遺跡は米子市・淀江町とも見つかっていない。

後期から晩期には米子市の青木遺跡(40)から200基以上の落し穴が検出された。淀江町の河原田遺跡からは多くの土器が出土した。井手跡遺跡は河川跡を中心とするが多くの土器に混じって西日本では珍しい2個の朱塗りの結核式櫛や木胎耳栓が出土し注目される。

**弥生時代** 弥生時代になると遺跡の数も多くなる。

前期の遺跡には、米子市の目久美遺跡や口駄田遺跡・勝田遺跡、淀江町の今津岸の上遺跡が挙げられる。目久美遺跡は前期から中期にかけての低湿地遺跡であり、3層の水田跡と多くの木製農具が見つかった。今津岸の上遺跡では長径135mと推定されるV字状の環濠が検出されている。

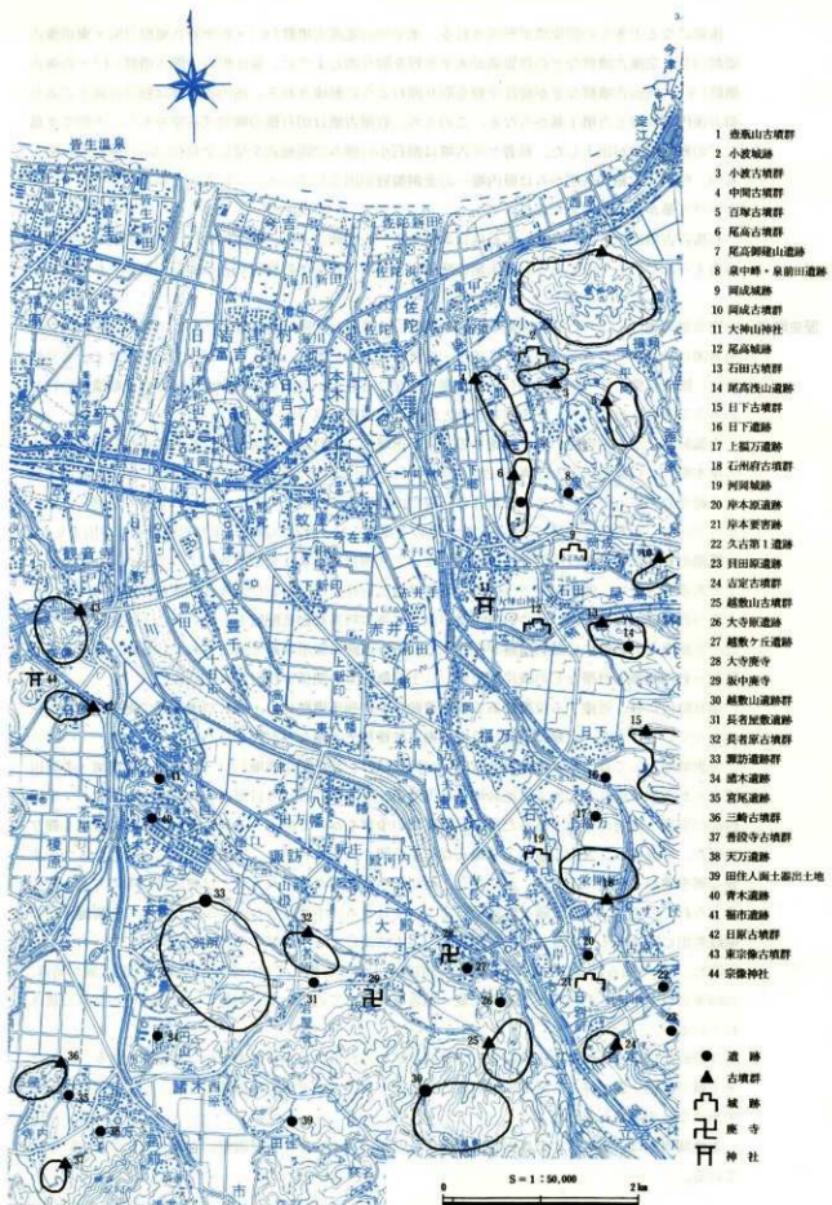
中期には米子市の青木遺跡や福市遺跡(41)、淀江町の晚田遺跡・角田遺跡・福岡遺跡などが現れる。青木遺跡・福市遺跡は後期以降も続く大規模集落である。角田遺跡からは建物や船などを描いた線刻土器が出土した。福岡遺跡からは200基以上の粘土探査坑が見つかった。

後期には米子市の池ノ内遺跡・陰田第1遺跡・尾高浅山遺跡(14)、淀江町の井手跡遺跡・坂の上遺跡などが現れる。池ノ内遺跡からは古墳時代後期までの5面の水田層が検出された。尾高浅山遺跡は一部3重の環濠がめぐる集落と四隅突出型墳丘墓が近接して存在する遺跡である。尾高浅山遺跡のそばには四隅突出型墳丘墓を含む弥生から古墳時代にかけての墳墓群の出土した日下遺跡(16)がある。井手跡遺跡・坂の上遺跡は集落跡である。

**古墳時代** 米子市・淀江町域における前期古墳の様相は明確でない。

前期古墳は米子市では石州府29号墳・日原6号墳などが存在する。数多く存在する方墳は前期のものが多いと考えられており、特徴的である。淀江町内では前期古墳は見つかっていない。

中期になると米子市の陰田41号墳・宗像41号墳、淀江町では上ノ山古墳・向山3号墳などが知られている。



挿図2 周辺遺跡分布図

後期になると多くの群集墳が形成される。米子市の尾高古墳群(6)・石州府古墳群(18)・東宗像古墳群(43)・宗像古墳群などの群集墳が米子平野を取り囲むように、淀江町の中間古墳群(4)・百塚古墳群(5)・向山古墳群などが淀江平野を取り囲むように形成される。向山古墳群は独立丘陵上にあり前方後円墳8基と方墳1基からなる。このうち、岩屋古墳は切石積の横穴式石室をもち、人物や水鳥などの形象埴輪が出土した。長者ヶ平古墳は割石小口積みで両袖式を呈し全長10.3mの横穴式石室をもつ。付随する箱式石棺からは県内唯一の金銅製冠が出土している。これらの古墳は6世紀～7世紀にかけて築かれたと考えられる。

石馬谷古墳出土と言っている石馬は本州で唯一の類例であり、福岡県の岩戸山古墳例との関連性が考えられているものである。終末期の晚田山31号墳では舟形の線刻がある軸石が発見された。

**歴史時代**　律令制の施行により、現在の鳥取県域は西側の伯耆国と東側の因幡国という2つの国に編成される。伯耆国は6郡よりなるが、現在の米子市・淀江町域は会見郡から汗入郡にかけてに該当する。会見郡衙は、圃場整備に伴って調査が行われ、掘立柱建物と焼米が見つかった岸本町の長者屋敷遺跡(31)であろうと考えられている。汗入郡の都衙と思われる遺跡は見つかっていない。

白鳳時代になると寺院の建立が始まる。米子市域にこの時期の寺院は見つかっていないが、隣接する岸本町内に白鳳時代の大寺庵寺(28)・奈良時代の坂中庵寺(29)がある。大寺庵寺の伽藍配置は変形の法起寺式で塔心礎はいわゆる三重孔の心礎で山陰地方では唯一である。なお、全国で2例しか見つかっていない石製鷲尾が残っている。淀江町の上淀庵寺は、最近の調査により彩色壁画片が出土した。白鳳期の彩色仏教壁画は法隆寺金堂壁画に次いで2例目であり、発掘調査によって出土したのは初めてである。さらに、伽藍配置では南北に瓦積基壇が近接して2塔並び、その北側にも基壇はないがもう1つの心礎が見つかり、3つの塔心礎が南北に並ぶ特異な伽藍配置をしていたことが明らかとなつた。上淀庵寺の北側には楚利遺跡が存在する。この遺跡は鍛冶場跡と考えられているが、布目瓦・鶴尾瓦・彩釉陶器・石帶などの破片が出土し、上淀庵寺との関係が注目されている。

奈良時代には、近接する位置にある青木遺跡(40)や福市遺跡(41)・櫛ノ口遺跡群で掘立柱建物が見つかっている。また、上福万遺跡(17)では掘立柱建物や土壙などが出土した。

中世城館としては、米子市尾高城(12)・河岡城(19)、淀江町小波城(2)・淀江城・稻吉城・香原山城などが文献に現れる。米子市尾高地城は山陰道と山陽側に抜ける日野道との分岐点に位置し、伯耆西部の交通・流通の要衝であったため、尾高城の争奪をかけて尼子・毛利両氏が幾度もの激戦を繰り広げた。尾高城は、大山山麓の入り組んだ谷と丘陵を巧みに利用し、空堀と土塁で守られた8つの主要な郭を連ねる構造である。これに対し、淀江町内にあったとされる城とは皆の様なものであったと考えられているが、未だ正確な位置は特定されてはおらず不明な点が多いが、1333年の後醍醐天皇の隨岐脱出に関連する名和長年と隨岐国守護佐々木清高による小波城の攻防戦を初めとして、「大永の五月崩れ」として知られる1524年の尼子経久の伯耆への侵入に際しては山名氏方であった淀江城が陥落、1569年には尼子氏と毛利氏による淀江城・稻吉城を巡っての争いなどが起こった事などが文献に残されている。

江戸時代になると、吉川広家によって築城が始まっていた米子城を中村一忠が完成させ、1601年米子城に中村一忠が移ると尾高城は廃城となる。その後、米子城は鳥取藩の支城として存続したが、明治になって廃城となった。

本地域周辺は、明治9年に島根県に編入されたが、明治14年には鳥取県に再編入されて現在に至っている。



## 第3章 尾高御建山遺跡の調査

### 第1節 尾高御建山遺跡の概要

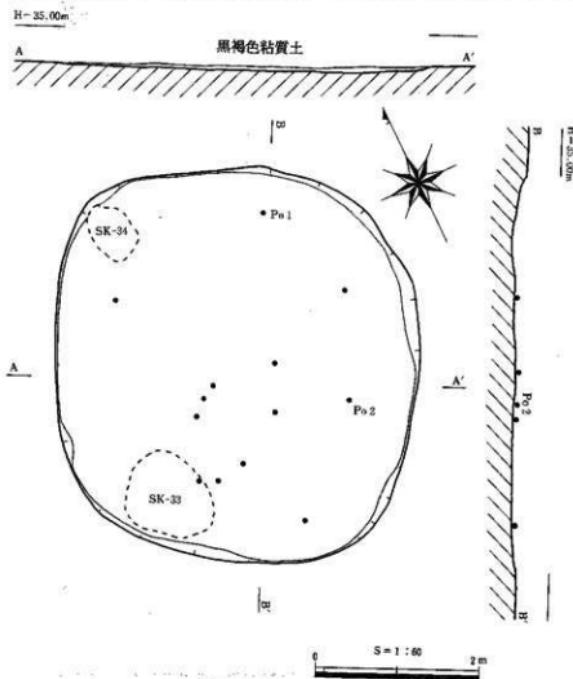
本年度調査を実施した尾高御建山遺跡には、縄文時代の落し穴と考えられる土坑33基、貯蔵穴と考えられる土坑2基、土壤墓と考えられるもの3基、性格不明の土坑23基、竪穴住居跡3、円形周溝1、中世の墓に関係すると考えられる方形周溝1を確認した。さらに、尾高古墳群に属する古墳時代中期から後期にかけての古墳が3基存在し、尾高古墳群の章で記述を行うこととする。

落し穴と考えられる土坑から出土した炭化木をもちいた放射性炭素年代測定を実施し、1基のみではあるが、当地域で比較的見つかるものの遺物をほとんど含まず時期の判定ができないことの多い落し穴の時期が明らかとなり、今後落し穴を考える上での好資料となった。

### 第2節 竪穴住居跡

S I-01 (挿図4・5 図版14)

位 置 調査区の東南側、G11・12グリッドに位置する。S I-01の南東約10mのところにS I-02が位置する。  
形 態 S I-01は、上部が削平を受け遺存状態は良くなかった。残存部は隅丸方形を呈する。



挿図4 S I-01遺構図

規模は、北東—南西4.8m、北西—南東4.4mを測り、床面積は約18m<sup>2</sup>と推測される。深さは最も遺存状態の良い所で0.15mである。

壁溝・柱穴は認められなかった。

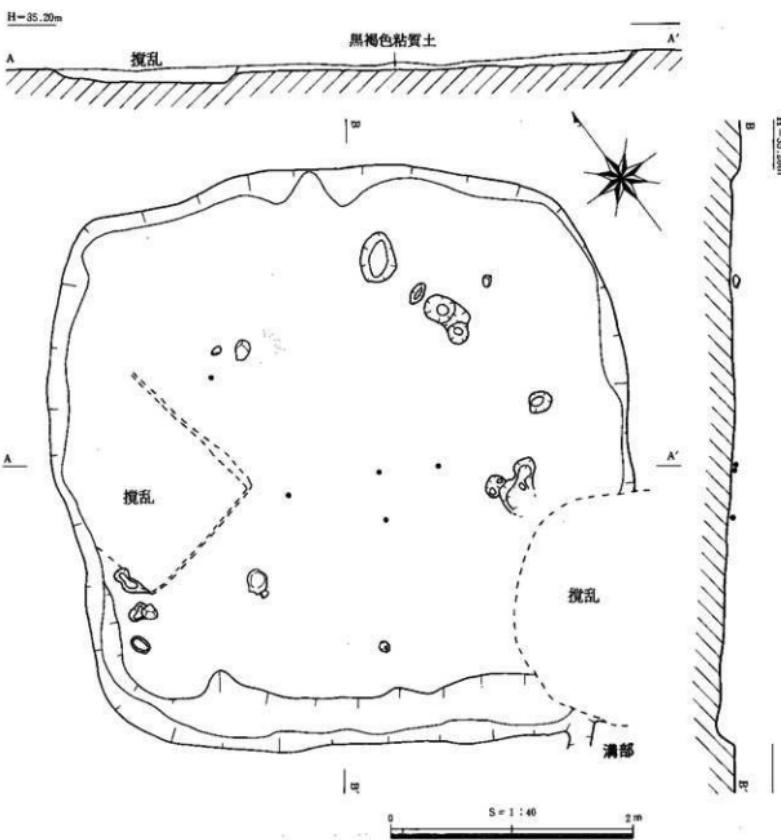
埋 土 埋土は耕作土を除いて4層に分層できる。残存部がわずかなため堆積状況を明らかにすることは出来なかつた。

遺 物 床面から、複合口縁をもつ甕Po1・2が出土した。

時 期 S I —01の時期は、出土した土器から古墳時代前期中頃と考えられる。



挿図5 SI-01土器実測図



挿図6 SI-02遺構図

### S I -02 (挿図 6・7 図版 1)

位 置 調査区の東南側、G 12グリッドに位置する。

S I -02の北西約10mのところにS I -01が位置する。

形 態 S I -02は、上部が削平を受けており、南隅も攪乱を受けている。遺存状態は良くなかった。残存部は方形を呈する。

規模は、北東—南西7.0m、北西—南東7.2mを測り、床面積は約49m<sup>2</sup>と推測される。深さは最も遺存状態の良い所で0.2mである。

壁溝・柱穴は認められなかった。

南隅部から南側の谷部に向かって溝が伸びている。溝の残存長は12.8m、幅0.35m、深さは北端部が0.58m、南端部が0.08mである。この溝はS I -02に伴うものであり、排水溝と推測される。

埋 土 埋土は耕作土を除いて3層に分層できる。残存部がわずかなため堆積状況を明らかにすることは出来なかった。

遺 物 埋土中から土師器片が出土したが、固化できなかった。

時 期 埋土中から出土した土師器は細片のため時期の判別は出来なかった。

### S I -03 (挿図 8・9 図版 1・14)

位 置 17号墳墳丘下より検出した。D 9グリッドに位置する。

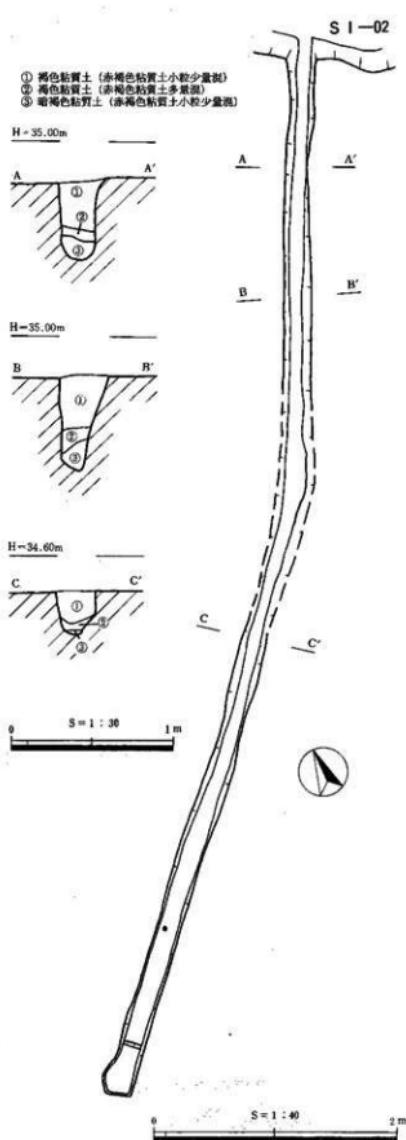
形 態 S I -03は、北半部が17号墳周溝によって削平されている。平面形は方形と考えられ、東西7.0m、残存南北5.3mを測り、残存部の床面積は約37m<sup>2</sup>である。

壁溝は南半部にはほぼ残っており、幅0.1m前後、深さ0.1m前後を測り、断面はU字状を呈する。

柱穴と考えられる穴が中央部やや南寄りに存在する。規模は(50×45-37)cmを測り、やや梢円形状を呈する。他には柱穴らしい痕跡は認められなかった。

焼土面 中心軸よりもやや西寄りで赤褐色の焼土面が検出された。

埋 土 17号墳の墳丘除去に伴い、S I -03の上部をかなり削平してしまい、埋土は底面近くが残っ

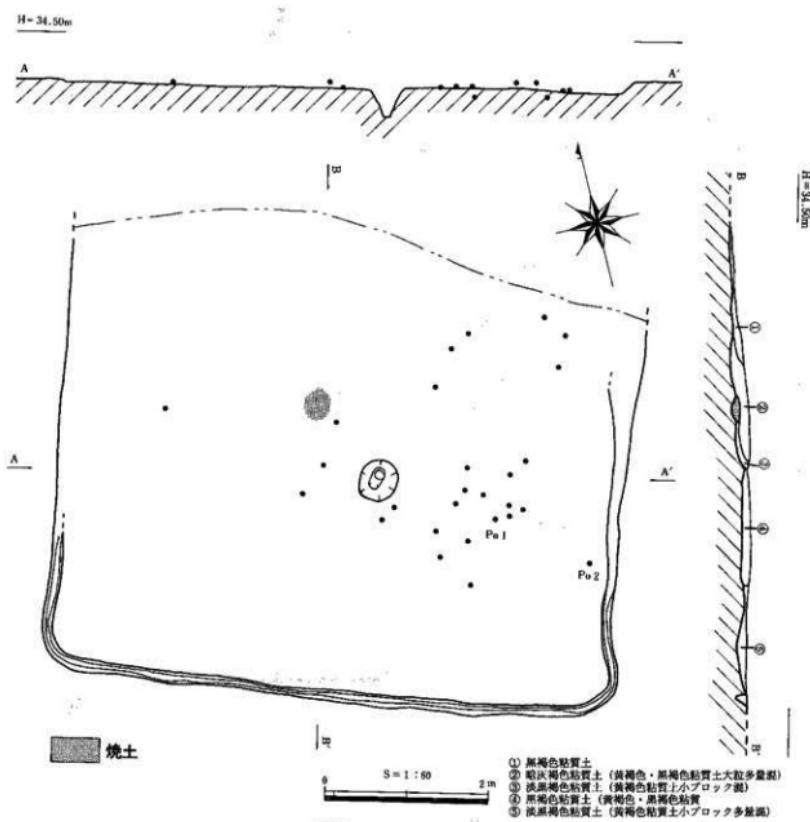


挿図 7 S I -02溝部遺構図

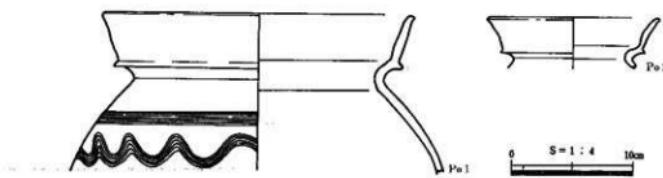
たのみである。埋土は5層に分層される。

遺 物 床面上から複合口縁をもつ壺Po 1・2が出土した。

時 期 S I - 03の時期は、出土した土器から古墳時代前期後半頃と考えられる。



插図8 S I - 03遺構図



插図9 S I - 03土器実測図

### 第3節 土坑・土壙墓

尾高御建山遺跡からは土坑・土壙墓が総計61基検出された。そのうち、3基が土壙墓と考えられるものであつた。残る58基の土坑のうち、底面ピットを持つそれに類する落し穴状土坑が33基、断面形がラスコ状を呈する袋状土坑が2基、その他が23基であった。

#### I. 落し穴

S K -01 (挿図10)

位 置 B10グリッドの西に位置し、台地平坦面に立地する。

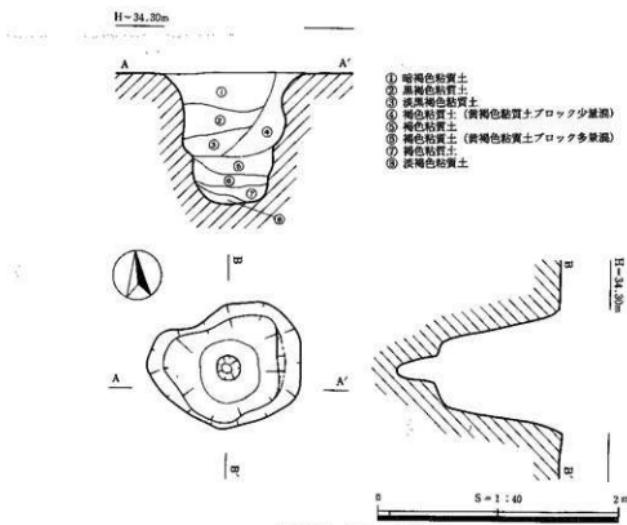
形 態 平面形・底面形は共に隅丸長方形を呈し、底面ピットを持つ。規模は、検出面では長径128cm・短径100cm・深さ107cm、底面では長径51cm・短径47cmを測る。底面ピットは径19cm・深さ33cmを測る。

土 層 埋土は、黒色粘質土系が6層、黒色粘質土系に黄褐色粘質土ブロックを含有するものが2層である。

遺 物 検出されなかった。

性 格 底面ピットの存在より落し穴と考えられる。

時 期 土坑の形態と埋土から考えると縄文時代のものと推定される。



挿図10 SK-01遺構図

### S K -05 (挿図11)

位 置 I 13グリッドの南東に位置し、台地平坦面に立地する。

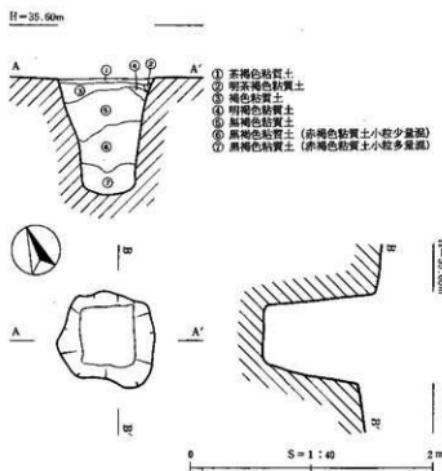
形 態 平面形は隅丸長方形、底面形は方形である。規模は、検出面では長径80cm・短径70cm・深さ95cm、底面では長径49cm・短径44cmを測る。

土 層 埋土は、黒色粘質土系が5層、黒色粘質土系に赤褐色粘質土小粒を含有するものが2層である。

遺 物 検出されなかった。

性 格 底面ピットは存在しないが、埋土が底面ピットの存在する土坑と共通することから落し穴と考えられる。

時 期 土坑の形態と埋土から考えると縄文時代のものと推定される。



挿図11 SK-05遺構図

### S K -06 (挿図12)

位 置 D 10グリッドの南に位置し、台地平坦面に立地する。

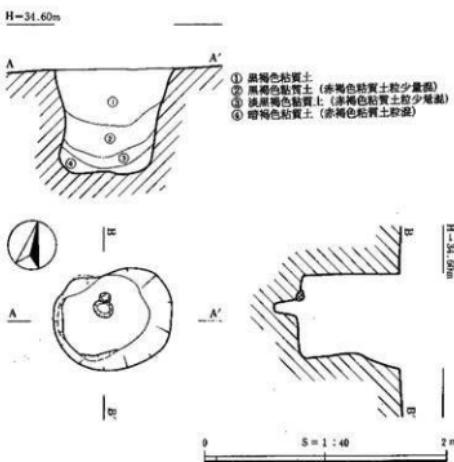
形 態 平面形・底面形は共に梢円形を呈し、底面ピットを持つ。規模は、検出面では長径97cm・短径83cm・深さ85cm、底面では長径72cm・短径56cmを測る。底面ピットは径17cm・深さ19cmを測る。

土 层 埋土は、黒色粘質土系が1層、黒色粘質土系に赤褐色粘質土粒を含有するものが3層である。

遺 物 土坑底部で自然疊1個を検出した。

性 格 底面ピットの存在より落し穴と考えられる。

時 期 土坑の形態と埋土から考えると縄文時代のものと推定される。



挿図12 SK-06遺構図

S K-07(挿図13)

位 置 B 8 グリッドの東に位置し、台地平坦面に立地する。

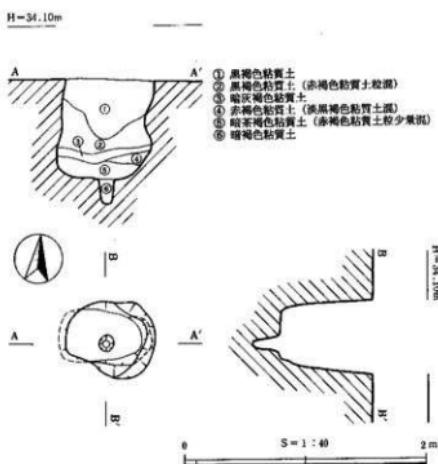
形 態 平面形・底面形は共に梢円形を呈し、底面ピットを持つ。規模は、検出面では長径74cm・短径61cm・深さ79cm、底面では長径70cm・短径43cmを測る。底面ピットは径13cm・深さ21cmを測る。

土 層 埋土は、黒色粘質土系が3層、黒色粘質土系に赤褐色粘質土粒を含有するものが2層、赤褐色粘質土系が1層である。

遺 物 検出されなかった。

性 格 底面ピットの存在より落し穴と考えられる。

時 期 土坑の形態と埋土から考えると縄文時代のものと推定される。



挿図13 S K-07遺構図

S K-14(挿図14)

位 置 E 6 グリッドの南東に位置し、台地平坦面突端部に立地する。

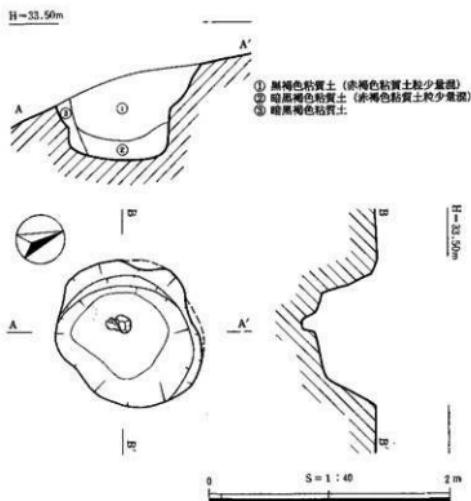
形 態 平面形・底面形は共に梢円形を呈し、底面ピットを持つ。規模は、検出面では長径133cm・短径117cm・深さ72cm、底面では長径72cm・短径62cmを測る。底面ピットは径14cm・深さ9cmを測る。

土 层 埋土は、黒色粘質土系が1層、黒色粘質土系に赤褐色粘質土粒を含有するものが2層である。

遺 物 土坑底部で自然縛1個を検出した。

性 格 底面ピットの存在より落し穴と考えられる。

時 期 土坑の形態と埋土から考えると縄文時代のものと推定される。



挿図14 S K-14遺構図

S K-18 (挿図15)

位 置 B 6 グリッドの南に位置し、台地平坦面突端部に立地する。

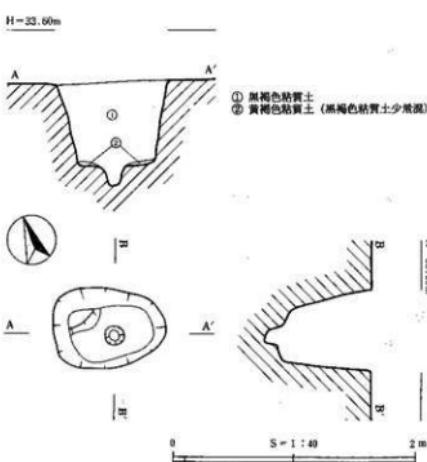
形 態 平面形・底面形は共に隅丸長方形を呈し、底面ピットを持つ。規模は、検出面では長径93cm・短径63cm・深さ70cm、底面では長径69cm・短径45cmを測る。底面ピットは径16cm・深さ16cmを測る。

土 層 埋土は、黒色粘質土系が1層、黄褐色粘質土系が1層である。

遺 物 検出されなかった。

性 格 底面ピットの存在より落し穴と考えられる。

時 期 土坑の形態と埋土から考えると縄文時代のものと推定される。



挿図15 SK-18遺構図

S K-19 (挿図16)

位 置 F 10 グリッドの東に位置し、台地平坦面に立地する。

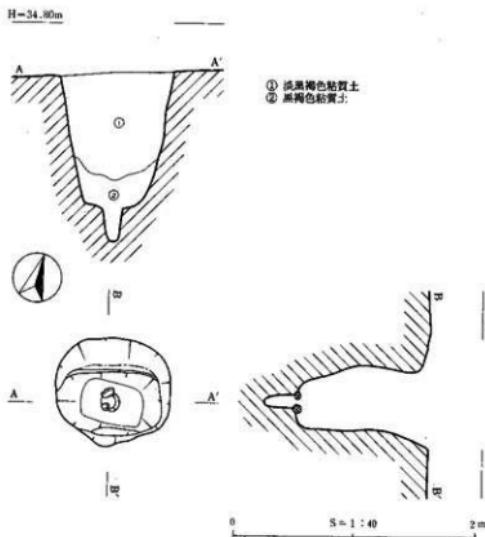
形 態 平面形・底面形は共に隅丸長方形を呈し、底面ピットを持つ。規模は、検出面では長径94cm・短径89cm・深さ112cm、底面では長径51cm・短径35cmを測る。底面ピットは径15cm・深さ25cmを測る。

土 层 埋土は、黒色粘質土系が2層である。

遺 物 底面ピット上端で自然隕2個を検出した。

性 格 底面ピットの存在より落し穴と考えられる。

時 期 土坑の形態と埋土から考えると縄文時代のものと推定される。



挿図16 SK-19遺構図

S K-20 (挿図17 図版3)

位置 F11グリッドの北西に位置し、台地平坦面に立地する。

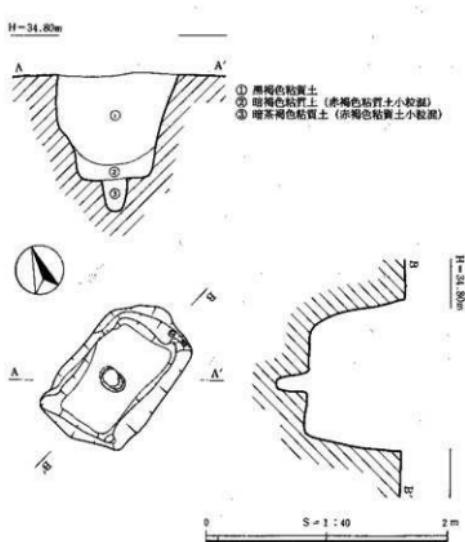
形態 平面形は隅丸長方形、底面形は長方形を呈し、底面ピットを持つ。規模は、検出面では長径126cm・短径81cm・深さ85cm、底面では長径88cm・短径48cmを測る。底面ピットは径21cm・深さ25cmを測る。

土層 埋土は、黒色粘質土系が1層、黒色粘質土系に赤褐色粘質土小粒を含有するものが2層である。

遺物 検出されなかった。

性格 底面ピットの存在より落し穴と考えられる。

時期 土坑の形態と埋土から考えると縄文時代のものと推定される。



挿図17 SK-20遺構図

S K-21 (挿図18)

位置 G11グリッドの西に位置し、台地平坦面突端部に立地する。

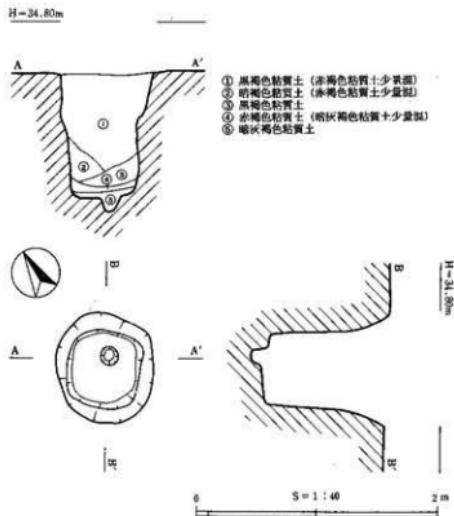
形態 平面形・底面形は共に隅丸長方形を呈し、底面ピットを持つ。規模は、検出面では長径89cm・短径79cm・深さ101cm、底面では長径58cm・短径52cmを測る。底面ピットは径14cm・深さ11cmを測る。

土層 埋土は、黒色粘質土系が2層、黒色粘質土系に赤褐色粘質土小粒を含有するものが2層、赤褐色粘質土系が1層である。

遺物 検出されなかった。

性格 底面ピットの存在より落し穴と考えられる。

時期 土坑の形態と埋土から考えると縄文時代のものと推定される。



挿図18 SK-21遺構図

S K - 22 (挿図19).

位 置 G12グリッドの南西に位置し、台地平坦面に立地する。

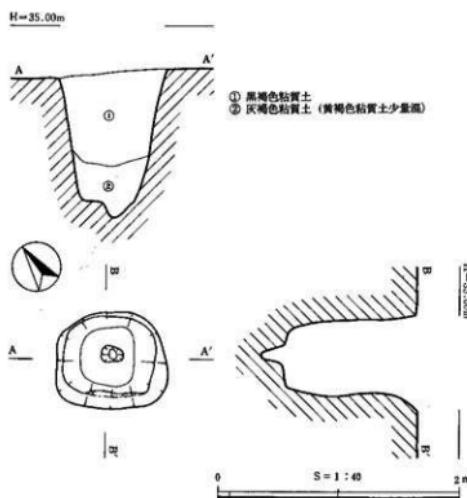
形 態 平面形・底面形は共に隅丸長方形を呈し、底面ピットを持つ。規模は、検出面では長径91cm・短径78cm・深さ103cm、底面では長径47cm・短径44cmを測る。底面ピットは径18cm・深さ13cmを測る。

土 層 埋土は、黒色粘質土系が1層、黒色粘質土系に黄褐色粘質土を少量含有するものが1層である。

遺 物 検出されなかった。

性 格 底面ピットの存在より落し穴と考えられる。

時 期 土坑の形態と埋土から考えると縄文時代のものと推定される。



挿図19 S K - 22造構図

S K - 23 (挿図20 図版3)

位 置 H12グリッドの東に位置し、台地平坦面に立地する。

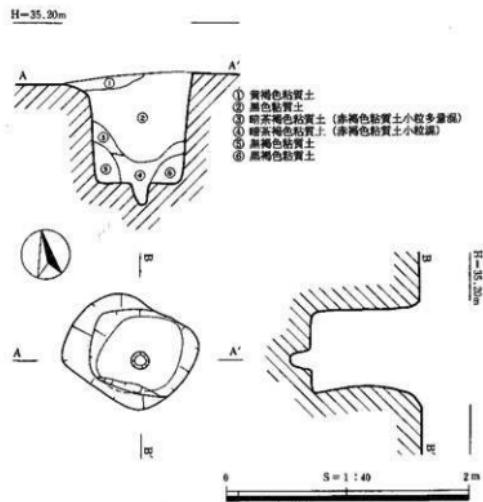
形 態 平面形・底面形は共に隅丸長方形を呈し、底面ピットを持つ。規模は、検出面では長径100cm・短径80cm・深さ89cm、底面では長径68cm・短径62cmを測る。底面ピットは径14cm・深さ17cmを測る。

土 层 埋土は、黒色粘質土系が3層、黒色粘質土系に赤褐色粘質土小粒を含有するものが2層、黄褐色粘質土系が1層である。

遺 物 検出されなかった。

性 格 底面ピットの存在より落し穴と考えられる。

時 期 土坑の形態と埋土から考えると縄文時代のものと推定される。



挿図20 S K - 23造構図

### SK-24 (挿図21)

位置 F9グリッドの中央に位置し、台地平坦面に立地する。

形態 平面形・底面形は共に隅丸長方形を呈し、底面ピットを持つ。規模は、検出面では長径122cm・短径77cm・深さ36cm、底面では長径114cm・短径74cmを測る。底面ピットは径30cm・深さ21cmを測る。

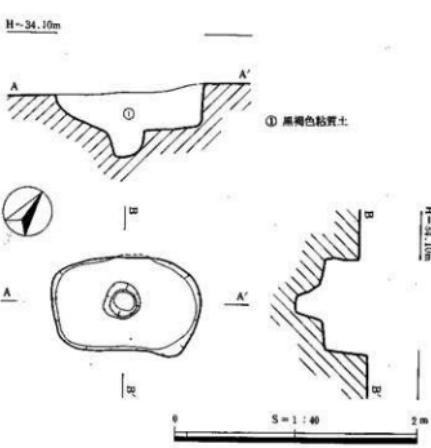
土層 埋土は、黒褐色粘質土系が1層である。

遺物 検出されなかった。

性格 底面ピットの存在より落し穴と考えられる。

時期 土坑の形態と埋土から考えると縄文時代のものと推定される。

その他 同様の形態を呈する他の土坑と比べて極めて深さが浅い。これは土坑上部が大きな削平を受けたためと考えられる。



挿図21 SK-24造構図

### SK-27 (挿図22)

位置 I12グリッドの北に位置し、台地平坦面に立地する。

形態 平面形・底面形は共に隅丸長方形を呈し、底面ピットを持つ。規模は、検出面では長径115cm・短径64cm・深さ22cm、底面では長径98cm・短径59cmを測る。底面ピットは径26cm・深さ22cmを測る。

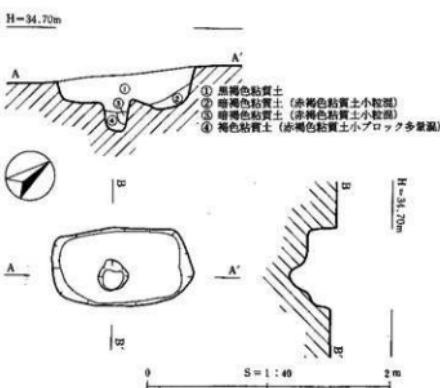
土層 埋土は、黒色粘質土系が1層、黒色粘質土系に赤褐色粘質土を含有するものが3層である。

遺物 検出されなかった。

性格 底面ピットの存在より落し穴と考えられる。

時期 土坑の形態と埋土から考えると縄文時代のものと推定される。

その他 検出状態からみて、この土坑は上部を削平されたため深さが浅くなっていると考えられる。



挿図22 SK-27造構図

S K -32 (挿図23)

位 置 F11グリッドの北西に位置し、台地平坦面に立地する。

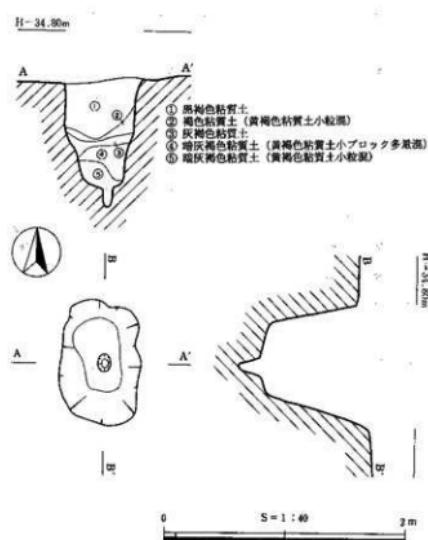
形 態 平面形・底面形は共に隅丸長方形を呈し、底面ピットを持つ。規模は、検出面では長径99cm・短径66cm・深さ90cm、底面では長径60cm・短径32cmを測る。底面ピットは径14cm・深さ17cmを測る。

土 層 埋土は、黒色粘質土系が2層、黒色粘質土系に黄褐色粘質土を含有するものが3層である。

遺 物 検出されなかった。

性 格 底面ピットの存在より落し穴と考えられる。

時 期 土坑の形態と埋土から考えると縄文時代のものと推定される。



挿図23 S K -32遺構図

S K -36 (挿図24)

位 置 C11グリッドの東に位置し、台地平坦面に立地する。

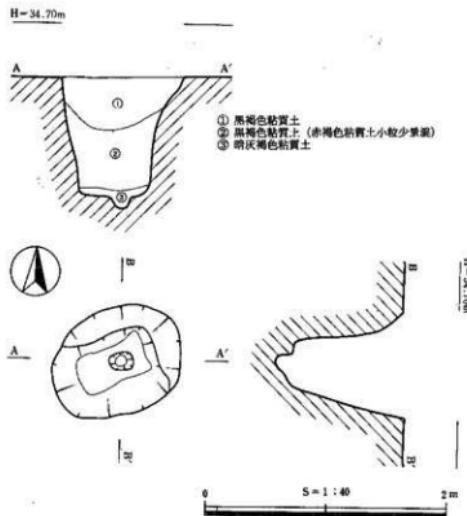
形 態 平面形・底面形は共に隅丸長方形を呈し、底面ピットを持つ。規模は、検出面では長径112cm・短径89cm・深さ97cm、底面では長径59cm・短径30cmを測る。底面ピットは径20cm・深さ9cmを測る。

土 层 埋土は、黒色粘質土系が2層、黒色粘質土系に赤褐色粘質土小粒を含有するものが1層である。

遺 物 検出されなかった。

性 格 底面ピットの存在より落し穴と考えられる。

時 期 土坑の形態と埋土から考えると縄文時代のものと推定される。



挿図24 S K -36遺構図

S K-37 (挿図25 図版2)

位 置 E13グリッドの南西に位置し、台地平坦面に立地する。

形 態 平面形は梢円形、底面形は円形を呈し、杭痕跡（杭を直接土坑底面に突き刺したと思われる小穴）を2つ持つ。規模は、検出面では長径93cm・短径80cm・深さ85cm、底面では長径50cm・短径47cmを測る。北側の杭痕跡は径8cm・深さ12cmを測り、南側の杭痕跡（⑯層）は径8cm・深さ12cmを測る。

土 層 埋土は、黒色粘質土系が13層、赤褐色粘質土系が2層である。底面部分の埋土は、黒色粘質土系に赤褐色粘質土を含有した層になっている。黒色粘質土系内の2層には炭小片が含まれている。

遺 物 北側の底面ピットを覆う位置で自然縛を1個検出した。

性 格 杭痕跡の存在より落し穴と考えられる。

時 期 土坑の形態と埋土から考えると縄文時代のものと推定される。

S K-38 (挿図26 図版2)

位 置 C12グリッドの北西に位置し、台地平坦面に立地する。

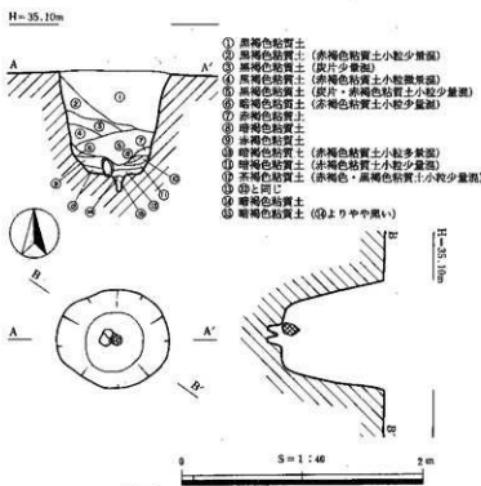
形 態 平面形・底面形は共に梢円形を呈し、底面ピットを持つ。規模は、検出面では長径100cm・短径76cm・深さ92cm、底面では長径47cm（推定）・短径42cmを測る。底面ピットは径17cm・深さ15cmを測る。

土 層 埋土は、黒色粘質土系が4層、黒色粘質土系に黄褐色・赤褐色土を含有するものが5層、黄褐色粘質土系が1層である。下層の⑥層は地山に類似する土質であるが壁面からの崩落とは考え難く、人為的に埋めた可能性も考えられる。

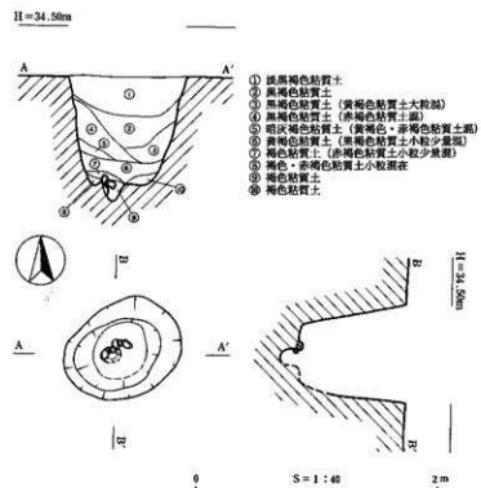
遺 物 底面ピット内で2個、上端で3個の計5個の自然縛を検出した。杭を固定する目的で利用されたと考えられる。

性 格 底面ピットの存在より落し穴と考えられる。

時 期 土坑の形態と埋土から考えると縄文時代のものと推定される。



挿図25 SK-37遺構図



挿図26 SK-38遺構図

S K-39 (挿図27 図版3)

位 置 B12グリッドの南東に位置し、台地平坦面に立地する。

形 態 平面形・底面形は共に隅丸長方形を呈し、底面ピットを持つ。規模は、検出面では長径80cm・短径59cm・深さ113cm、底面では長径45cm・短径28cmを測る。底面ピットは径19cm・深さ7cmを測る。

土 層 埋土は、黒色粘質土系が2層、黒色粘質土系に黄褐色粘質土を含有したものが4層である。

遺 物 底面で自然縛が1個、③・④層において炭化木を検出した。一部は壁に寄りかかるような状態を呈する。完全に炭化しており、人為的な加工の有無は不明である。底面ピットに伴う杭の可能性は低いが土坑が埋まり始めた早い段階のものである。

性 格 底面ピットの存在より落し穴と考えられる。

時 期 土坑内出土炭化木を2点に分けて<sup>14</sup>C年代測定を行った結果ではB.P.3420±15、B.P.3430±15という値が得られた。

S K-40 (挿図28 図版2)

位 置 B14グリッドの西に位置し、台地平坦面に立地する。

形 態 平面形・底面形は共に隅丸長方形を呈し、底面ピットを持つ。規模は、検出面では長径92cm・短径90cm・深さ97cm、底面では長径66cm・短径64cmを測る。底面ピットは径19cm・深さ23cmを測る。杭痕跡(⑩層)は径11cm・深さ41cmを測る。

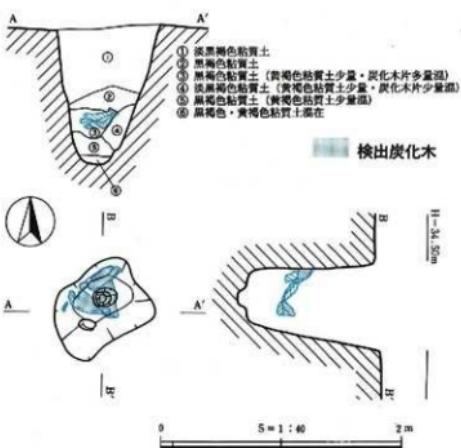
土 层 埋土は、黒色粘質土系が2層、黒色粘質土系に黄褐色・赤褐色粘質土を含有したものが16層である。

遺 物 検出されなかった。⑩層は杭の痕跡を示すと考えられる。

性 格 底面ピット・杭痕跡の存在より落し穴と考えられる。

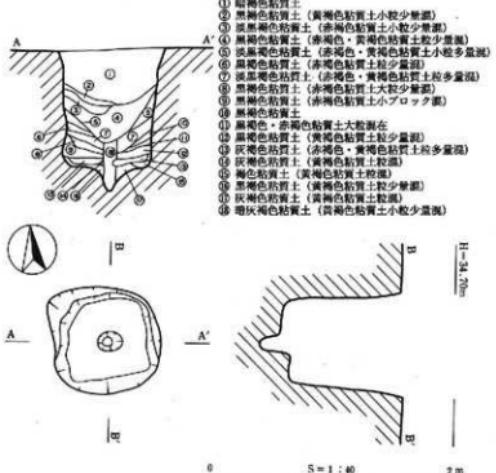
時 期 土坑の形態と埋土から考えると縄文時代のものと推定される。

H=34.50m



挿図27 SK-39遺構図

H=34.70m



挿図28 SK-40遺構図

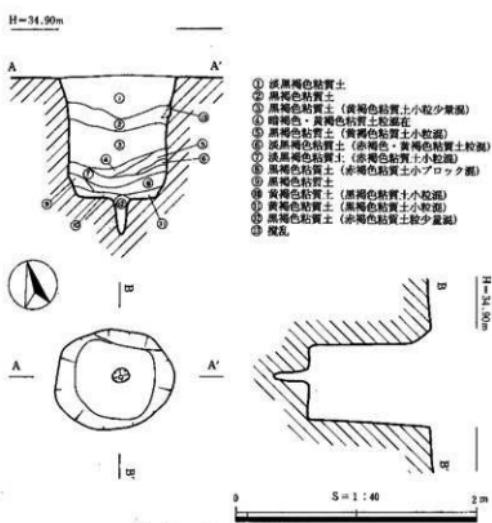
### S K-41 (挿図29)

位 置 C14グリッドの南東に位置し、台地平坦面に立地する。

形 態 平面形・底面形は共に隅丸長方形を呈し、底面ピットを持つ。規模は、検出面では長径97cm・短径80cm・深さ100cm、底面では長径66cm・短径61cmを測る。底面ピットは径14cm・深さ29cmを測る。

土 層 埋土は、黒色粘質土系が3層、黒色粘質土系に黄褐色・赤褐色粘質土を含有するものが7層、黄褐色粘質土系が2層である。

遺 物 検出されなかった。  
性 格 底面ピットの存在より落し穴と考えられる。  
時 期 土坑の形態と埋土から考えると縄文時代のものと推定される。



挿図29 SK-41遺構図

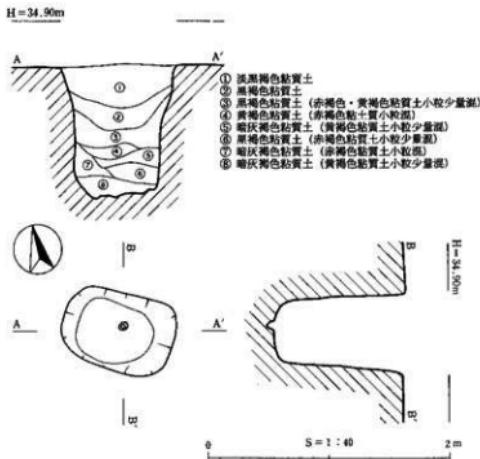
### S K-42 (挿図30)

位 置 D14グリッドの北に位置し、台地平坦面に立地する。

形 態 平面形・底面形は共に隅丸長方形を呈し、杭痕跡を持つ。規模は、検出面では長径94cm・短径64cm・深さ107cm、底面では長径61cm・短径47cmを測る。杭痕跡は径7cm・深さ6cmを測る。

土 層 埋土は、黒色粘質土系が2層、黒色粘質土系に黄褐色・赤褐色粘質土を含有するものが5層、黄褐色粘質土系が1層である。

遺 物 検出されなかった。  
性 格 杭痕跡の存在より落し穴と考えられる。  
時 期 土坑の形態と埋土から考えると縄文時代のものと推定される。



挿図30 SK-42遺構図

### SK-43 (挿図31)

位置 D14グリッドの中央に位置し、台地平坦面に立地する。

形態 平面形・底面形は共に橢円形を呈し、底面ピットを持つ。規模は、検出面では長径109cm・短径93cm・深さ83cm、底面では長径52cm・短径41cmを測る。底面ピットは径14cm・深さ24cmを測る。

土層 埋土は、黒色粘質土系が2層、黒色粘質土系に赤褐色粘質土を含有するものが5層である。

遺物 底面ピットの上端より自然縛を3個検出した。杭を固定する目的で利用されたと考えられる。

性格 底面ピットの存在より落し穴と考えられる。

時期 土坑の形態と埋土から考えると縄文時代のものと推定される。

### SK-44 (挿図32)

位置 E14グリッドの北東に位置し、台地平坦面に立地する。

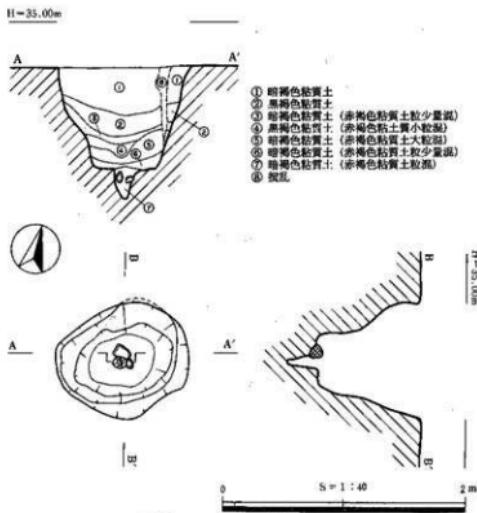
形態 平面形・底面形は共に隅丸長方形を呈し、底面ピットを持つ。規模は、検出面では長径100cm・短径92cm・深さ104cm、底面では長径67cm・短径58cmを測る。底面ピットは径27cm・深さ12cmを測る。

土層 埋土は、黒色粘質土系が1層、黒色粘質土系に黄褐色・赤褐色粘質土粒を含有するものが10層である。

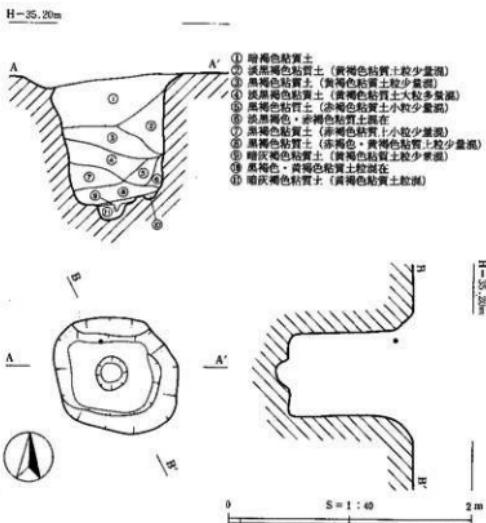
遺物 ①層中から弥生土器の可能性が強い脣部片が1点出土したが、小片であるため図化はできなかった。

性格 底面ピットの存在より落し穴と考えられる。

時期 土坑の形態と埋土から考えると縄文時代の落し穴とした他の土坑と同じであるが、土坑上面から弥生土器と考えられる脣部片が出土したことから時期が弥生時代に下る可能性もある。



挿図31 SK-43遺構図



挿図32 SK-44遺構図

### S K - 46 (挿図33)

位置 C15グリッドの中央に位置し、台地平坦面に立地する。

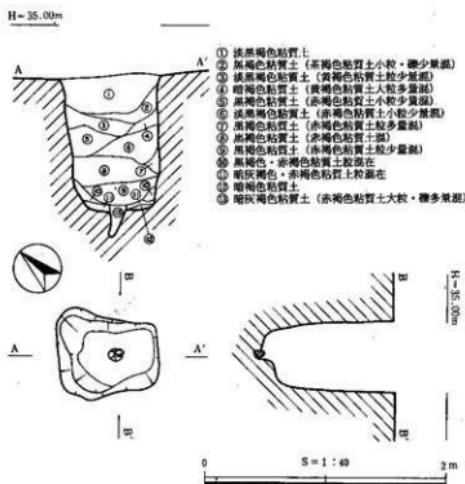
形態 平面形・底面形は共に隅丸長方形を呈し、底面ピットを持つ。規模は、検出面では長径83cm・短径61cm・深さ111cm、底面では長径63cm・短径37cmを測る。底面ピットは径13cm・深さ23cmを測る。

土層 埋土は、黒色粘質土系が3層、黒色粘質土系に黄褐色・赤褐色粘質土を含有するものが10層である。

遺物 底面ピットの中に自然縫が1個落ち込んでいる。

性格 底面ピットの存在より落し穴と考えられる。

時期 土坑の形態と埋土から考えると縄文時代のものと推定される。



挿図33 SK-46遺構図

### S K - 47 (挿図34)

位置 C16グリッドの北西に位置し、台地平坦面に立地する。

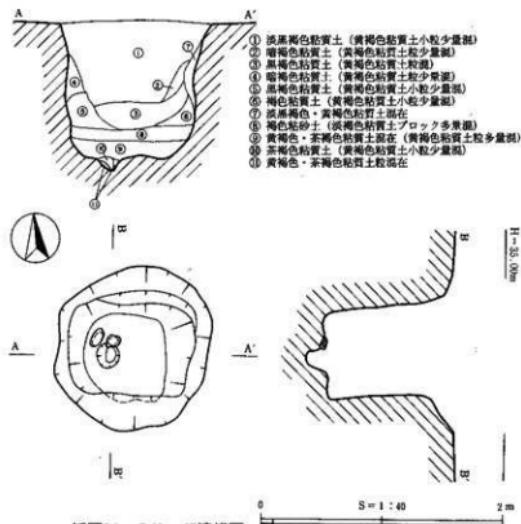
形態 平面形・底面形は共に隅丸長方形を呈し、底面ピットを持つ。規模は、検出面では長径135cm・短径124cm・深さ110cm、底面では長径70cm・短径68cmを測る。底面ピットは径20cm・深さ13cmを測る。

土層 埋土は、黒色粘質土系が1層、黒色粘質土系に黄褐色粘質土を含有するものが8層、黄褐色粘質土系が2層である。SK-38と同様に下層の⑧・⑨層は地山に類似する埋土である。

遺物 底面ピットの上端で自然縫を1個、その近くでも1個の自然縫を検出した。

性格 底面ピットの存在より落し穴と考えられる。

時期 土坑の形態と埋土から考えると縄文時代のものと推定される。



挿図34 SK-47遺構図

### S K-48 (挿図35)

位 置 B19グリッドの南西に位置し、台地平坦面に立地する。

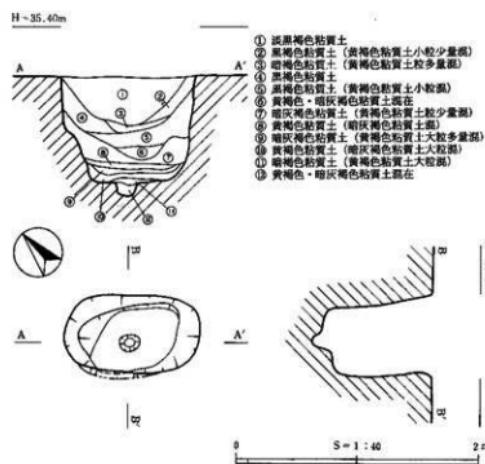
形 態 平面形・底面形は共に橢円形を呈し、底面ピットを持つ。規模は、検出面では長径111cm・短径63cm・深さ87cm、底面では長径70cm・短径50cmを測る。底面ピットは径16cm・深さ11cmを測る。

土 層 埋土は、黒色粘質土系が2層、黒色粘質土系に黄褐色粘質土を含有するものが6層、黄褐色粘質土系が4層である。

遺 物 検出されなかった。

性 格 底面ピットの存在より落し穴と考えられる。

時 期 土坑の形態と埋土から考えると縄文時代のものと推定される。



挿図35 S K-48遺構図

### S K-50 (挿図36)

位 置 D19グリッドの北に位置し、台地平坦面に立地する。

S K-49を切っている。

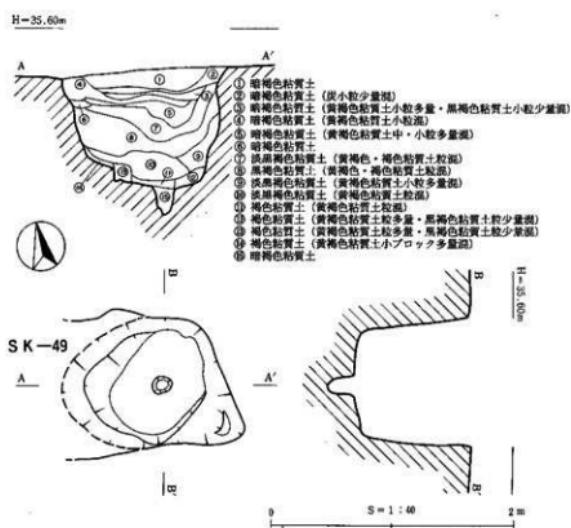
形 態 平面形・底面形は共に隅丸長方形を呈し、底面ピットを持つ。規模は、検出面では長径109cm・短径83cm・深さ99cm、底面では長径90cm・短径63cmを測る。底面ピットは径15cm・深さ22cmを測る。

土 层 埋土は、黒色粘質土系が3層、黒色粘質土系に黄褐色粘質土を含有するものが11層、暗褐色粘質土に炭小粒を少量含有するものが1層である。

遺 物 検出されなかった。

性 格 底面ピットの存在より落し穴と考えられる。

時 期 土坑の形態と埋土から考えると縄文時代のものと推定される。



挿図36 S K-50遺構図

### S K - 51 (挿図37)

位 置 D 15 グリッドの南に位置し、台地平坦面に立地する。

形 態 平面形・底面形は共に隅丸長方形を呈し、底面ピットを持つ。規模は、検出面では長径 111cm・短径 74cm・深さ 114cm、底面では長径 60cm・短径 49cm を測る。底面ピットは径 17cm・深さ 25cm を測る。

土 層 埋土は、黒色粘質土系が 3 層、黒色粘質土系に黄褐色粘質土粒を含有するものが 6 層、黄褐色粘質土系が 3 層である。黒色粘質土系の内の 5 層には炭片が含まれている。

遺 物 検出されなかった。

性 格 底面ピットの存在より落し穴と考えられる。

時 期 土坑の形態と埋土から考えると縄文時代のものと推定される。

### S K - 52 (挿図38)

位 置 E 8 グリッドの北東に位置し、台地平坦面に立地する。

形 態 平面形・底面形は共に隅丸長方形を呈し、底面ピットを持つ。規模は、検出面では長径 124cm・短径 66cm・深さ 61cm、底面では長径 109cm・短径 60cm を測る。底面ピットは径 22cm・深さ 34cm を測る。杭痕跡 (②層) は径 12cm・深さ 24cm を測る。

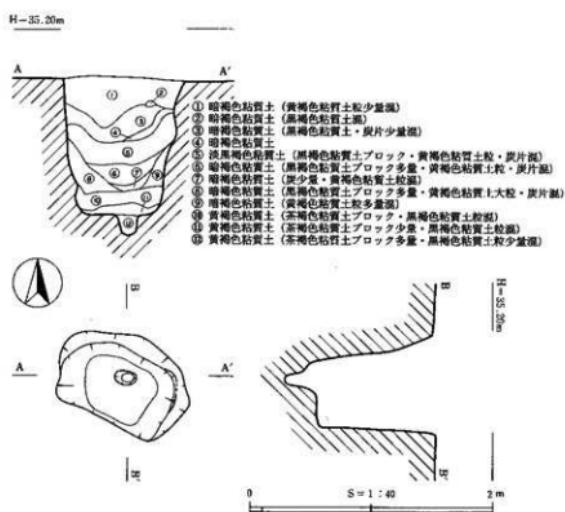
土 层 埋土は、黒色粘質土系が 1 層、黒色粘質土系に赤褐色粘質土粒を含有するものが 2 層である。

遺 物 検出されなかった。

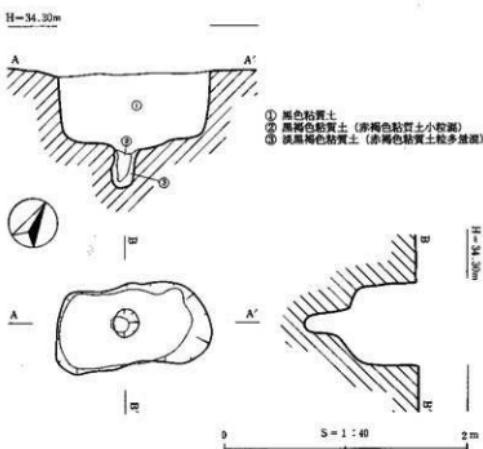
性 格 底面ピットの存在より落し穴と考えられる。

時 期 土坑の形態と埋土から考えると縄文時代のものと推定される。

その他 この土坑は他の土坑に比べて深さが浅いが、17号墳墳丘下より検出したものであり古墳築造以後の削平は考えられない。よって、古墳築造以前に上部を削平されていたと考えられる。



挿図37 S K - 51 遺構図



挿図38 S K - 52 遺構図

### SK-53 (挿図39)

位置 C19グリッドの北東に位置し、台地平坦面に立地する。

形態 平面形・底面形は共に隅丸長方形を呈し、底面ピットを持つ。規模は、検出面では長径102cm・短径95cm・深さ104cm、底面では長径71cm・短径54cmを測る。底面ピットは径16cm・深さ16cmを測る。

土層 埋土は、黒色粘質土系が2層、黒色粘質土系に黄褐色・赤褐色粘質土を含有するものが15層、黄褐色粘質土系が2層である。

遺物 底面ピットの中で自然疊が4個検出された。杭の固定に利用されたと考えられる。

性格 底面ピットの存在より落し穴と考えられる。

時期 土坑の形態と埋土から考えると縄文時代のものと推定される。

### SK-55 (挿図40)

位置 B7グリッドの東に位置し、台地平坦面突端部に立地する。

形態 平面形・底面形は共に楕円形を呈し、底面ピットを持つ。規模は、検出面では長径114cm・短径102cm・深さ102cm、底面では長径64cm・短径56cmを測る。底面ピットは径16cm・深さ12cmを測る。

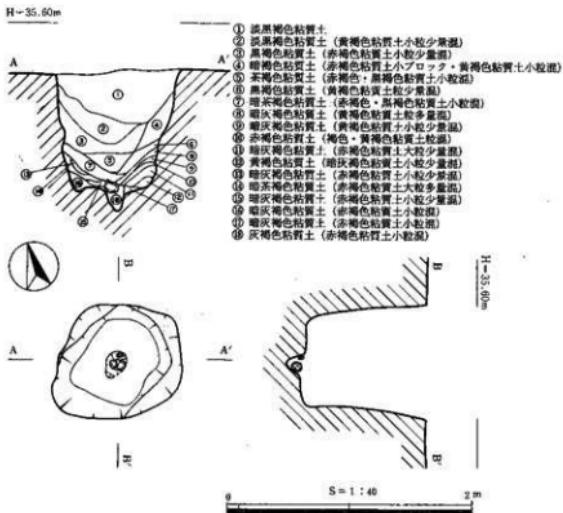
土層 埋土は、黒色粘質土系が3層、黒色粘質土系に赤褐色粘質土粒を含有するものが7層、黄褐色粘質土系が1層である。黒色粘質土系の層内3層には炭片が含まれている。

遺物 底面ピットの上部で自然疊を1個検出した。

性格 底面ピットの存在より落し穴と考えられる。

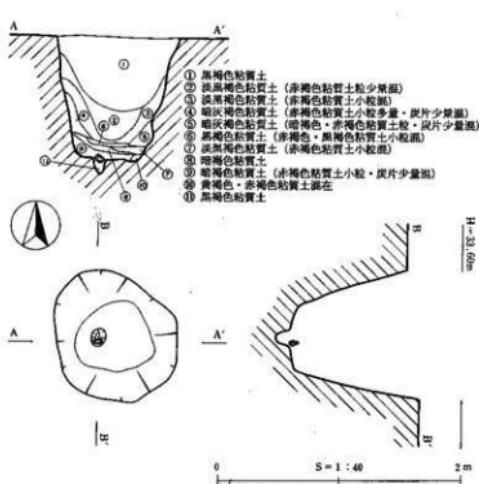
時期 土坑の形態と埋土から考えると縄文時代のものと推定される。

その他 この土坑は19号墳丘下より検出した。



挿図39 SK-53遺構図

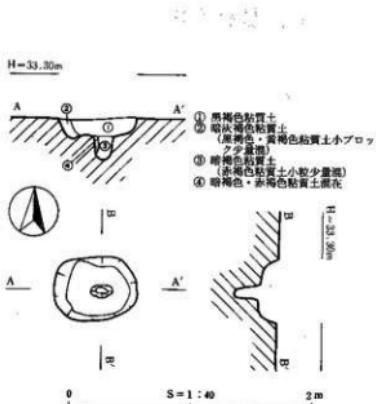
H=33.60m



挿図40 SK-55遺構図

### SK-57 (挿図41)

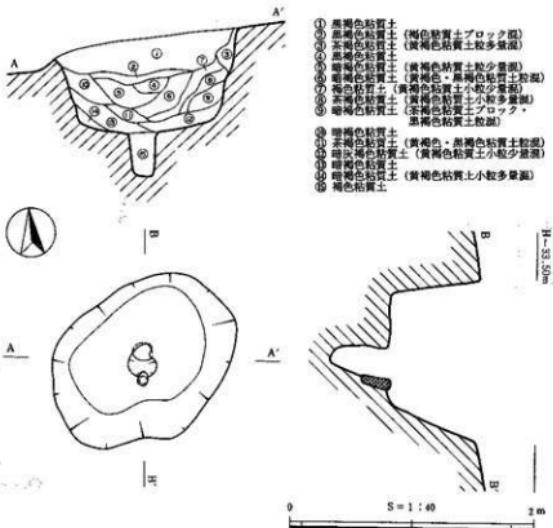
位置 D 6 グリッドの東に位置し、台地平坦面に立地する。  
 形態 平面形・底面形は共に梢円形を呈し、底面ピットを持つ。規模は、検出面では長径67cm・短径52cm・深さ15cm、底面では長径51cm・短径41cmを測る。底面ピットは径18cm・深さ19cmを測る。  
 土層 埋土は、黒色粘質土系が1層、黒色粘質土系に黄褐色・赤褐色粘質土を含有するものが3層である。  
 遺物 検出されなかった。  
 性格 底面ピットの存在より落し穴と考えられる。  
 時期 土坑の形態と埋土から考えると縄文時代のものと推定される。  
 その他 この土坑は方形周溝の周溝底部より検出したものであり、方形周溝掘削のときに上部を大きく破壊されている。



挿図41 SK-57 造構図

### SK-58 (挿図42)

位置 B 6 グリッドの北東に位置し、台地平坦面突端部に立地する。  
 形態 平面形・底面形は共に梢丸長方形を呈し、底面ピットを持つ。規模は、検出面では長径164cm・短径126cm・深さ79cm、底面では長径117cm・短径73cmを測る。H=33.50m  
 を測る。底面ピットは径22cm・深さ46cmを測る。  
 土層 埋土は、黒色粘質土系が7層、黒色粘質土系に黄褐色粘質土粒を含有するものが8層である。  
 遺物 底面ピットの中で自然礫を1個検出した。  
 性格 底面ピットの存在より落し穴と考えられる。  
 時期 土坑の形態と埋土から考えると縄文時代のものと推定される。  
 その他 この土坑は19号墳丘下より検出した。



挿図42 SK-58 造構図

## II. 袋状土坑

S K - 03 (挿図43)

位 置 I 13グリッドの南東に位置し、台地平坦面に立地する。

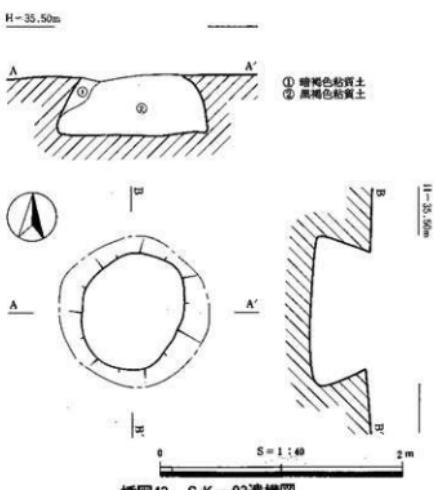
形 態 平面形・底面形共に円形である。規模は、検出面では長径97cm・短径82cm・深さ52cm、底面では長径125cm・短径123cmを測り、袋状を呈する。

土 層 埋土は、黒色粘質土系が2層である。

遺 物 検出されなかった。

性 格 貯蔵穴として使用されたと考えられる。

時 期 不明である。



挿図43 SK-03遺構図

S K - 04 (挿図44)

位 置 J 14グリッドの北に位置し、台地平坦面突端部に立地する。

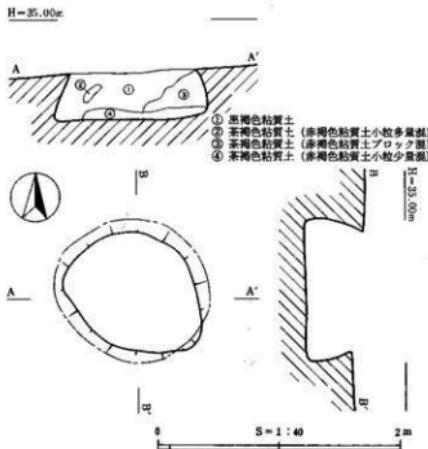
形 態 平面形・底面形共に稍円形である。規模は、検出面では長径118cm・短径96cm・深さ49cm、底面では長径130cm・短径114cmを測り、袋状を呈する。

土 層 埋土は、黒色粘質土系が1層、黒色粘質土系で赤褐色粘質土を含有するものが3層である。

遺 物 検出されなかった。

性 格 貯蔵穴として使用されたと考えられる。

時 期 不明である。



挿図44 SK-04遺構図

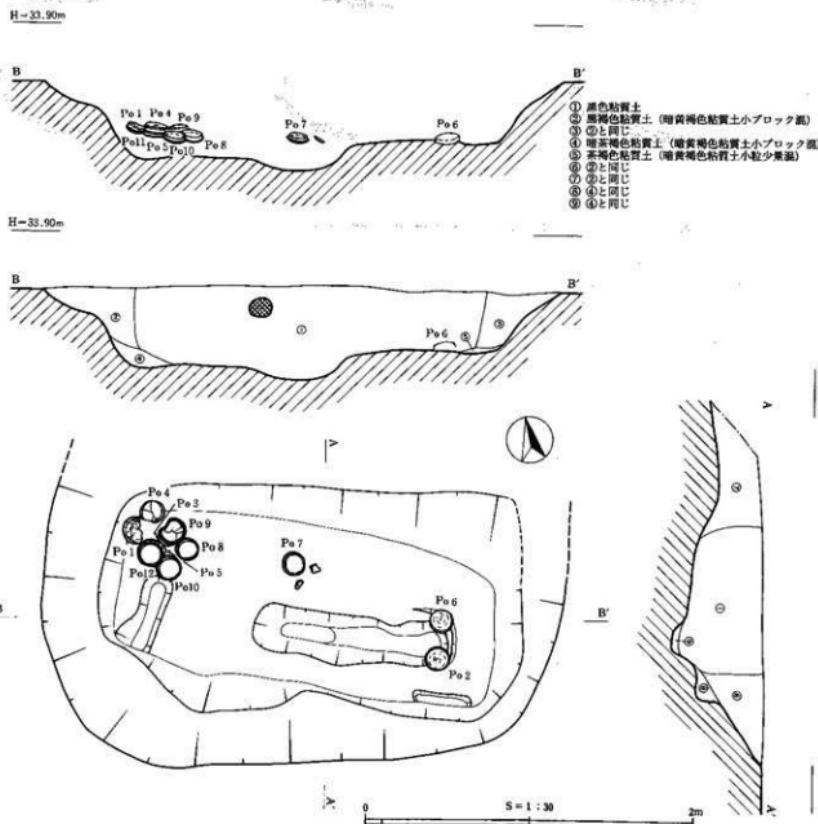
### III. 土壌墓

S K-02 (挿図45~47 図版4・15)

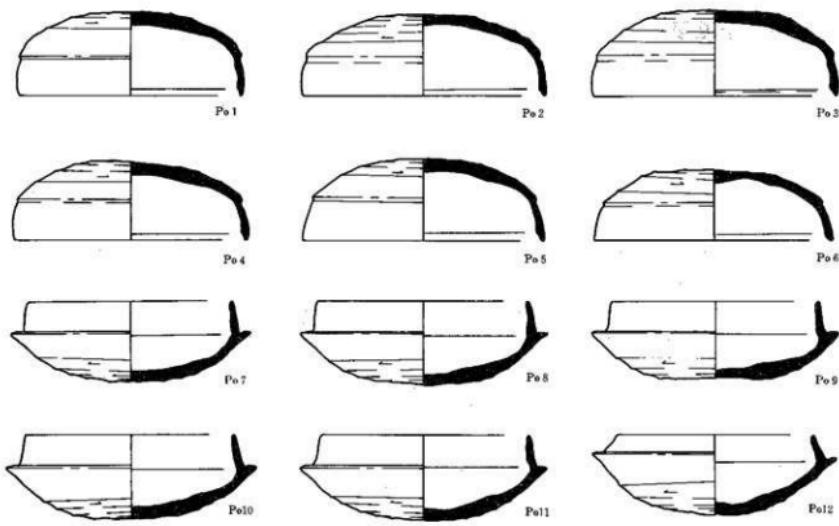
位 置 18号墳の南側、D 7グリッドの南西に位置する。北側を方形周溝に破壊されており、18号墳周溝との関係は不明である。

形 態 掘り方の平面形は2段掘りの隅丸長方形で長軸方向はE-20°-Sであり、1段目の規模は長軸3.2m、短軸2.3m以上、検出面からの深さは0.2~0.3mであり、上縁から斜めに掘り込まれる。2段目の規模は長軸2.6m、短軸東側1.4m、西側1.0m、深さ0.2mで、1段目より直立気味に掘り込まれる。底面の規模は長軸2.3m、短軸0.9~1.0mを測る。

底面には、長軸・短軸に平行する溝状の窪みがある。長軸に平行する窪みは長さ1.2m、幅0.3mを測る。東側端部上に土器枕と考えられる須恵器が存在することから排水を意図したものと推測される。短軸に平行する窪みは底部西端に位置することから小口穴と考えられる。



挿図45 S K-02遺構図



挿図46 SK-02土器実測図  
S = 1 : 3 10cm

**主体部** 埋葬主体は、土層観察から長さ2.1m、幅0.8m前後の箱型木棺、頭位は東頭位と推測される。

**遺物** 遺物は、底面直上より須恵器壺蓋6点、壺身6点、底面付近より鉄錠1点が出土した。遺物は木棺内と木棺外に分けられる。

木棺内に置かれたと考えられるのはPo 2・6である。ともに内面を下に向けて置かれた壺蓋で底面からわずかに浮いていた。土器枕として利用されたと考えられる。残る10点は棺外に置かれたと考えられるもので、その内Po 1～3・5の壺蓋と7～10・12の壺身が墓壙底面の北西隅に一括して置かれていた。配置には2×3の規則性が認められ、一部重ね置きされたものもある。壺蓋のPo 1以外は内面を上に向けて置かれており、Po 1と11は蓋身の合わされたセット状態、Po 3と9、Po 5と12は壺身を上にして重ね置きされた状態で出土した。

Po 7は内面を上に向けて置かれた壺身であり、木棺横に置かれたことが推測される。なお、掘り下げ中にPo 7の近くからF 1の鉄錠が出土した。

遺物の詳細については観察表に譲るが、埋葬時期を判定する目安である蓋壺類を検討する。

壺蓋Po 1～6は口径15cm前後で口縁端部内面に段を有する。口縁部と天井部の境の稜は鈍い。外面調整は天井部の1/2～2/3にヘラケズリを施す。壺身は形態から2つに分けられる。Po 7～11は口径13～14cmでたちあがりはやや内傾するが直立気味であり、たちあがり端部は丸くおさめる。受部は短くや上向きに伸びる。外面調整は底面の1/2～2/3にヘラケズリを施す。Po 12はたちあがりが短く、内傾が大きい。たちあがり端部は丸くおさめる。受部は短く上向きに伸びる。外面調整は底面の1/2前後にヘラケズリを施す。



挿図47  
SK-02鉄器実測図  
S = 1 : 2 5cm

**時 期** これらの蓋坏類の時期は坏蓋 6 点と坏身の Po 7 ~ 11 は陰田編年<sup>(10)</sup> 3 期、坏身 Po12 は陰田編年 4 期に属するものであり、6 世紀中葉～後葉に位置付けられる。

**問題点** 当遺構からは、1 形式に相当する形態の異なる須恵器が共伴して出土した。これは、須恵器の受容・流通において、従来考えられていた時間幅に再考の必要性があることを示唆している。今後、検討していく必要があろう。

(註)『陰田』米子市教育委員会 1984

**SK-11 (挿図48 図版5)**

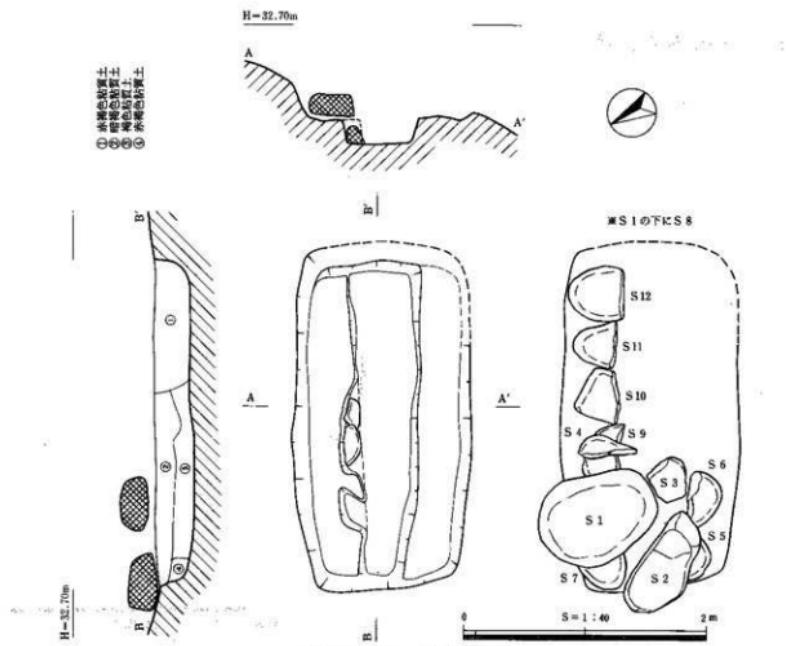
**位 置** E 6 グリッドの南西に位置し、台地平坦面突端部に立地する。

**形 態** 平面形・底面形は共に長方形である。2段掘り込みになっており、2段目は岩盤層を掘り込んでいる。

規模は、検出面では長径 143cm 程度・短径 72cm、1段目底面は長径 132cm 程度・短径 60cm・深さ 15cm、2段目底面は長径 125cm・短径 27cm・深さ 10cm を測る。土坑上には集石があり、1段目の底面直上には割れ面を内側に向けた 2 列 8 個 (S 5 ~ 12) の石列が検出された。8 個共に長径 40cm 程度の石を半分に割ったもので、S 6 と S 8・S 9 と S 10・S 11 と S 12 はそれぞれ接合した。東南側では検出出来なかつたが、これは流失したものと考えられ、S 5・7 と接合するものもあったと思われる。それらの石を覆うように長径 50cm 程度の石が 2 個 (S 1・2) 残っている。東南部が大きく流失していることから考えると、石列を覆うようにやや大きめの石が東側にも続いていると思われる。

**土 層** 埋土は、暗褐色粘土系が 2 层、赤褐色粘土系が 2 層である。

**性 格** 1段目底面直上の石列は 2段目掘り込みの肩部にはほぼ対応することから、掘り込みの深さを補う意図がうかがえる。東西軸の東側は幅が広がるうえにその延長上には古代以来靈山として知られた大山が位



挿図48 SK-11 遺構図

置する。これらのことから、東頭位の土壤基と考えられる。

遺物 検出されなかった。

時期 不明である

#### SK-15 (挿図49 図版5)

位置 E 6 グリッドの南東に位置し、台地平坦面  
突端部に立地する。

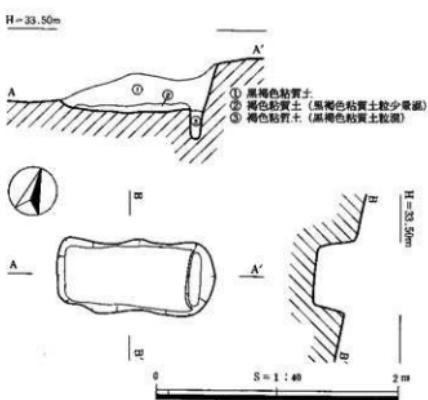
形態 平面形・底面形は共に長方形である。規模  
は、検出面では長径129cm・短径59cm・深さ38  
cm、底面では長径109cm・短径48cmを測るが、  
西側は削平が激しく遺存状況は悪い。底面東  
側に幅40cm・深さ24cmの掘り込みが存在する。

土層 埋土は、黒褐色粘質土が1層、褐色粘質土  
系で黒褐色粘質土を含有するものが2層であ  
る。

性格 底面東側の掘り込みは木棺の木口部固定用  
のものと考えられることから、土壤基と思わ  
れる。

遺物 検出されなかった。

時期 不明である



挿図49 SK-15遺構図

## IV. その他の土坑

#### SK-08 (挿図50)

位置 C 8 グリッドの北西に位置し、台地平坦面に立地する。

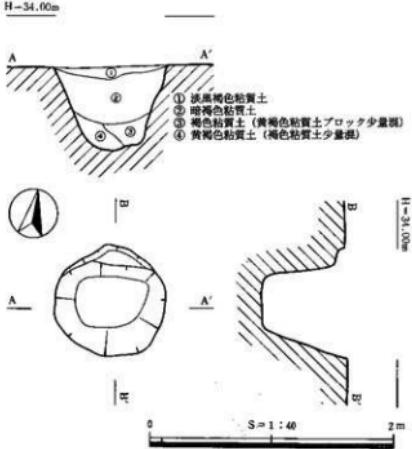
形態 平面形は円形、底面形は不整長方形である。  
規模は、検出面では長径93cm・短径89cm・深さ  
68cm、底面では長径58cm・短径42cmを測る。

土層 埋土は、黒色粘質土系が2層、黒色粘質土  
系で黄褐色粘質土を含有するものが1層、黃  
褐色粘質土系が1層である。

遺物 検出されなかった。

性格 不明である。

時期 不明である。



挿図50 SK-08遺構図

S K-09 (挿図51・52 図版14)

位 置 B 9 グリッドの西に位置し、台地平坦面に立地する。

形 態 平面形・底面形は共に梢円形である。規模は、検出面では長径91cm・短径78cm・深さ34cm、底面では長径82cm・短径76cmを測る。

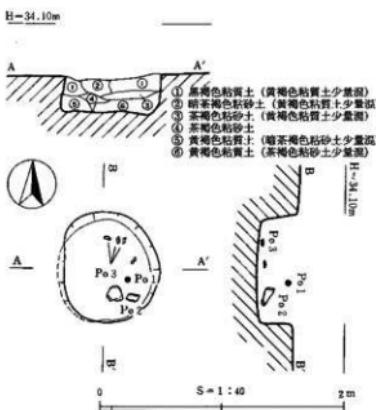
土 層 埋土は、暗褐色粘質土系が3層、暗褐色粘質土系で赤褐色粘質土を含有するものが2層、赤褐色粘質土系が1層である。

遺 物 埋土上部よりPo 1、底面よりPo 2・3が出土した。

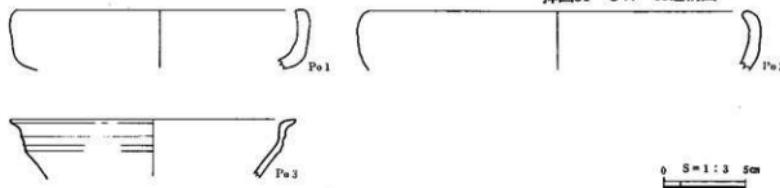
Po 1・2は共に煤が付着した焰壺の口縁部であり、Po 3は唐津の皿の口縁部である。

性 格 不明である。

時 期 出土遺物より、16世紀代と考えられる。



挿図51 SK-09遺構図



挿図52 SK-09土器実測図

S K-10 (挿図53)

位 置 F 9 グリッドの北に位置し、台地平坦面に立地する。

形 態 平面形は梢円形、底面形は不定形である。規模は、検出面では長径119cm・短径93cm・深さ45cm、底面では長径86cm・短径41cmを測る。

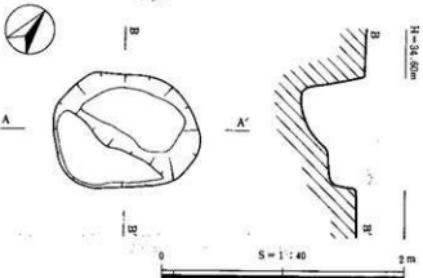
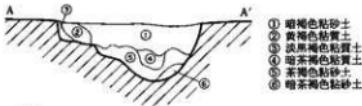
H=34.60m

土 層 埋土は、黒色粘質土系が3層、黑色粘砂土系が3層である。

遺 物 検出されなかった。

性 格 不明である。

時 期 不明である。



挿図53 SK-10遺構図

S K-12 (挿図54)

位 置 D 6 グリッドの南西に位置し、台地平坦面に立地する。

形 態 平面形・底面形は共に隅丸長方形である。規模は、検出面では長径116cm・短径87cm・深さ24cm、底面では長径99cm・短径65cmを測る。

土 層 埋土は、暗褐色粘質土系が1層、暗褐色粘質土系で黄褐色粘質土を含有するものが2層である。

遺 物 検出されなかった。

性 格 方形周溝（挿図78）の中央部に位置することから土壤基の可能性を考えたが、残留脂肪酸分析の結果に基づくと墓とは考え難く、性格の特定はできない。

時 期 不明である。



挿図54 SK-12遺構図

S K-13 (挿図55)

位 置 D 8 グリッドの中央に位置し、17号墳の造り出し部で検出した。

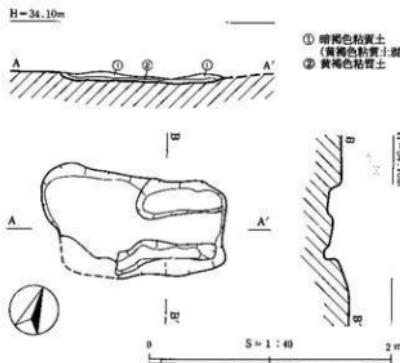
形 態 平面形・底面形は共に隅丸長方形である。規模は、検出面では長径149cm・短径81cm・深さ6cm、底面では長径136cm・短径66cmを測る。上部をかなり削平されていると考えられる。

土 層 埋土は、暗褐色粘質土系で黄褐色粘質土を含有するものが1層、黄褐色粘質土系で暗褐色粘質土を含有するものが1層である。

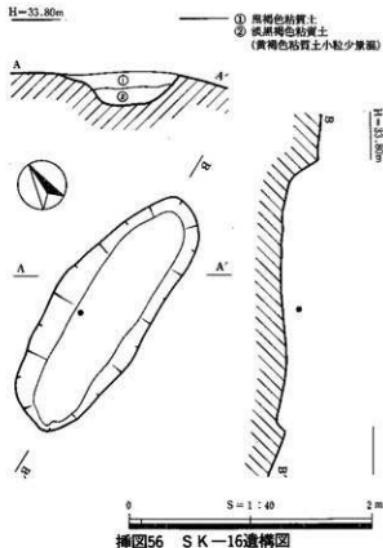
遺 物 検出されなかった。

性 格 不明である。

時 期 不明である。



挿図55 SK-13遺構図



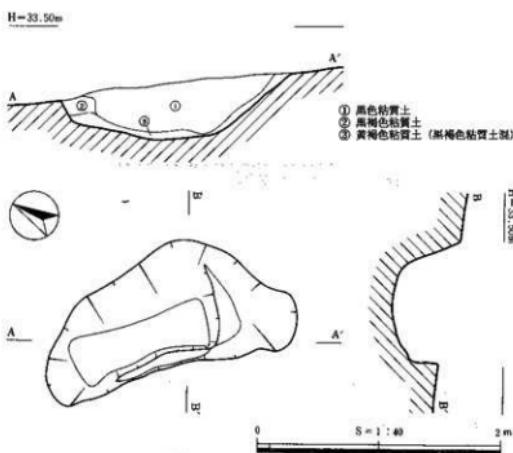
挿図56 SK-16遺構図

S K-16 (挿図56)

- 位 置 E 6 グリッドの南東に位置し、台地平坦面突端部に立地する。
- 形 態 平面形・底面形は共に長楕円形である。規模は、検出面では長径222cm・短径82cm・深さ26cm、底面では長径206cm・短径47cmを測る。
- 土 層 埋土は、黒色粘質土系が1層、黒色粘質土系で黄褐色粘質土小粒を含有するものが1層である。
- 遺 物 固化できなかったが、①層中から土師器と考えられる小片が1点出土した。
- 性 格 不明である。
- 時 期 出土遺物より古墳時代と考えられる。

S K-17 (挿図57)

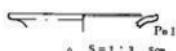
- 位 置 C 6 グリッドの南西に位置し、  
台地平坦面突端部に立地する。
- 形 態 平面形・底面形は共に不定形  
である。規模は、検出面では長  
径207cm・短径100cm・深さ47cm、  
底面では長径115cm・短径30cmを  
測る。
- 土 层 埋土は、黒色粘質土系が2層、  
黄褐色粘質土系に黒色土の混じ  
るもののが1層である。
- 遺 物 検出されなかった。
- 性 格 不明である。
- 時 期 不明である。



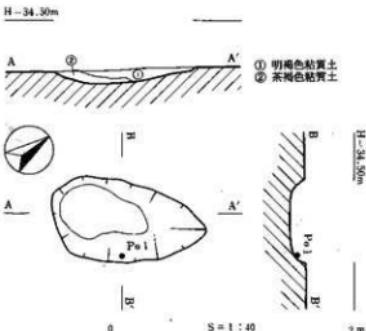
挿図57 S K-17遺構図

S K-25 (挿図58・59)

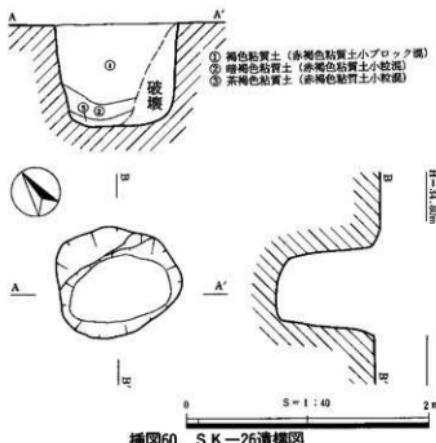
- 位 置 E 10 グリッドの北西に位置し、台地平坦面に  
立地する。
- 形 態 平面形・底面形は共に不定形である。規模は、  
検出面では長径127cm・短径67cm・深さ13cm、底  
面では長径74cm・短径37cmを測る。
- 土 层 埋土は、黒色粘質土系が2層である。
- 遺 物 底面直上より唐津口縁部片Po 1が出土した。
- 性 格 不明である。
- 時 期 出土遺物より16世紀代と考えられる。



挿図58 S K-25土器実測図



挿図59 S K-25遺構図



挿図60 SK-26遺構図

## SK-26 (挿図60)

位置 G11グリッドの中央に位置し、台地平坦面に立地する。

形態 平面形は不整円形、底面形は円形である。規模は、検出面では長径102cm・短径89cm・深さ84cm、底面では長径85cm・短径54cmを測る。

土層 埋土は、褐色粘質土系で赤褐色粘質土を含有するものが3層である。

遺物 検出されなかった。

性格 不明である。

時期 不明である。

## SK-28 (挿図61)

位置 D 7 グリッドの東 (17号墳西側周溝肩部) に位置する。

形態 平面形・底面形は共に隅丸長方形である。規模は、検出面で

は長径105cm・短径68cm・深さ38

cm、底面では長径94cm・短径62

cmを測る。

土層 埋土は、暗褐色粘質土系が4

層、暗褐色粘質土系で赤褐色粘

質土を含有するものが1層、黄

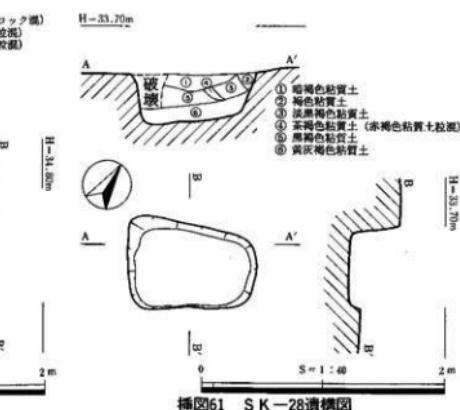
褐色粘質土系が1層である。

遺物 検出されなかった。

性格 17号墳との関連が考えられる

が判断できない。

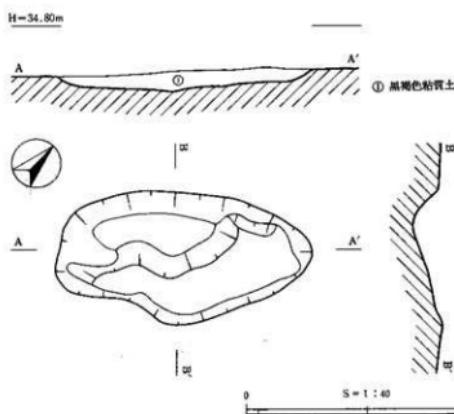
時期 不明である。



挿図61 SK-28遺構図

## SK-29 (挿図62)

位置 H - 34.80m



挿図62 SK-29遺構図

S K-29 (挿図62)

位置 F11グリッドの北西に位置し、台地平坦面に立地する。

形態 平面形・底面形は共に不定形である。規模は、検出面では長径206cm・短径110cm・深さ16cm、底面では長径101cm・短径23cmを測る。

土層 埋土は、黒色粘質土系が1層である。

遺物 検出されなかった。

性格 不明である。

時期 不明である。

H=34.80m

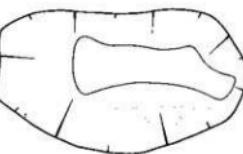
A A'

① 黒褐色粘質土

H=34.80m

B B'

W W'



A A'

W W'

S = 1 : 40

2 m

挿図63 S K-30遺構図

S K-30 (挿図63)

位置 F11グリッドの北西に位置し、台地平坦面に立地する。

形態 平面形・底面形は共に不定形である。規模は、検出面では長径204cm・短径114cm・深さ34cm、底面では長径132cm・短径30cmを測る。

土層 埋土は、黒色粘質土系が1層である。

遺物 検出されなかった。

性格 不明である。

時期 不明である。

H=34.80m

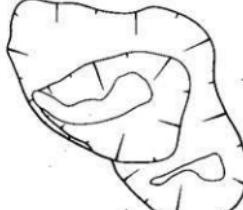
A A'

① 黒褐色粘質土

H=34.80m

B B'

W W'



A A'

W W'

S = 1 : 40

2 m

挿図64 S K-31遺構図

S K-31 (挿図64)

位置 F10グリッドの南東に位置し、台地平坦面に立地する。

形態 平面形・底面形は共に不定形である。規模は、検出面では長径241cm・短径147cm・深さ40cm、底面では長径98cm・短径20cmを測る。

土層 埋土は、黒色粘質土系が1層である。

遺物 検出されなかった。

性格 不明である。

時期 不明である。

H=34.80m

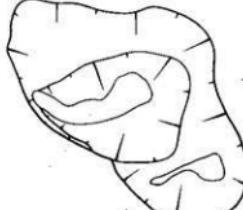
A A'

① 黒褐色粘質土

H=34.80m

B B'

W W'



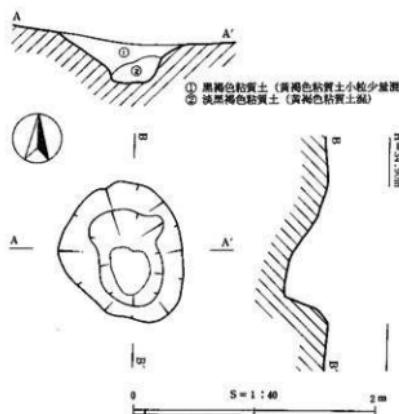
A A'

W W'

S = 1 : 40

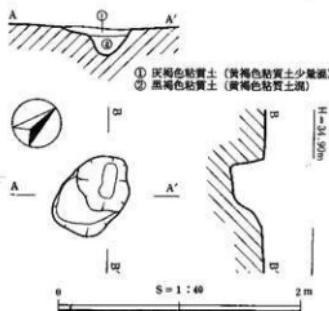
2 m

H=34.90m



挿図65 SK-33遺構図

H=34.90m



挿図66 SK-34遺構図

土層 埋土は、黒色粘質土系で黄褐色粘質土を含有するものが2層である。

遺物 検出されなかった。

性格 不明である。

時期 不明である。

#### SK-34（挿図66）

位置 G11グリッドの北東に位置し、台地平坦面に立地する。

形態 平面形・底面形は共に不定形である。規模は、検出面では長径70cm・短径50cm・深さ22cm、底面では長径28cm・短径10cmを測る。

土層 埋土は、黒色粘質土系で黄褐色粘質土を含有するものが2層である。

遺物 検出されなかった。

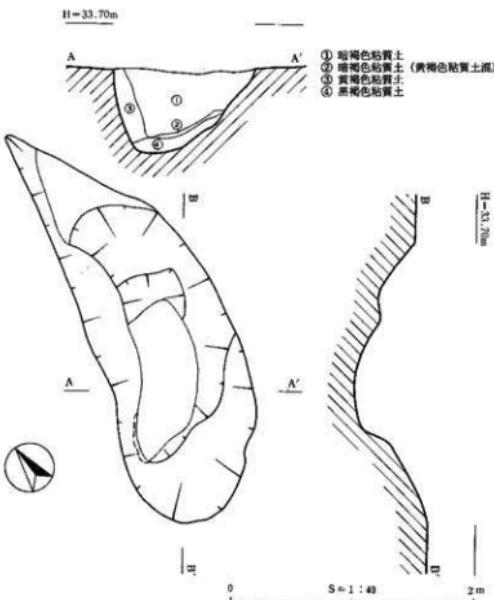
性格 不明である。

時期 不明である。

#### SK-35（挿図67）

位置 D 6 グリッドの北に位置し、台地平坦面に立地する。

形態 平面形・底面形は共に不定形である。規模は、検出面では長径360cm・短径113cm・深さ70cm、底面では長径136cm・短径46cmを測る。



挿図67 SK-35遺構図

土層 埋土は、黒色粘質土系が3層、黒色粘質土系で黄褐色粘質土を含有するものが1層である。  
 遺物 検出されなかった。  
 性格 不明である。  
 時期 不明である。

H-35.20m

#### SK-45 (挿図68)

位置 C7グリッドの南西に位置し、台地平坦面に立地する。

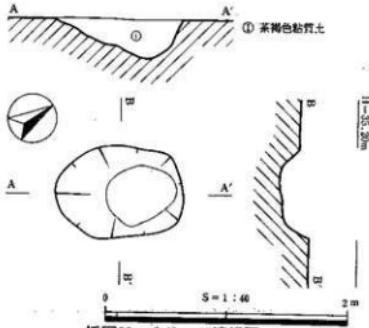
形態 平面形は橢円形、底面形は円形である。規模は、検出面では長径105cm・短径74cm・深さ31cm、底面では長径58cm・短径48cmを測る。

土層 埋土は、茶褐色粘質土系が1層である。

遺物 検出されなかった。

性格 不明である。

時期 不明である。



#### SK-49 (挿図69)

位置 D19グリッドの北に位置し、台地平坦面に立地する。SK-50に切られている。

形態 平面形は不定形、底面形は楕円長方形である。規模は、検出面では長径(130)cm・短径122cm・深さ64cm、底面では長径(95)cm・短径66cmを測る。

土層 埋土は、黒色粘質土系が8層、黒色粘質土系で黄褐色粘質土を含有するものが4層、黄褐色粘質土系が1層である。

遺物 検出されなかった。

性格 不明である。

時期 不明である。

H-35.60m

#### SK-54 (挿図70)

位置 D15グリッドの北東に位置し、台地平坦面に立地する。

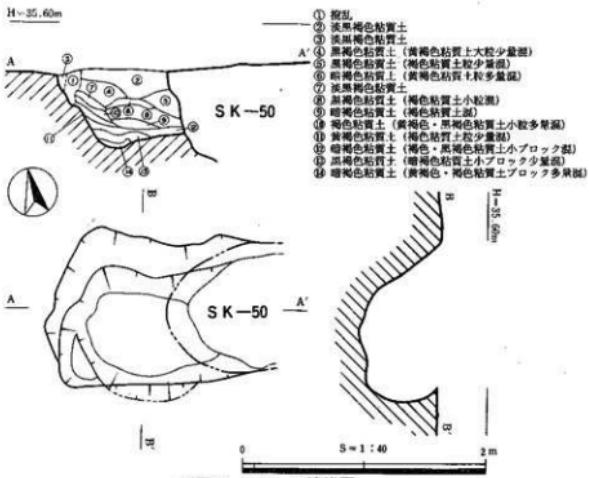
形態 平面形・底面形は共に不定形である。規模は、検出面では長径101cm・短径76cm・深さ57cm、底面では長径65cm・短径38cmを測る。

土層 埋土は、茶褐色粘質土系が2層である。

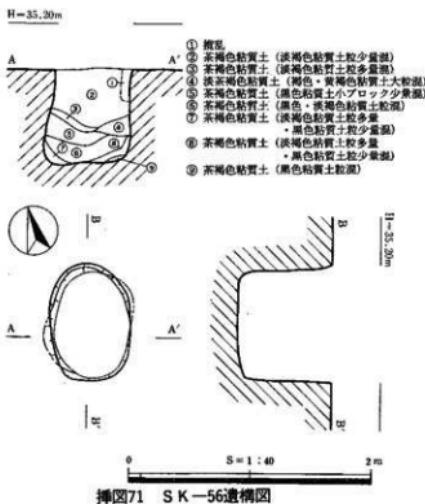
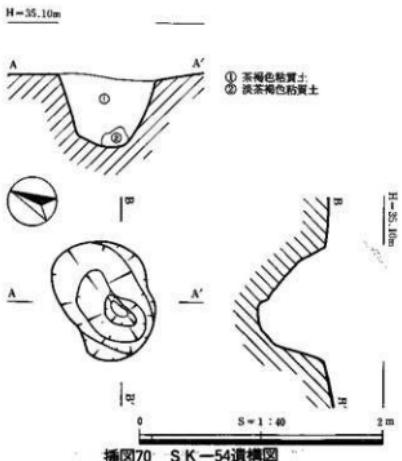
遺物 検出されなかった。

性格 不明である。

時期 不明である。



挿図69 SK-49遺構図



SK-56 (挿図71)

位 置 D16グリッドの南西に位置し、台地平坦面に立地する。

形 態 平面形・底面形は共に橢円形である。規模は、検出面では長径98cm・短径65cm・深さ76cm、底面では長径87cm・短径60cmを測る。

土 層 埋土は、茶褐色粘質土系が8層である。

遺 物 検出されなかった。

性 格 不明である。

時 期 不明である。

SK-59 (挿図72)

位 置 E 8 グリッドの南に位置し、台地平坦面に立地する。

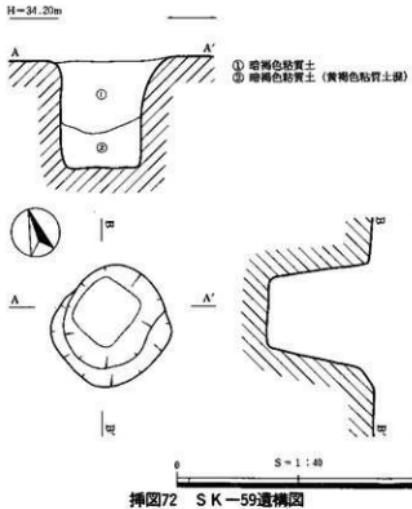
形 態 平面形は隅丸方形、底面形は方形である。規模は、検出面では長径95cm・短径87cm・深さ87cm、底面では長径50cm・短径47cmを測る。

土 層 埋土は、黒色粘質土系が1層、黒色粘質土系で黄褐色粘質土を含有するものが1層である。

遺 物 検出されなかった。

性 格 不明である。

時 期 不明である。



**SK-60 (挿図73)**

位置 D 9 グリッドの中央に位置し、台地平坦面に立地する。

形態 平面形・底面形は共に不定形である。

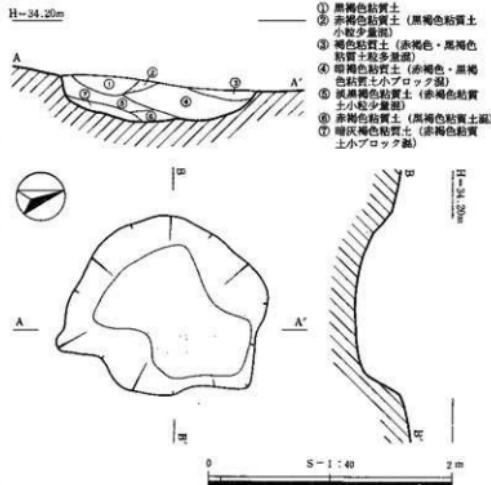
規模は、検出面では長径174cm・短径138cm・深さ37cm、底面では長径127cm・短径58cmを測る。

土層 埋土は、黒色粘質土系が1層、黒色粘質土系で赤褐色粘質土を含有するものが4層、赤褐色粘質土系が2層である。

遺物 検出されなかった。

性格 不明である。

時期 不明である。



**SK-61 (挿図74・75 図版14)**

位置 D 8 グリッドの北西に位置し、18号墳丘上から掘り込んでいる。

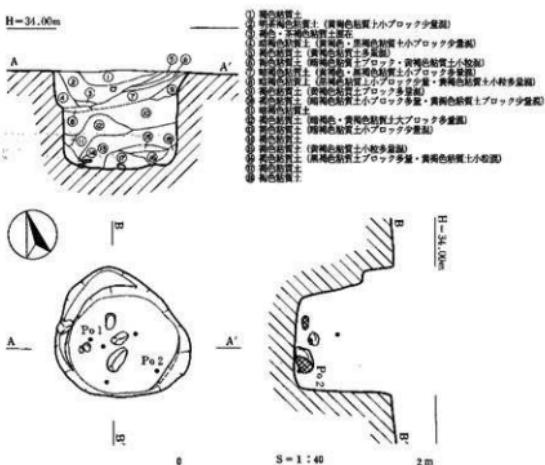
形態 平面形は梢円形、底面形は円形である。規模は、検出面では長径112cm・短径98cm・深さ82cm、底面では長径95cm・短径84cmを測るが、18号墳丘上からの掘り込みを検出することが出来ず、墳丘除去後に検出したため本来の深さは30cm程度深かったと考えられる。

土層 埋土は、暗褐色粘質土系が4層、暗褐色粘質土系で赤褐色粘質土を含有するものが1層、黄褐色粘質土系が1層である。

遺物 図化できたものは底部近くで出土した陶器片Po1・2である。

性格 土壙墓の可能性が考えられる。

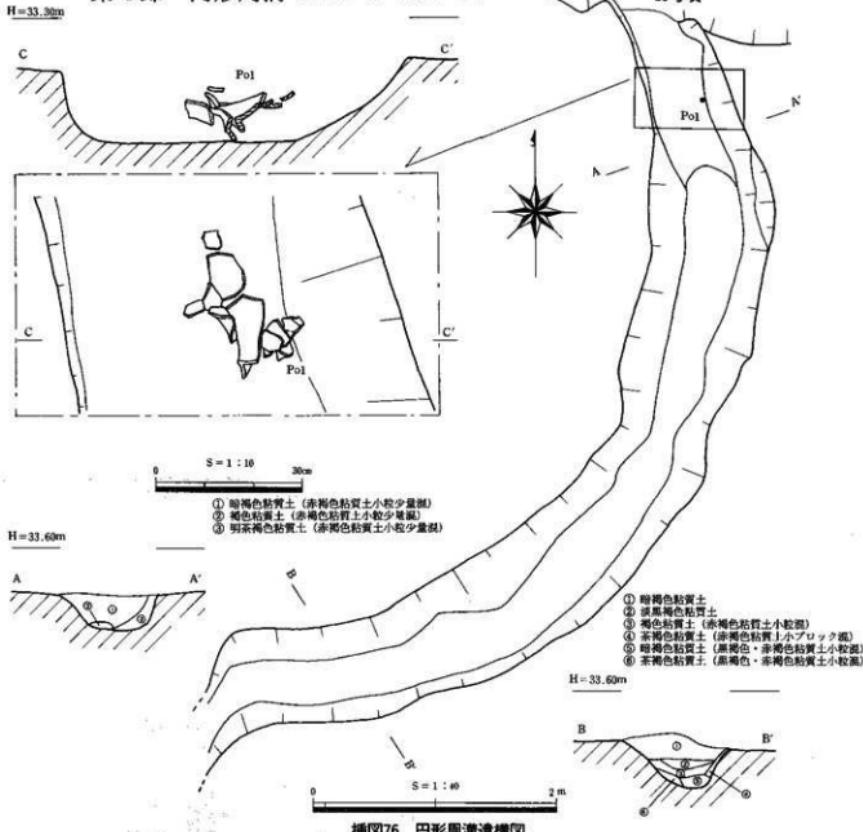
時期 近世と考えられる。



挿図74 SK-61土器実測図

挿図75 SK-61遺構図

#### 第4節 円形周溝 (挿図76・77 図版7・14)



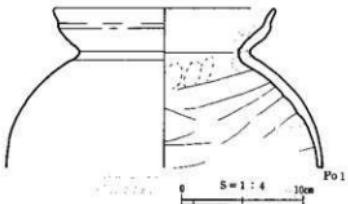
挿図76 円形周溝遺構図

台地状平坦部とそれに続く斜面の変換点にあたる18号墳の西側に位置する。18号墳周溝とは切り合わない。

周溝は全周するものではなく、全体の1/4前後である。北端は徐々に浅くなって19号墳周溝と切り合う位置関係になるが、両者の埋土は区別がつかず切り合い関係をつかむことはできなかった。南側は西側に続くと考えられるが斜面に向かって下がることと後世の攪乱によって壊されており残っていない。周溝上端部での復元径は9m、幅は0.8~1.0m、深さ0.1~0.4mを測る。

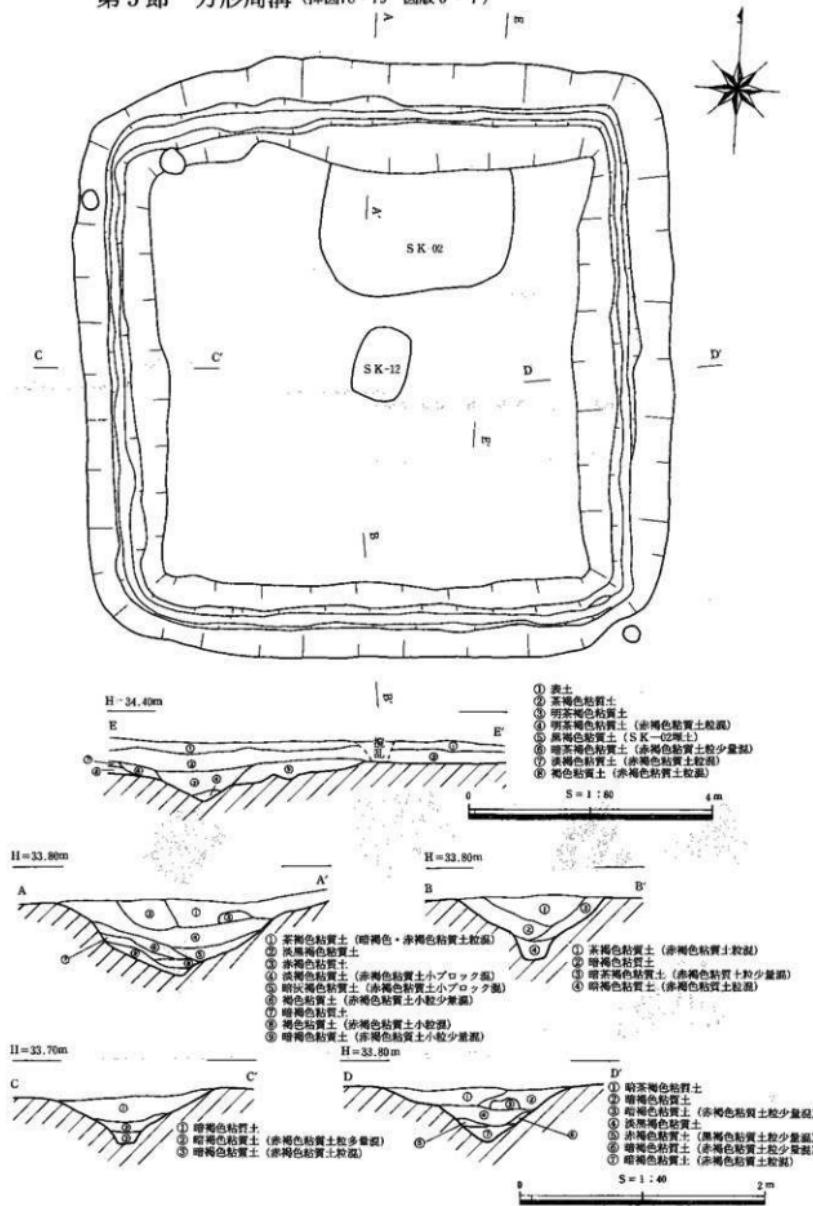
遺物は北側底部直上よりPo1が出土した。Po1は退化した複合口縁甕であり、青木編年の昭和新段階～IX期古段階にあたり、5世紀中ごろの時期が与えられるものである。

円形周溝に伴う盛土等の痕跡は認められずその性格を明確にすることはできないが、古墳の周溝の可能性が考えられる。



挿図77 円形周溝土器実測図

## 第5節 方形周溝 (挿図78・79 圖版6・7)

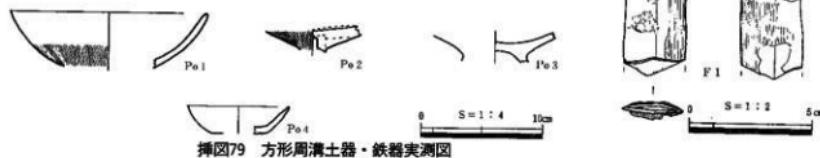


挿図78 方形周溝構造図

調査地内の台地状平垣部南西隅に18号墳の周溝を一部破壊する方形の溝が検出された。溝検出土端部では1辺9.5mのほぼ正方形を呈し、溝の幅は1.1~1.8m、深さは0.4~0.65mを測る。断面形はほぼV字状を呈するが、溝底部には幅0.2m、深さ0.1m前後の底部溝が存在する。墳丘は検出されなかつたが、溝断面に内側からの土の流れ込みが認められることから、若干の盛土があったものと推測される。

周溝内より、18号墳に関係すると推測される遺物とともに、風化のため底部調整は不明であるが底部平底の土師質皿Po 4が出土した。出土遺物より中世のものと考えられる。

方形周溝の中心部にはSK-12が位置する。直接の関連性を示唆する遺物は出土していないが、その位置関係から考えて、この方形周溝はSK-12を埋葬主体とする中世墓に伴う溝と推測される。



挿図79 方形周溝土器・鉄器実測図

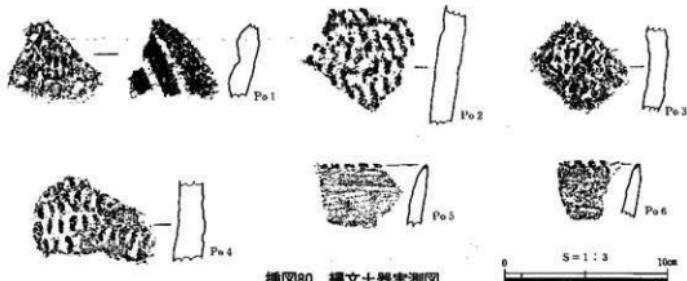
## 第6節 古墳群形成以前の土器・石器

尾高御建山遺跡の調査過程で、古墳盛土中および墳丘上を中心に明確な遺構に伴わないものの古墳築造に先行する時期の遺物が出土した。貴重な資料であるので報告する。この中には、縄文土器片、縄文時代以前と推測される石器・剣片、弥生時代の石器がある。

### 土器 (挿図80 図版14)

縄文時代早期の押型文土器が18号墳下のローム土とクロボクの間から出土した。土器片は風化がひどいもので、数も少ない。Po 1は内面に深く幅広い斜行沈線を施す胴部片である。外面は横円文の痕跡がかすかに観察できる程度である。Po 2~4はいずれも胴部片である。外面に施された継位の長横円文は長径9~10mm・短径4~5mmの大きさであるが、磨滅がひどく特徴の詳細は不明である。

晩期の無文粗製土器が17号墳の掘り下げ中に出土した。Po 5・6は外面に削痕が残り、内面はヘラ磨き調整である。口縁には刻みを施す。Po 5・6は同一個体の可能性もある。



挿図80 縄文土器実測図

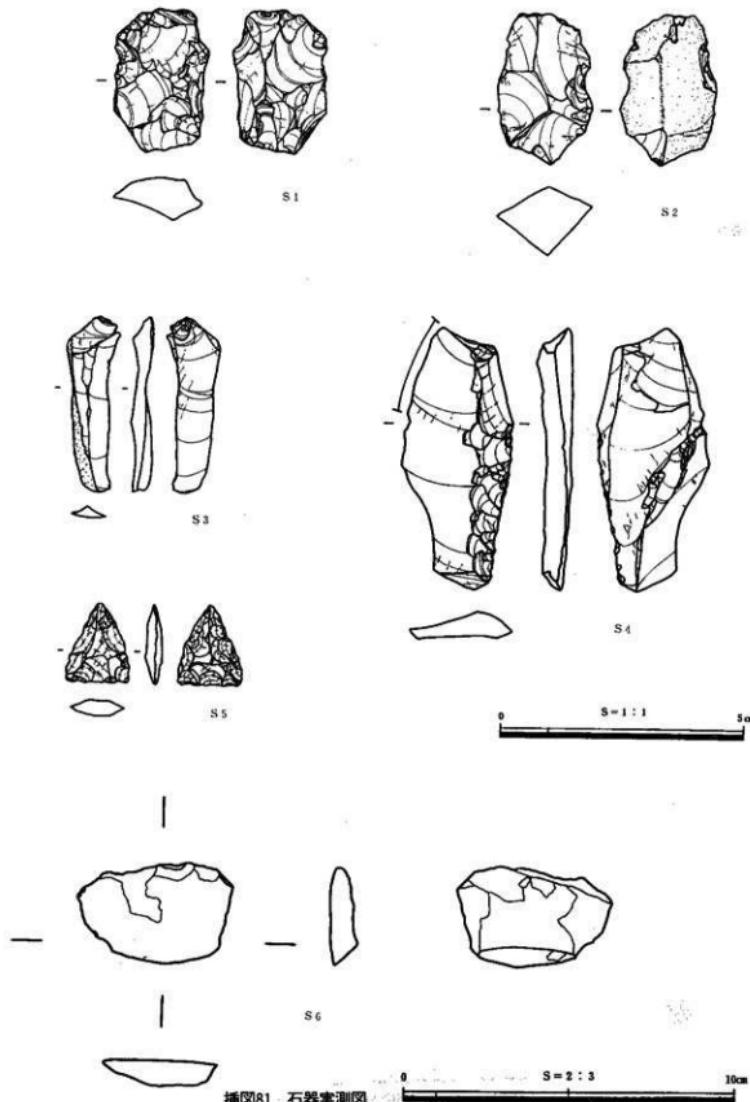
### 石器 (挿図81 図版14)

S 1・2は南側谷裾部で出土した黒曜石製の調整石器である。表面は風化している。

S 3はS 1・2と同じ地点で出土した黒曜石製の石刃状石器である。一部に襍面が残されており、調整された石核から取られたのではないことが分かる。縄文時代のものと思われるが、旧石器になる可能性もある。

S 4 は18号墳断ち割り中に出土した黒曜石製のナイフ形石器であるが両端部を欠損する。片縁の創部以下に調整が認められる。

弥生時代の石器と考えられるのは2点である。S 5 は19号墳第2主体部埋土中より出土したサヌカイト製の平基無茎縫である。S 6 は18号墳東側周溝内より出土した緑色凝灰岩製の磨製石斧先端部である。



挿図81 石器実測図

## 第4章 尾高古墳群

### 第1節 尾高17号墳（挿図82～86 図版8・16）

#### 1) 位置と現状

17号墳は佐陀川右岸に広がる水田面が、大山より続く台地状平坦部と接する比高差約20mの急斜面上に位置し、南側は水田面に向けて開析された谷部が墳壠まで迫る。調査した3基の古墳は南北方向に並ぶが17号墳は南に位置する。北東側に位置する18号墳とは近接し、ほとんど離れていない。墳頂部は削平され平坦になっており、一部は破壊されて凹地となり埋葬主体部が盗掘されたことをうかがわせた。17号墳墳丘北側下層からは古墳時代前期の竪穴住居跡尾高建山S I-03が検出された。

#### 2) 墳丘

##### 周溝

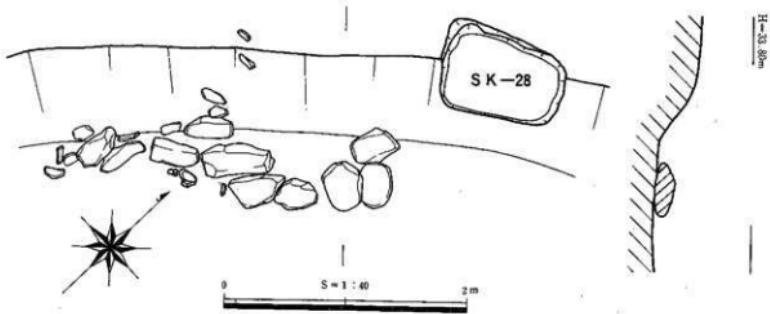
周溝は古墳を全周せず、南側には存在しない。南側は開析された谷部が墳端際まで迫っているが、古墳築造時も現状に近い地形を呈していたためと思われるが、崖に向かっての急斜面を巧みに利用して墳端部を形成しており、地山整形が行われているようである。これは、古墳の規模を大きく見せるための配慮であろう。周溝検出上端部での東西の最大径は31.2mを測る。幅は3～4m、深さは北側・東側では40cm程度であるが西側では1m前後の深さがある。これは検出面からの深さであり、古墳最下層の黒褐色粘質土（⑨層）上面が古墳時代の地表面と考えられることから、古墳築造時には50cm程度上面より掘り込まれていたと考えられる。

西側周溝内底面より集石（挿図82）を検出した。径30cm程度の平たい河原石を含むものである。規則的に並べたような形になっている。この集石に伴う遺物はなく性格は不明である。

##### 墳丘

墳丘はクロボクと呼ばれる黒褐色粘質土（⑨層）を基底面として盛土を行っている。墳丘形成は大きく2段階に分けることができる。第1段階は東西断面（挿図84）の⑩～⑫層のように黒褐色系の土を水平方向に10～20cmの厚さで積み上げ古墳の基盤を形成している。第2段階は周溝掘削に伴う赤褐色系の土を多量に含む層となり、中央部から外縁部に向かって墳丘が構築されたことがわかる。これは、排水を考慮したものであろう。しかし、南北断面（挿図84）は東西断面とは異なり、土質の変化は同様であるが土層の堆積は水平堆積が強く意識されているようである。これは、墳丘構築手法として南北方向にある程度の土を盛って骨格を形成した後で東西方向に拡張していく手法が採られているのではなかろうか。

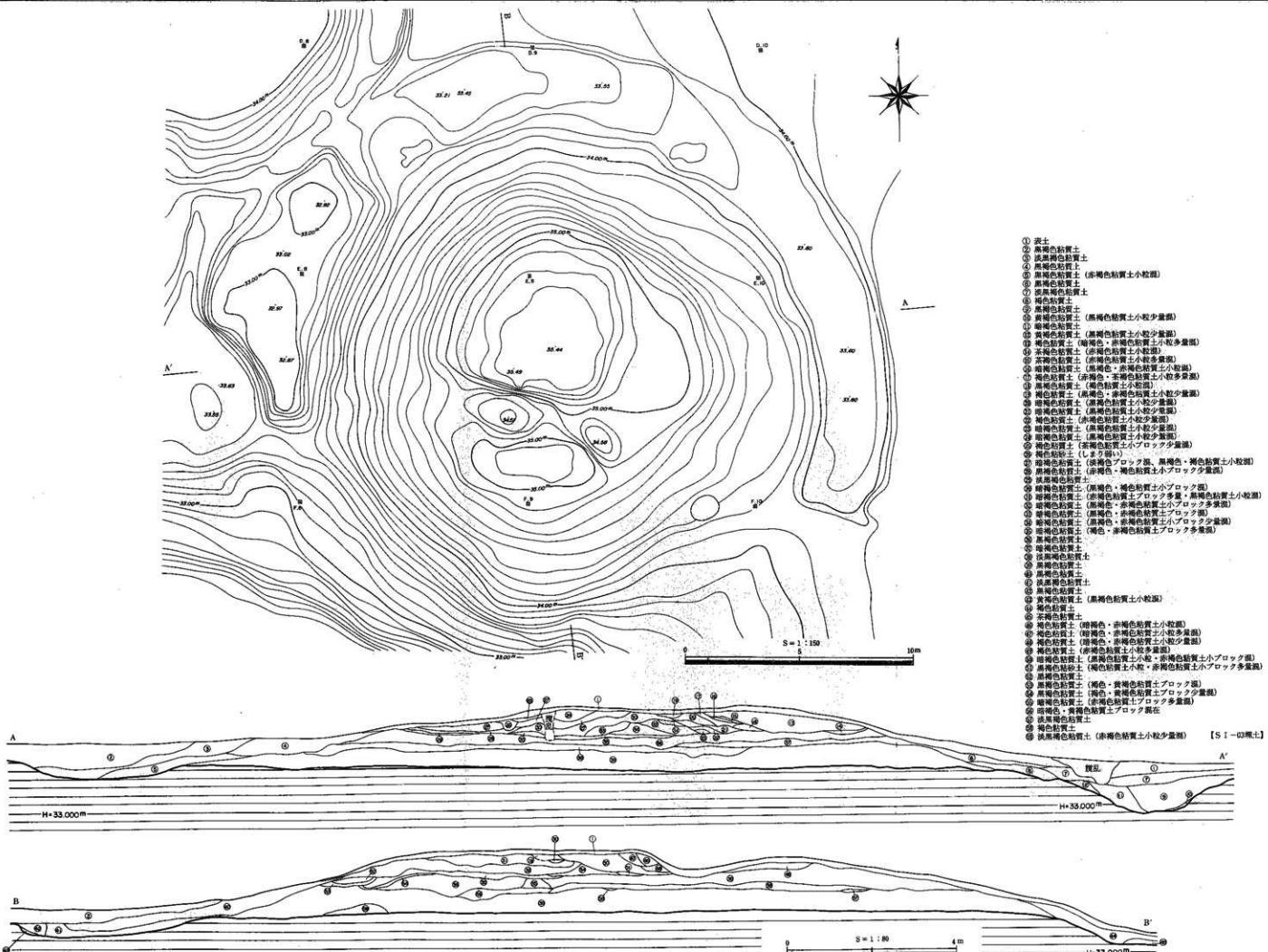
墳形は円墳であり東西21m、南北20mを測るが、北東側周溝内を掘り残すこと2.5×3.7mの方形の造り出しを



挿図82 17号墳西側周溝内集石検出状況



插图83 17号填填丘测量图



插図84 17号墳墳丘遺存

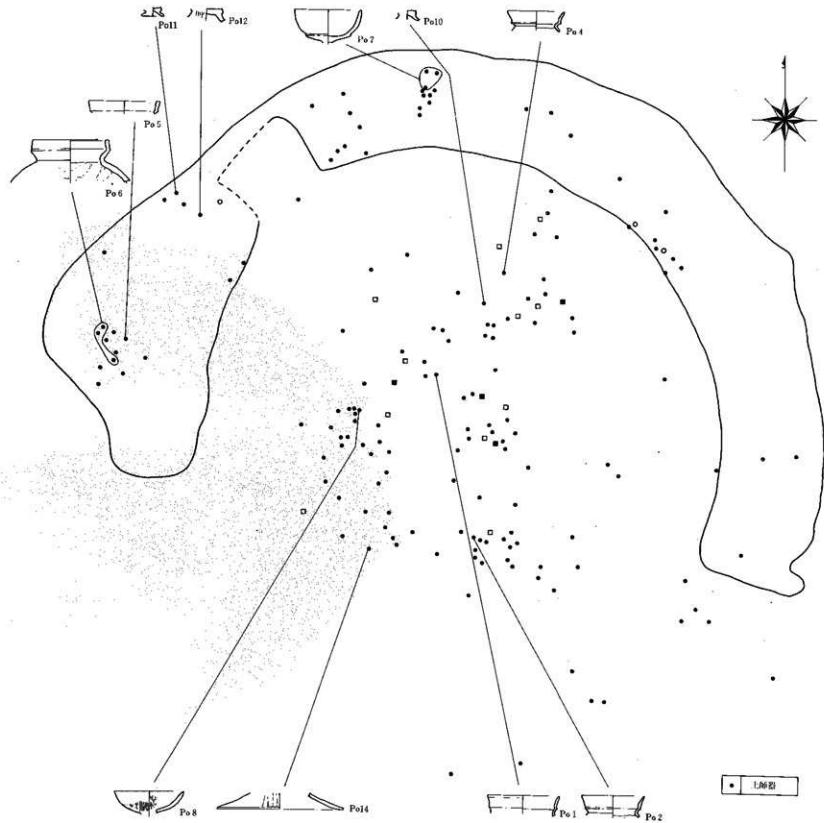


插图85 17号墳遺物出土位置図

S = 1:150  
0 5 10m

つくっている。ここには、埋葬主体の可能性も考えられるSK-13が存在する。SK-13は底面部がわずかに残るのみであり、上部が削平されたものと考えられ、造り出しには盛土があったと思われる。この造り出しを境にして、西側周溝が他に比べ急に深くなり幅も広がる。

### 3) 埋葬主体

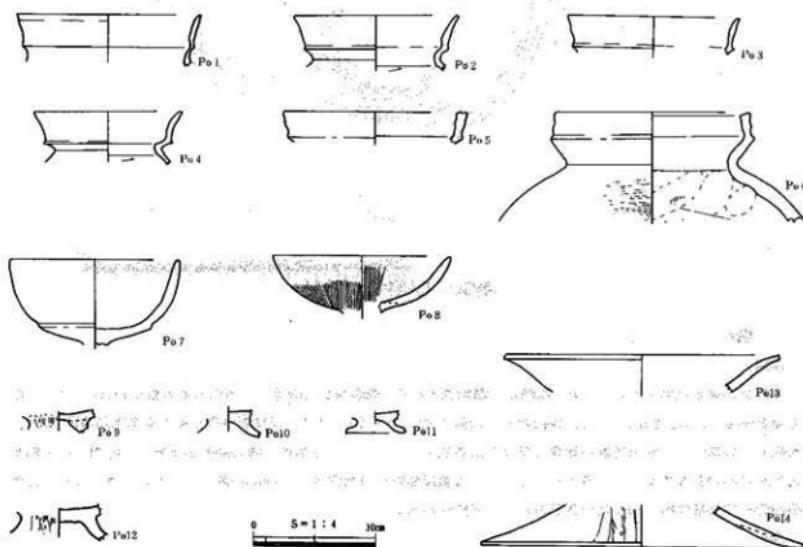
17号墳では明確な埋葬主体は検出できなかった。墳径に比べて高さが低いことから墳頂部の削平が考えられ、そのため埋葬主体部が検出できなかっただけである。しかし、埋葬主体部の可能性がある痕跡が存在する。墳丘中央南寄りに現墳頂部を50cm前後掘り込んだ擾乱が存在する。南北断面(挿図84)を見ると擾乱部分に当たる⑩~⑫層が埋葬主体部らしい形態を呈している。しかし、擾乱がひどいため埋葬主体部の掘り方はほとんど残っていないかった。なお、擾乱部周辺には石材の散布は見られなかったので、埋葬主体部は石室や石棺ではなく木棺直葬であった可能性が高い。しかし、埋葬主体部と考えられる痕跡は墳丘の南側に少し片寄っていることから、中央部に削平されてしまった埋葬主体が存在した可能性もある。

### 4) 遺物出土状況

古墳に伴うと思われる遺物は多くないが、擾乱部の肩付近から土師器高杯(Po 8)が出土した。この擾乱部は埋葬主体部の盗掘孔と考えられるものであり、Po 8は埋葬主体に伴う可能性が高いと考えられる。また、西側周溝の底面からPo 5・6や壺腹部片などが出土した。Po 1~4は盛土内からの出土である。

### 5) 時期

埋葬主体に伴う遺物がないため明確な判断は出来ないが、周溝底面から出土したPo 5・6は青木編年VIII期新段階と考えられ、ほぼその頃に古墳が構築されたものと推測される。

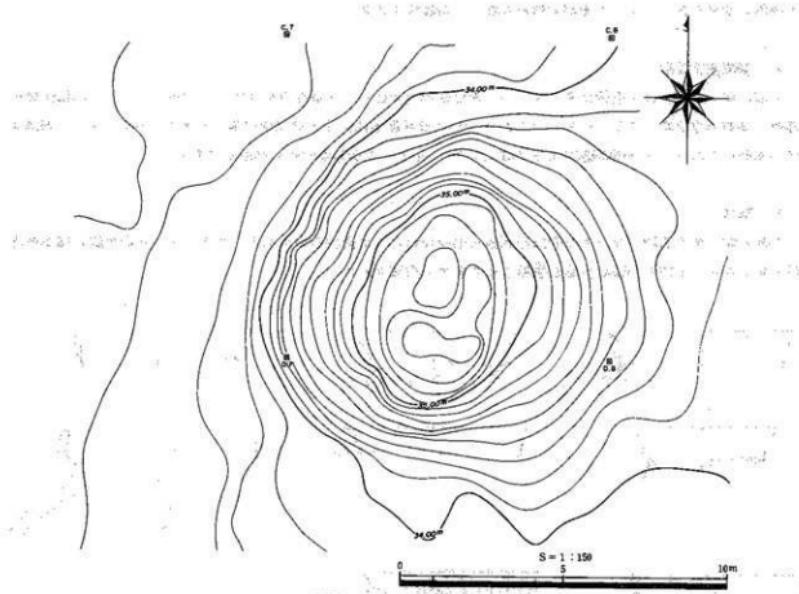


挿図86 17号墳土器実測図

## 第2節 尾高18号墳（挿図87～95 図版9・10・16・17）

### 1) 位置と現状

18号墳は大山より続く台地状平坦部の突端にあり、平坦部から佐陀川右岸に広がる水田面に続く比高差約20mある急斜面上の地形変換点に位置する円墳である。調査した3基の古墳はほぼ南北方向に並ぶ。18号墳は17号墳と19号墳の間に位置し、ともに周溝がほとんど接するように近接しているが、切り合い関係は認められなかった。調査前には径12～13m、高さ1.2mほどの墳丘が確認できた。墳頂中央部はやや壅み、しまりの弱い土であり、埋葬主体部は擾乱を受けていることが予想された。南側の墳端と周溝は中世のものと推定される方形周溝に破壊される。調査の過程で本墳と17・19号墳の周溝が近接することが明らかとなつたため、周溝の切り合いの有無、前後関係の確認の目的でそれぞれ土層観察を行ったが、切り合い関係は認められなかった。なお、⑯層と地山層の境より押型文土器が出土したが遺構は確認できなかつた。



挿図87 18号墳墳丘測量図

### 2) 墳丘

#### 周溝

周溝は古墳を全周するようだが、南側は一部破壊される。周溝検出上端部での東西の最大径は18.8mであり、南北は約18mである。幅は2～3m、検出面からの深さは0.1～0.5mであり、17号墳周溝と接する南東側は特に浅い。形態もこの部分は17号墳周溝の影響を受けて直線状になっている。古墳最下層の黒褐色粘質土（⑯層）の上面が古墳時代の地表面であったと考えられるため、古墳築造時には周溝は40～50cmは深かったものと考えられ、古墳築造時に17号墳周溝と切り合い関係があった可能性がある。

#### 墳丘

墳丘はクロボク質の黒褐色粘質土（⑯層）を基底面として盛土を行っている。墳丘の盛土工程は大きく3段階

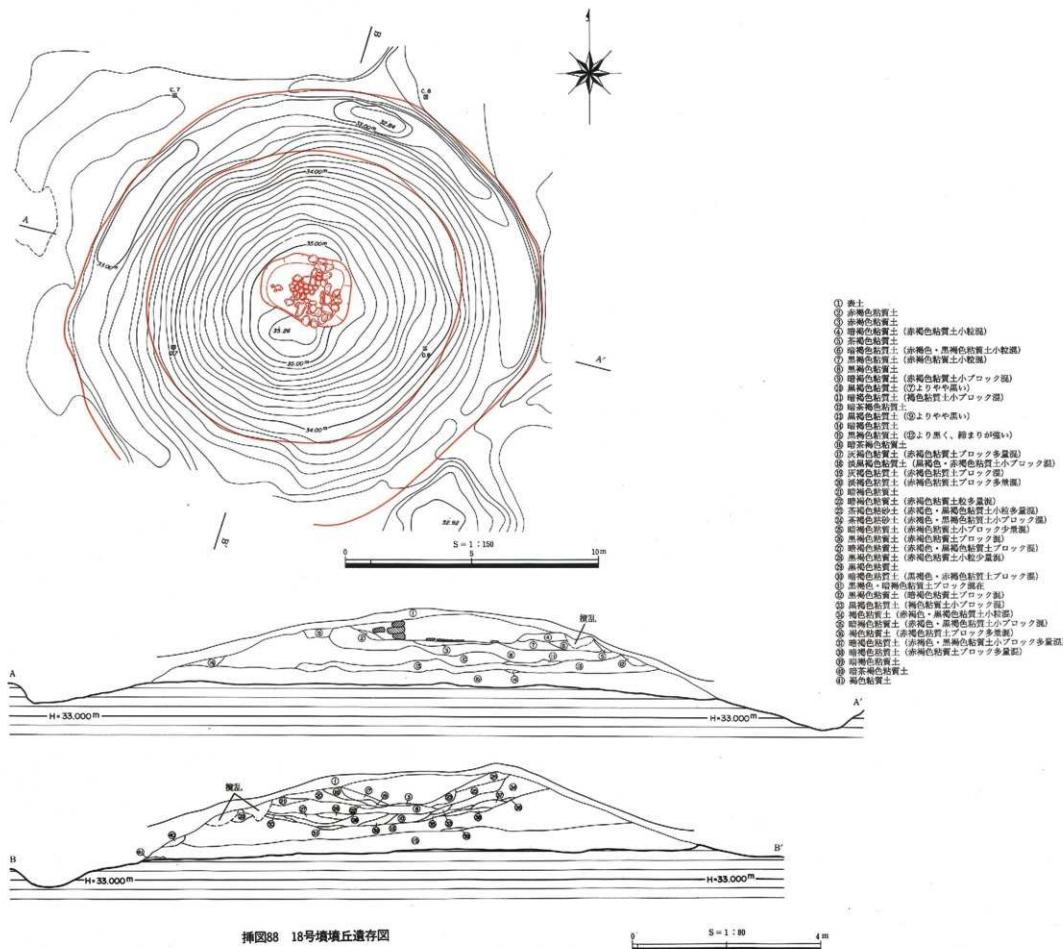


插图88 18号墳墳丘遺存図

に分けることができる。第1段階は石室構築前段までの墳丘構築、第2段階は石室構築に伴う壁石の裏込め的なもの、第3段階は天井石の被覆と墳形調整のものである。

第1段階では、基底面上に旧地表面を掘削したと考えられる黒褐色粘質土が中心に向かって薄くなりながら盛られる。その上に地山土の赤褐色粘質土が多量に混じった層が盛られ、基底面より0.8m以上の盛土が認められる。

第2段階の盛土は、盜掘に伴う破壊のためわずかに残っているだけである。墓壙内の石室構築に並行して盛り上げが行われたと考えられるものの残存部は赤褐色粘質土を主とするものであり、互層状に盛り上げた痕跡は認められなかった。

第3段階の盛土は、天井石を架構した後に第1・第2段階の盛土を覆い、墳丘平面形を整えたものと推測されるが盜掘に伴う破壊のためまったく検出できなかった。

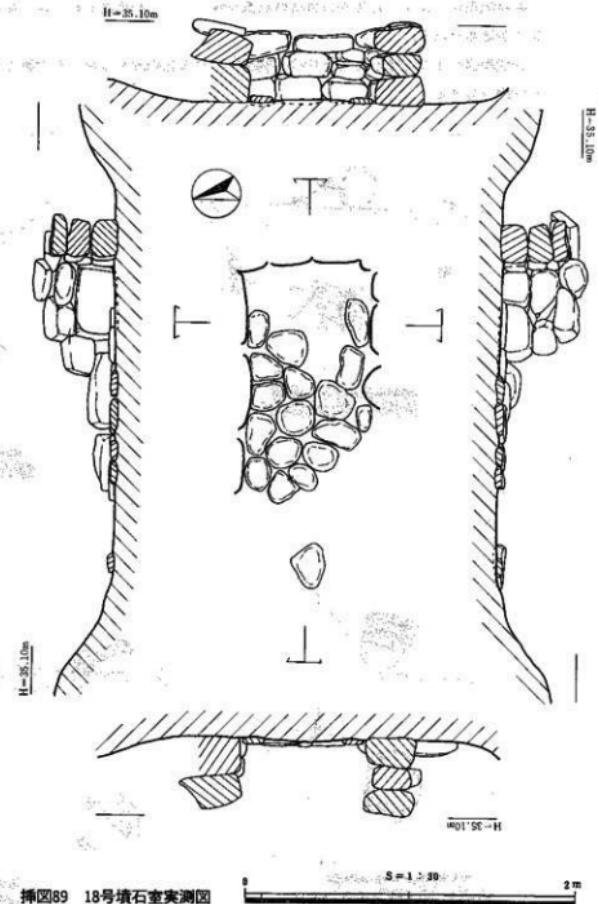
墳丘残存高は地山面からは1.7m、そのうちの盛土部分は1.3mである。墳丘平面形は円形を呈し、その規模はおよそ南北12.0m、東西12.5mであり、H=35.10m  
り、17号墳の影響でやや東西に長い。

### 3) 埋葬主体

18号墳の埋葬主体は主軸をE—14°—Sにとる竪穴系の石室である。石室はすでに天井部や壁体の上半部、南側では腰石をも失っていた。石室内は流土によって埋没し、床面の敷石は中央部は原位置を保っているが、東西両端は失われていた。石室内全体が盜掘によって攢乱を受けており、原位置を保った状態で出土した遺物はない。

石室は盛土を掘削した墓壙の中に長方形プランで構築されている。規模は、東側短側壁幅0.8m、推定石室長約1.9m、残存高0.5mである。石室を構築する石材は河川から持ってきたと考えられる軽石を用いる。なお、周溝内から石室構築材と思われる石材を検出した。

石室は、竪穴式石室か竪穴系横口式石室の可能性が考えられるが、两者を区別する横口部位置に対応すると考えられる西側短側壁部が完全に破壊されて残っていないうえに、遺物から導き出される時期には両形態が鳥取県西部地域にあり得るため石室形態を特定することはできなかった。



挿図89 18号墳石室実測図

#### 4) 遺物出土状況

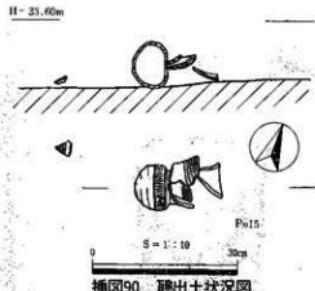
石室内は盜掘のため完全に搅乱されており、原位置を保つ遺物の出土は皆無である。石室内より出土した遺物はすべて搅乱埋土中から断片として検出したものであり、その数は少ない。

石室外では古墳西側の墳端から周溝内にかけて須恵器を中心とする遺物が検出された。多くは破碎状態で出土しており、墳丘上からの転落が考えられるものであるが、比較的原位置を保っていると思われるものもある。南側墳端から出土した甕(押図90)は原位置をほぼ保っていると考えられる。口縁部上半が残っていなかったが他は良好な残存状態をしており、意図的な打ち欠きを受けたものと考えられ墓前祭祀における使用が推測される。

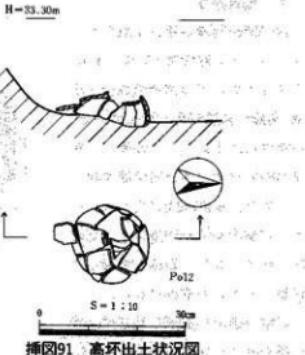
北側周溝底面より高坏がほぼ完存する状態で出土した(押図91)。坏部を下に向けた状態であり墳丘からの転落であろうが、底面直上の出土であることから古墳構築からはやい段階での転落が考えられる。

西側墳端から出土した把手付椀は原位置を保っていたが埋置されてはいない(押図92)。口縁部の2ヶ所に打ち欠きが認められる。

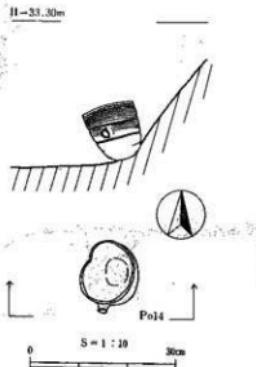
西側周溝内より出土した坏蓋Po.7(押図93)は周溝底面から浮いた位置で出土しており、墳丘側から流れ込んだ状態を呈する。



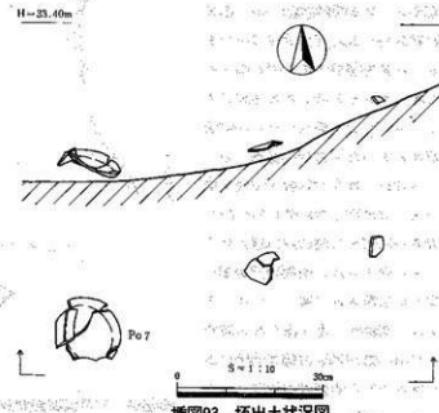
押図90 甕出土状況図



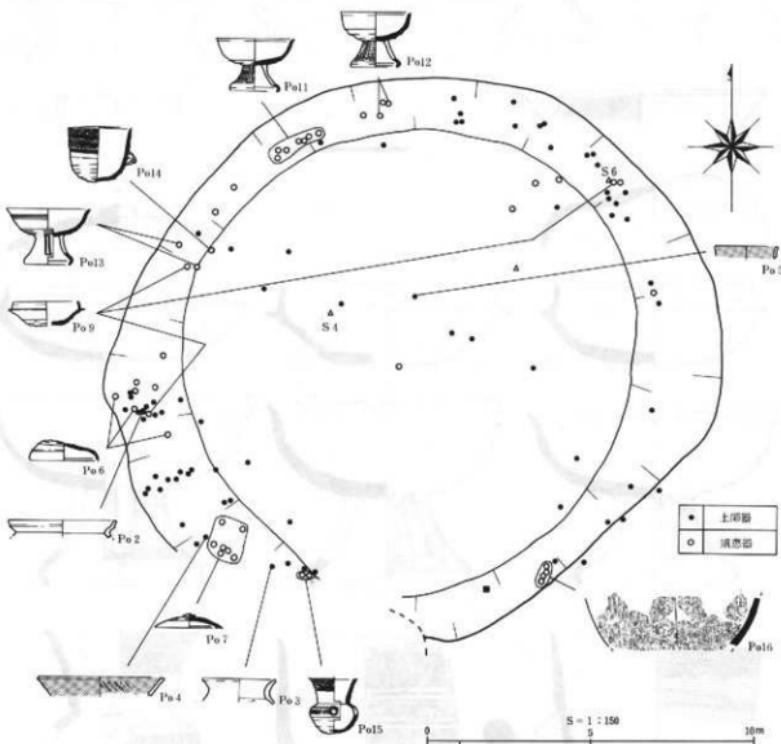
押図91 高坏出土状況図



押図92 把手付椀出土状況図



押図93 売出土状況図



插図94 18号墳遺物出土位置図

### 5) 出土遺物

18号墳から出土した遺物には土師器・須恵器・鉄器がある。土師器は甕 (Po 1~3)、高坏 (Po 4)、器種不明 (Po 5) である。Po 5 は古墳盛土内出土であり、内外面に赤色顔料が塗られている。須恵器は环蓋 (Po 6・7)、环身 (Po 8~10)、高坏 (Po 11~13)、把手付腕 (Po 14)、足 (Po 15)、甕 (Po 16) の計11個体以上である。鉄器は刀子 (F 1)・劍 (F 2・3)・鎌 (F 4~14) である。F 3~14 は鍛のためくっついた状態で出土した。いずれも断片である。

遺物の詳細は観察表に譲るが、古墳築造時期を判定する目安である蓋坏類を検討する。

环蓋 6 は口径13cmであり、天井部と口縁部の境に稜を持つ。口縁部は直立気味であり、口縁端部内面には段が残る。外面調整は天井部の2/3にヘラケズリを施す。Po 7 は天井部に擬宝珠様つまみを有する。内面のかえりは短く口縁端部よりも下にはでない。

环身 Po 8・9 は口径12cm前後であり、たちあがりは長く直立気味である。口縁端部内面にはPo 8 には段があるが、Po 9 には認められない。外面調整は底部の1/2から2/3にヘラケズリを施す。Po 10 は口径13.5cmであり、立ち上がりは短く、やや内傾気味である。口縁端部内面に段は認められない。

蓋坏類には時期差が認められ、Po 6・8 は山陰須恵器編年II期前半・陶邑編年TK47並行のもので、Po 9・10 は山陰須恵器編年II期後半・MT15並行であり、Po 7 は出雲国庁編年第1形式に対応する時期と考えられる。

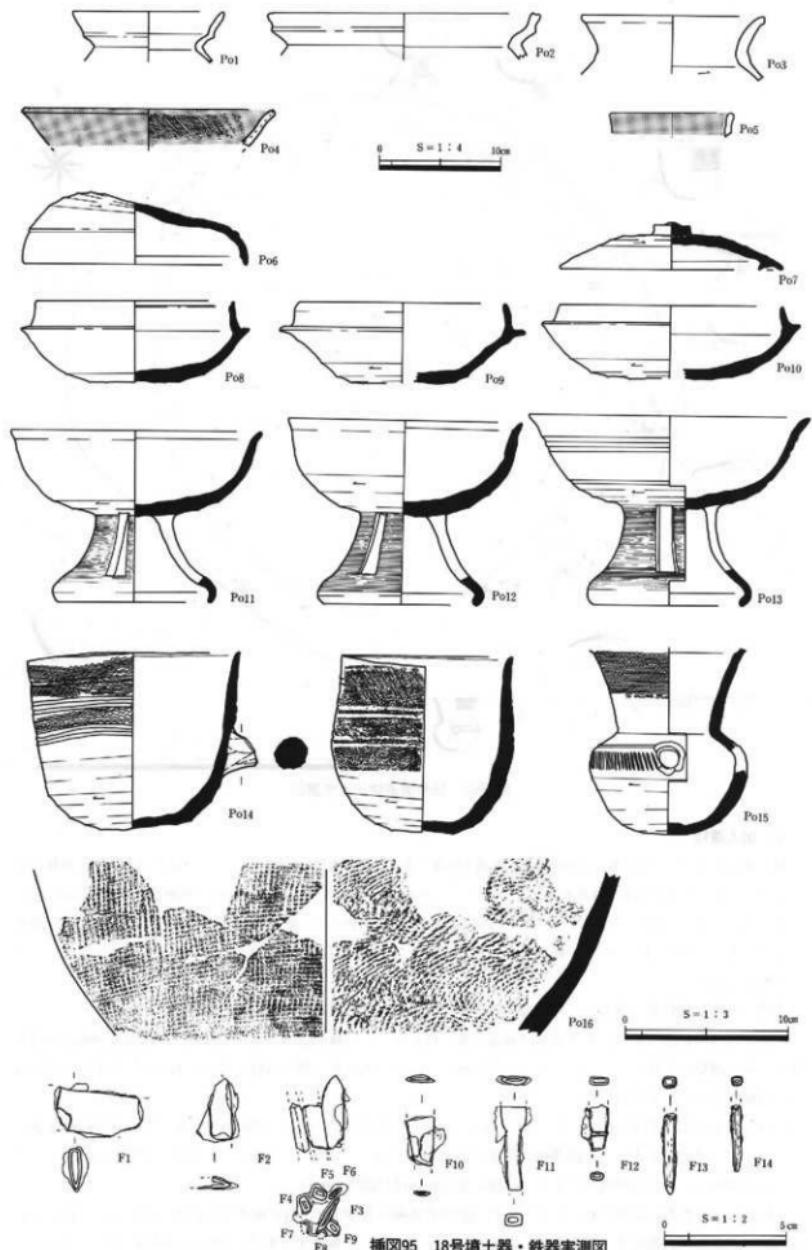


插图95 18号填土器・铁器实测图

### 第3節 尾高19号墳（挿図96～105 図版11～13・17）

#### 1) 位置と現状

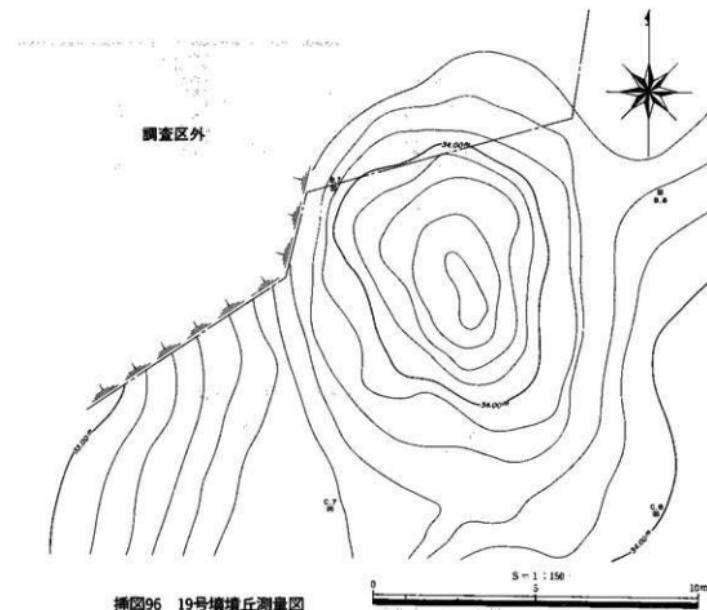
19号墳は佐陀川右岸に広がる水田面が、大山より続く台地状平坦部と接する比高差約20mの急斜面上に位置する。調査した3基の古墳は南北方向に並ぶが19号墳は北に位置し、古墳の一部は調査地外になるうえ墳丘の多くは当初の調査予定地に含まれていなかった。そこで、建設省と協議した結果、古墳に関係する範囲は最大限調査することとなり、調査可能な範囲は調査することができた。なお、調査前墳丘図は地権者の同意を得て調査範囲外も含めて測ることができた。19号墳は南側に位置する18号墳とは近接し、ほとんど離れていない。調査前には径10m、高さ0.8mほどの墳丘が確認できたが、17・18号墳に比べて墳高が低いため墳丘は大部分削平を受けており、埋葬主体部は残っていないものと考えた。しかし、表土剥ぎの途中で石棺の蓋石が出土し、埋葬主体部が残っていることが明らかとなった。埋葬主体部は3基存在した。しかし、北西側の調査範囲外にも周溝が巡るうえ、埋葬主体部が存在する可能性もある。

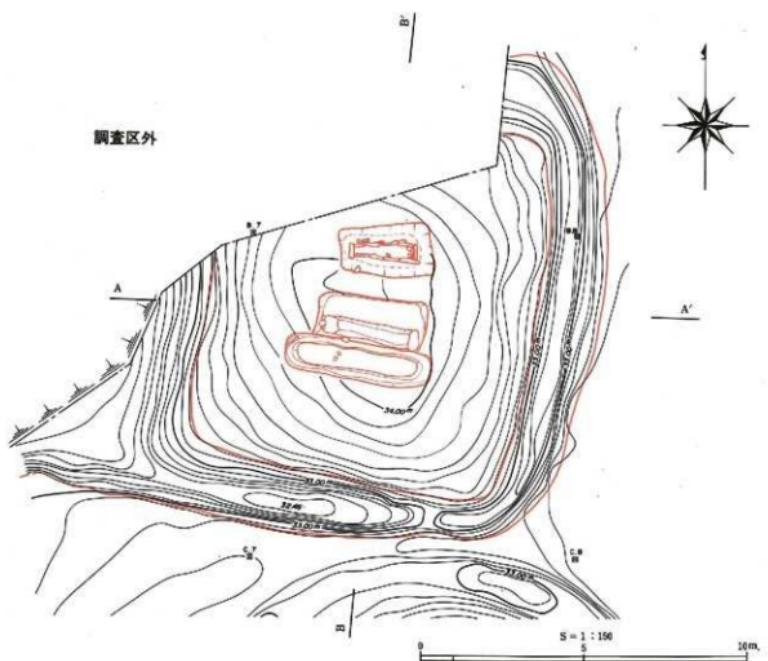
#### 2) 墳丘

##### 周溝

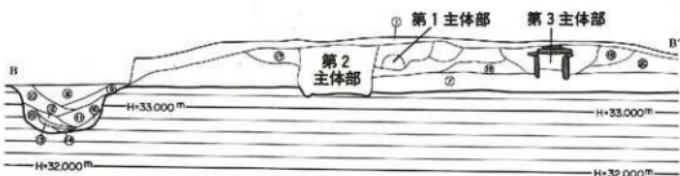
周溝は、西側を除く3方には巡るようである。北側は未発掘部分があるが北東隅部が検出されており、それより西に向けて続くと考えられる。西側は崖状になっており、周溝の有無は確認できなかった。現状で考える限り、西側は崖状の地形を利用して墳形に合うように掘削整形したものようである。これは、平野部から古墳を見たとき、古墳の規模をより大きく見せるための工夫であろう。

周溝検出上端部での南北径は約15m、幅は1～2m、深さは約0.7mである。古墳断面の検討から古墳築造時の

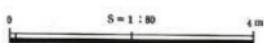




- ① 土
- ② 黒褐色粘質土
- ③ 黒褐色粘質土 (黒褐色粘質土小量少量)
- ④ 黒褐色粘質土 (黒褐色粘質土少量少量)
- ⑤ 黒褐色土・黒褐色粘質土小ブロック表在
- ⑥ 黒褐色粘質土 (黒褐色粘質土少量面)
- ⑦ 黒褐色粘質土
- ⑧ 黒褐色粘質土 (赤褐色粘質土小ブロック面)
- ⑨ 黒褐色粘質土 (黒褐色粘質土ブロック少量面)
- ⑩ 黒褐色粘質土
- ⑪ 黒褐色粘土 (黒褐色粘質土小粒混)
- ⑫ 黒褐色粘土
- ⑬ 黒褐色粘土 (黒褐色粘質土ブロック面)
- ⑭ 黒褐色粘土 (黒褐色・黒色粘質土ブロック面)



掲図97 19号墳墳丘遺存図



地表面は検出面より30cm程度高かったと考えられるため、径・幅・深さとも少し大きくなると思われる。形態的には17・18号墳とは異なり、断面形はV字状に近い形態をしており幅の割には深さがある。なお、南東隅近くに周溝幅が狭くなったうえに深さが浅くなった所があり、通路的な目的があったのではないかと考えられる。

#### 墳丘

墳丘は旧地表の黒褐色粘質土(⑦層)に直接盛土を行って築造している。調査時点での盛土は褐色系の土であり、周溝掘削に伴う赤褐色系の土は盛土に使われていない。これより、墳丘築造後に周溝を掘削したことがわかる。さらに周溝埋土には赤褐色系の土がほとんど含まれておらず、墳丘には赤褐色系の土が使われていないことがわかる。

墳形は方墳であり東西10m、南北は推定で11.5mを測る

#### 3) 墓葬主体

19号墳からは調査範囲内で3基の埋葬主体が検出された。中央部に位置するものを第1主体、南側に位置するものを第2主体、北側に位置するものを第3主体とした。3基とも東西方向に主軸をとり、古墳の短軸に対応している。

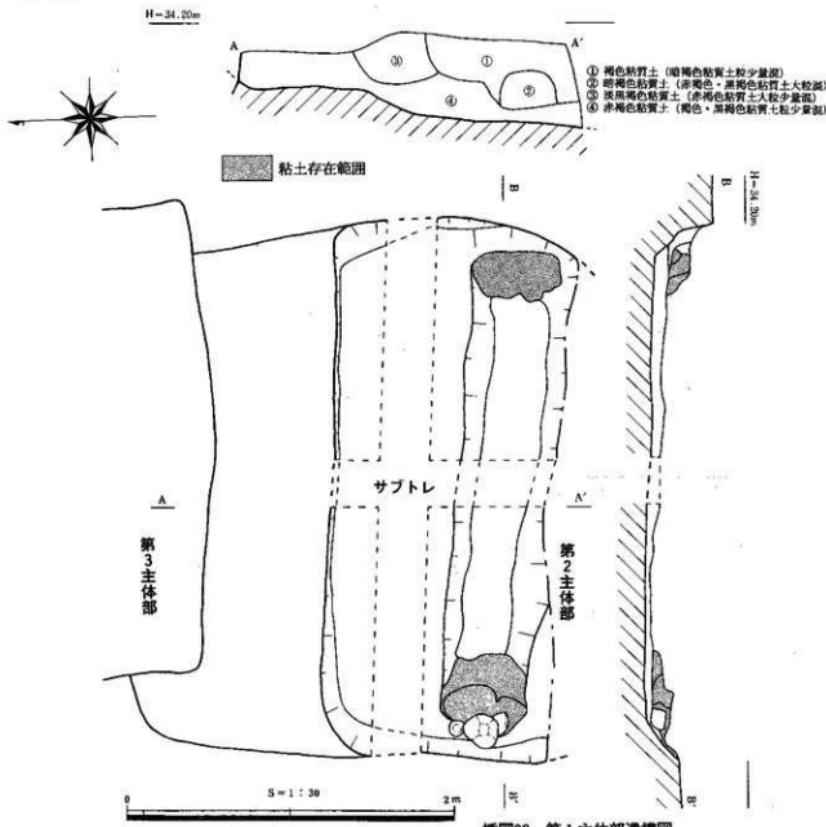


図98 第1主体部遺構図

## (I) 第1主体部

古墳中央にあり、古墳当初の埋葬主体である。墓壙は盛土面から掘り込まれ、掘り方は東西が3.4m、南北は第2・第3主体部による破壊を受けるが残存部で2.1m、深さ0.3~0.5mを測る。墓壙掘り下げ後、地山土と同じ赤褐色粘土で埋め戻し、その中に2段掘りの埋葬主体部を造っている。1段目の掘り方は、長軸3.4m、短軸1.4m以上、深さ0.25mを測る。1段目の底面には幅0.3mほどの平坦面があり、そこから掘り込まれている2段目の掘り方は、長軸3.0m、短軸0.65m程度、深さ0.15mを測り、主軸はE-12°-Sである。

底面は中央部が緩く窪んでいる。これは、木棺の底面形を表していることから、断面形が丸みを帯びる舟形木棺か割竹形木棺が考えられるが底面の丸みが弱いことから考えるならば、舟形木棺の可能性が強いと思われる。木棺の小口部にあたる両端には石と共に黄褐色の粘土がある。これは、木棺を固定するためのものと考えられる。木棺の規模は長さ2.5m、幅0.5m程度と考えられ、幅がやや広がることから東頭位と推測される。副葬品は検出されなかった。

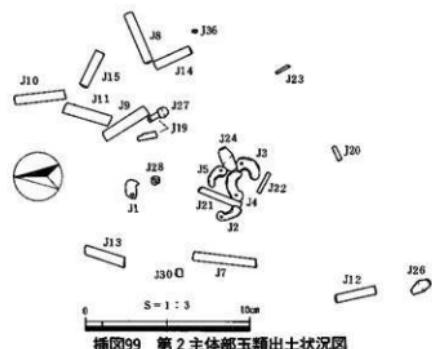
## (II) 第2主体部

古墳の南寄りに位置する。第1主体部を一部破壊して掘り込まれており、主軸方向はE-10°-Sである。墓壙平面形は隅丸長方形を呈する。第3主体部との前後関係は明らかでない。墓壙は盛土面から掘り込まれ、掘り方は東西が4.55m、南北は1.0~1.3m、深さ0.75~0.85mを測る。墓壙はほぼ垂直に掘り込まれており、底面には壁面下に幅0.2~0.5m、深さ0.1~0.15mの排水を意図した溝が巡る。主体部外に溝はない。台状に残された底面の規模は、東西3.6m、南北0.65mのほぼ長方形である。ここに東西2.75m、南北0.6mの範囲で粗い砂が存在している。この砂は、墓壙内に埋納された木棺の棺床であり、排水を意識していたものと推測される。底面には

2つの石があるが、石の下からは砂が検出されなかったため棺をのせるために当初から置かれていたと考えられる。土層観察より箱形木棺であり、その規模は幅0.6m、高0.3m程度、長さは2.5m以上はあったと推定される。頭位は、玉類の出土状態から東頭位と考えられる。

### 遺物出土状況

墓壙中央部の東寄りで、砂がなくなる境付近を中心として玉類が出土した。遺骸の頭部から胸部にあたると推定される。玉類は底面直上から出土した。装着状況をかなり復元でき、1重に連ねられた玉類は中心に勾玉が集まり、管玉がまわりを這ね、あいだに琰玉や白玉が挟まれるようである。



插図99 第2主体部玉類出土状況図

### 出土遺物

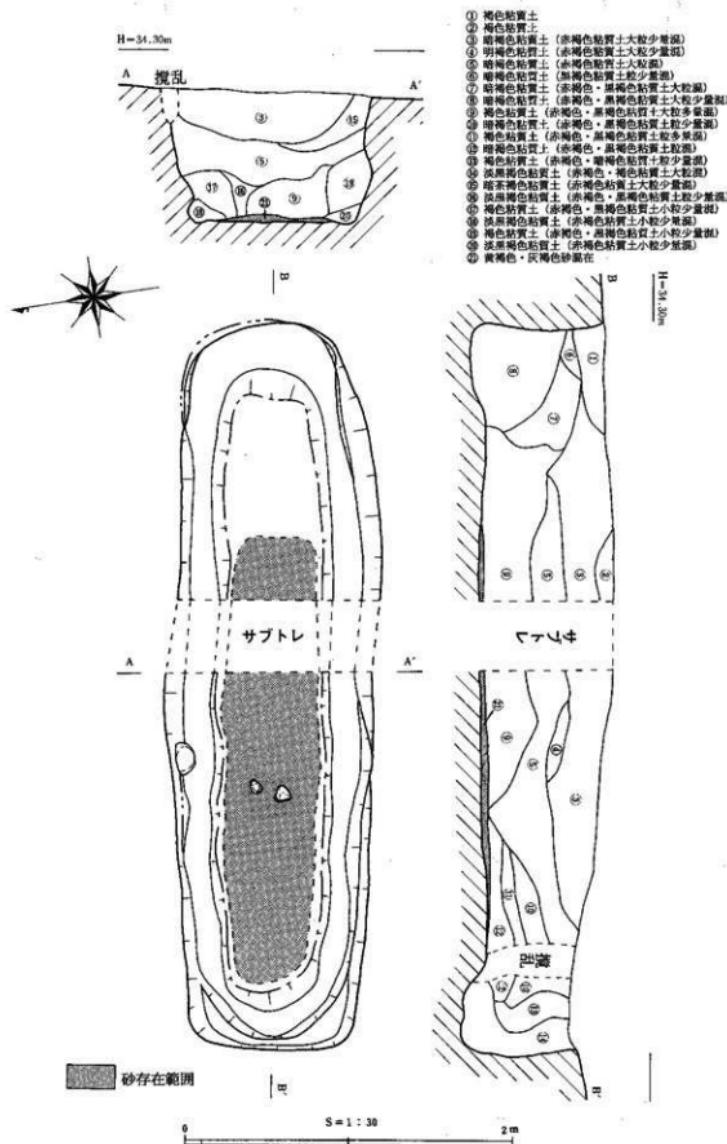
出土遺物は玉類のみで、勾玉6点、管玉17点、琰玉3点、算盤玉1点、白玉6点、小玉3点である。

勾玉には白濁色にわずかに淡緑色を帯びた不透明の硬玉製1点(J1)と蛇紋系岩製5点(J2~6)がある。J1はJ字形を呈し、頭部・側部が異常に肥大する。J2~6はC字形とコ字形の中間的形態を示す。

管玉には碧玉製12点(J7~14・16・18・19・23)、グリーンタフ製4点(J15・17・20・22)、蛇紋系岩製1点(J21)がある。碧玉・グリーンタフ製管玉はすべて淡い灰緑色を呈する。最大長のJ7は3.85cm、最小長のJ20は1.0cmであり、最大幅のJ11は0.7cm、最小幅のJ22は0.25cmと大小かなりの差が見られる。管玉はすべて丁寧に研磨されている。穿孔は両面穿孔のものが多い。

琰玉(J24~26)はすべて蛇紋系岩製である。J25・26はほぼ同形であり、J24は一通り大きい。

算盤玉(J27)は蛇紋系岩製で、ほぼ中央に明瞭な稜線がある。



挿図100 第2主体部造構図

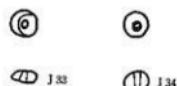
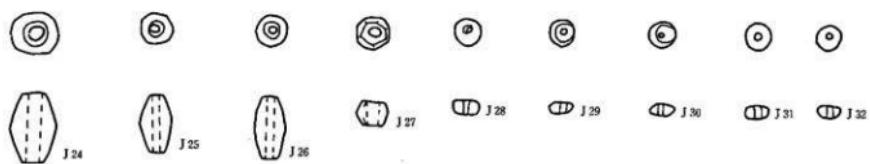
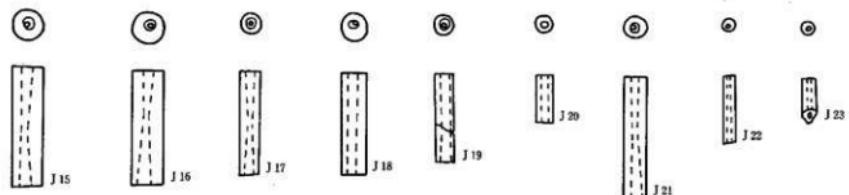
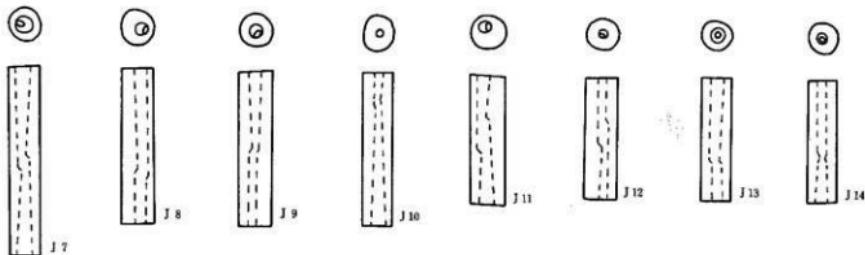


插圖101 第2主體部玉類夾測圖

擇表1 玉類計測表

遺物番号	取上番号	種類	材質	規模(cm)				重さ(g)	穿孔
				最大長	最大幅	最大厚	孔径		
J 1	542	勾玉	ヒスイ(硬玉)	1.10	0.80	0.30	0.20	0.6	片側
J 2	540	勾玉	蛇紋系岩	1.40	0.80	0.30	0.15	0.6	片側
J 3	538	勾玉	蛇紋系岩	1.40	0.80	0.30	0.10	0.5	片側
J 4	539	勾玉	蛇紋系岩	1.35	0.80	0.35	0.15	0.3	片側
J 5	541	勾玉	蛇紋系岩	1.20	0.80	0.25	0.10	0.4	両側
J 6	498	勾玉	蛇紋系岩	1.20	0.80	0.30	0.15	0.4	片側
J 7	528	管玉	碧玉	3.85	0.65			0.30	3.2
J 8	523	管玉	碧玉	3.25	0.65			0.25	2.3
J 9	526	管玉	碧玉	3.20	0.65			0.25	2.4
J 10	521	管玉	碧玉	3.10	0.65			0.30	2.2
J 11	525	管玉	碧玉	2.75	0.70			0.30	2.5
J 12	532	管玉	碧玉	2.65	0.70			0.20	2.3
J 13	527	管玉	碧玉	2.60	0.65			0.25	1.7
J 14	524	管玉	碧玉	2.55	0.60			0.25	1.8
J 15	522	管玉	グリーンタフ	2.45	0.65			0.25	1.2
J 16	496	管玉	碧玉	2.35	0.65			0.25	1.9
J 17	497	管玉	グリーンタフ	2.20	0.40			0.20	0.5
J 18	495	管玉	碧玉	2.10	0.50			0.20	1.1
J 19	534-535	管玉	碧玉	1.90	0.40			0.25	0.5
J 20	531	管玉	グリーンタフ	1.00	0.40			0.20	0.2
J 21	529	管玉	蛇紋系岩	2.50	0.45			0.20	1.0
J 22	530	管玉	グリーンタフ	1.40	0.25			0.15	0.1
J 23	533	管玉	碧玉	1.00	0.30			0.10	0.1
J 24	536	棗玉	蛇紋系岩	1.50	0.90			0.30	1.5
J 25	510	棗玉	蛇紋系岩	1.25	0.65			0.20	0.7
J 26	537	棗玉	蛇紋系岩	1.30	0.60			0.25	0.7
J 27	543	算盤玉	蛇紋系岩	0.60	0.70			0.25	0.4
J 28	544	白玉	蛇紋系岩	0.30	0.55			0.15	0.2
J 29	501	白玉	蛇紋系岩	0.30	0.55			0.25	0.1
J 30	546	白玉	蛇紋系岩	0.35	0.50			0.20	0.2
J 31	502	白玉	蛇紋系岩	0.30	0.50			0.25	0.2
J 32	503	白玉	蛇紋系岩	0.30	0.50			0.25	0.2
J 33	504	白玉	蛇紋系岩	0.20	0.50			0.20	0.1
J 34	500	小玉	ガラス	0.50	0.50				
J 35	499	小玉	ガラス	0.35	0.55			0.15	0.1
J 36	547	小玉	ガラス						

白玉(J 28~33)はいずれも蛇紋系岩製で、直径は5mm前後である。

小玉の3点はいずれもガラス製で色調はスカイブルーを呈する。J 36は破片のため十分な観察ができないが、J 34・35はいびつな球形を呈し、巻つけ技法によって作られたと考えられる。

### (III) 第3主体部

古墳の北寄りに位置する。第1・第2主体と主軸をほぼ平行にしており、主軸方向はE-3°-Sである。第1

主体部を墓壙掘り方が一部破壊している。

墓壙は盛土面から掘り込まれており、掘り方は上面で長軸2.9m、短軸1.3~1.6m、下面で長軸2.4m、短軸0.9mの長方形形状を呈する。壁は緩く立ち上がる。

墓壙中には組合せ式の箱式石棺が埋置されている。石棺埋置にあたり、石棺内床面部分を残して墓壙底面を一段掘り下げ、さらに側板固定用に側壁側は浅く、小口部側は深く墓壙底面に溝を掘り、小口石を深く埋め込み側壁石を固定している。組合せは小口石が側壁石を挟んでいる。石棺の内法は長軸1.8m、東側短辺0.4m、西側短辺0.24m、東側深さ0.25m、西側深さ0.2mであり、東側が西側に比べてやや広く深くなっている、遺骸は東頭位であると推測された。

側壁は両辺とも4枚の板石で形成されており、その縫目は小振りの板石で目張りされているが十分なものではなく、石棺内は土が流入して埋まっていた。粘土での被覆は認められなかった。小口石は両辺とも2重に埋置されており、内側の小振りの石は側壁石に挟まれるが、外側の大振りの石は側壁石を挟むように配置されている。小口部の補強と密閉度を高める目的があったと推測される。

蓋石は0.7×0.5m程度の板状石材を7枚、さらに小さな石材を目張りのために10枚以上用いている。蓋石には表裏とも明確な加工痕は認められないが、板状節理を利用して割出されたものであろう。蓋石の隙間には若干の黄色褐色粘質土が認められ、粘土被覆が行われていた可能性がある。

なお、図示していないが古墳南側の周溝内埋土の中位付近より石棺石材と同質の石材が2枚出土した。他に石材を用いる施設は検出されなかったので石棺材の一部と考えられる。蓋石の一部が後世の擾乱を受けたことがあるものと推測される。

石棺内の東側小口部に床面から0.1m浮いた位置で3枚の板石が検出された。石の上に器台があることから、埋葬時に意図的に床面を埋め戻して設置されていたと考えられる。石から蓋石まで空間があまりないため、遺骸の枕としての用途は考え難く、副葬品安置用の空間として利用されたと推測される。

追葬を示す痕跡は認められなかった。

#### 遺物出土状況

石棺内の東側小口石に接するように土師器の器台が出土した。床面から0.1m浮いた位置にある石の上にあり、受部を西に向けて横転していた。副葬時に横向きに置かれたと判断される。

#### 出土遺物

第3主体部に伴う遺物は土師器器台Po 1（挿図102・図版17）1点である。頸部の稜を失った鼓形器台で、受部内外面はヘラ磨き、脚部は外面ヘラ磨き、内面ケズリである。

挿図102 第3主体部土器実測図

S = 1 : 4  
10cm

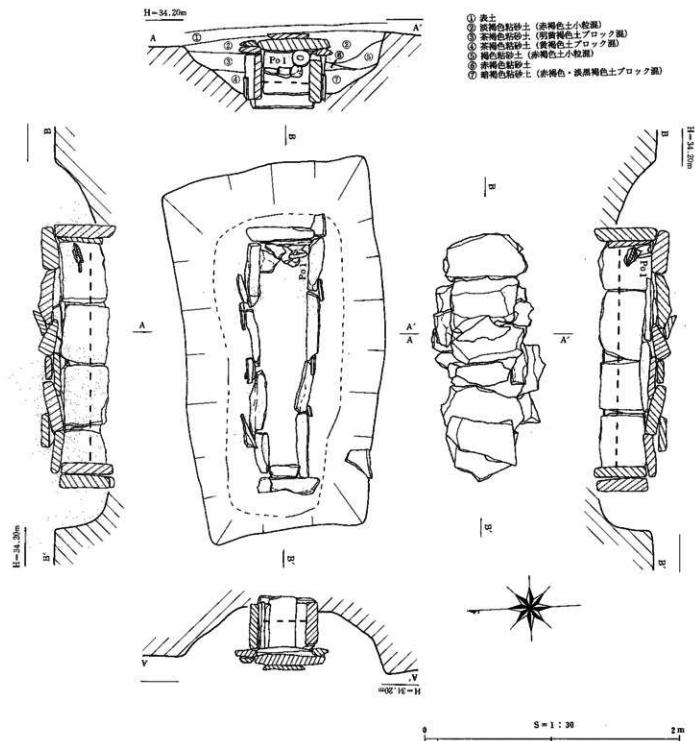
#### 4) 周溝内遺物出土状況

古墳東側周溝内より1個体になる甕（Po 2）の口縁から胴部が出土した。底面より0.2m浮いた付近が中心である。胴部片の上に完形の口縁部が下に向いた状態で乗っている。埴丘上からの転落と考えるには不自然であり、意図的に破碎したものと推測される。周溝が埋まりかけた段階のものであるが、この遺物がどの埋葬主体に関係するのかは不明である。

また、南側の周溝内から集石を検出した。南側から流れ込んだ様子がうかがえるが、周溝の埋没時期を考えるうえで隣接する位置にある18号墳との関連性が問題となるが、18号墳には集石で検出されたような石は使用されておらず直接の関連性は認められない。

#### 出土遺物

甕Po 2（挿図105・図版17）は、口縁の立ち上がり部がやや内傾する複合口縁を呈する。頸部に1条の突帯を持ち、突帯以下に板状工具による綾杉文が施されている。胴部下半から底部にかけてを欠損するが個々の破片の焼成は良好であり、器壁は薄く、胎土は緻密である。



挿図103 第3主体部遺構図

H=34.30m

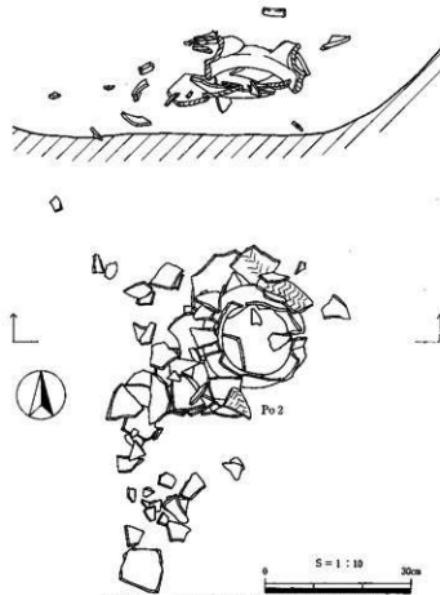


插圖104 19號墳周溝內土器出土狀況圖

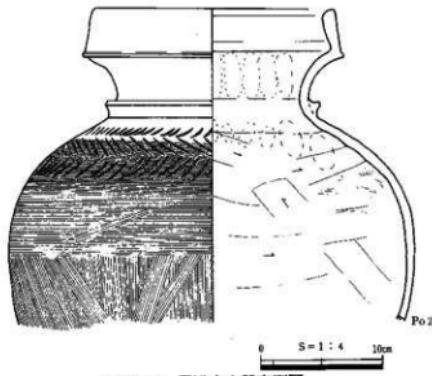


插圖105 周溝內土器實測圖

插表2 土坑・土壤一覧表

S K番号	平面形態	検出面 長軸×短軸×深さ 底面 長軸×短軸 (cm)	底面ピット 径×深さ (cm)	長軸方位	検出遺物	備考
S K-01	隅丸長方形	128×100×107 51×47	19×33	N-76°-E		
S K-02	隅丸長方形	321×(230)×46 235×99		N-70°-W	須恵器 (环壹・环身) 鐵鍼	
S K-03	円 形	97×82×52 125×123		N-27°-E		袋状
S K-04	椭円形	118×96×49 130×114		N-41°-W		II
S K-05	長方形	80×70×95 49×44		N-19°-E		
S K-06	椭円形	97×83×85 72×56	17×19	N-57°-E		S × 1
S K-07	椭円形	74×61×79 70×43	13×21	N-88°-W		
S K-08	円 形	93×89×68 58×42		N 83° E		
S K-09	椭円形	91×78×34 82×76		N-10°-W	土師質土器 (熔格) 唐津	
S K-10	椭円形	119×93×45 86×41		N-81°-E		
S K-11	長方形	(143)×72×25 125×27		N-60°-W		S
S K-12	隅丸長方形	116×87×24 99×65		N 38° E		
S K-13	不定形	149×81×6 136×66		N-68°-E		
S K-14	椭円形	133×117×72 72×62	14×9	N-67°-E		S × 1
S K-15	隅丸長方形	129×59×38 109×48		N-74°-E		底面に掘り込み
S K-16	長椭円形	222×82×26 206×47		N-63°-E	No290	
S K-17	不定形	207×100×47 115×30		N-47°-W		
S K-18	隅丸長方形	93×63×70 69×45	16×16	N-78°-W		
S K-19	隅丸長方形	94×89×112 51×35	15×25	N-75°-E		S × 2
S K-20	長方形	126×81×85 88×48	21×25	N-62°-E		
S K-21	隅丸方形	89×79×101 58×52	14×11	N-47°-E		
S K-22	隅丸長方形	91×78×103 47×44	18×13	N-54°-W		
S K-23	隅丸長方形	100×80×89 68×62	14×17	N-46°-W		
S K-24	隅丸長方形	122×77×36 114×74	30×21	N-55°-E		
S K-25	不定形	127×67×13 74×37		N-35°-E	No376	
S K-26	不整椭円形	102×89×84 85×54		N-77°-W		
S K-27	隅丸長方形	115×64×22 98×59	26×22	N-34°-E		
S K-28	隅丸長方形	105×68×38 94×62		N-64°-E		
S K-29	不定形	206×110×16 101×23		N-45°-E		
S K-30	不定形	204×114×34 132×30		N-12°-E		
S K-31	不定形	241×147×40 98×20		N-5° W		
S K-32	隅丸長方形	99×66×90 60×32	14×17	N-2°-E		

S K番号	平面形態	検出面 長軸×短軸×深さ 底面 長軸×短軸 (cm)	底面ピット 径×深さ (cm)	長軸方位	検出遺物	備考
S K-33	不定形	111×102×34 39×31		N-1°~W		
S K-34	不定形	70×50×22 28×10		N-10°~W		
S K-35	不定形	360×113×70 136×46		N-10°~E		
S K-36	隅丸長方形	112×89×97 59×30	20×9	N-65°~E		
S K-37	橢円形	93×80×85 50×47	8×12 (8)×12	N-89°~E		底面ピットが2つある
S K-38	橢円形	100×76×92 (47)×42	17×15	N-58°~E		S×5
S K-39	隅丸長方形	80×59×113 45×28	19×7	N-55°~E		S×1 炭化木
S K-40	隅丸長方形	92×90×97 66×64	19×23	N-6°~W		
S K-41	隅丸長方形	97×80×100 66×61	14×29	N-57°~W		
S K-42	隅丸長方形	94×64×107 61×47	7×6	N-38°~E		
S K-43	橢円形	109×93×83 52×41	14×24	N-56°~E		S×3
S K-44	隅丸長方形	100×92×104 67×58	27×12	N-1°~W	No675	
S K-45	橢円形	105×74×31 58×48		N-36°~E		
S K-46	隅丸長方形	83×61×111 63×37	13×23	N-42°~W		S×1
S K-47	隅丸長方形	135×124×110 70×68	20×13	N-6°~E		S×2
S K-48	橢円形	111×63×87 70×50	16×11	N-40°~W		
S K-49	不定形	(130)×122×64 (95)×66		N-78°~W		
S K-50	隅丸長方形	109×83×99 90×63	15×22	N-54°~E		
S K-51	隅丸長方形	111×74×114 60×49	17×25	N-57°~W		
S K-52	隅丸長方形	124×66×61 109×60	22×34	N-61°~E		
S K-53	隅丸長方形	102×95×104 71×54	16×16	N-60°~E		S×4
S K-54	不定形	101×76×57 65×38		N-27°~E		
S K-55	橢円形	114×102×102 64×56	16×12	N-28°~W		S×1
S K-56	橢円形	98×65×76 87×60		N-16°~E		
S K-57	橢円形	67×52×15 51×41	18×19	N-78°~W		
S K-58	隅丸長方形	164×126×79 117×73	22×46	N-61°~E		
S K-59	隅丸方形	95×87×87 50×47		N-68°~E		
S K-60	不定形	174×138×37 127×58		N-62°~E		
S K-61	橢円形	112×98×82 95×84		N-27°~W	No678~682	S×4

捕表3 土器観察表

出土位置	遺物番号 確認番号 既認番号	取上番号	種類 形質	法	手 法	粘 土	焼 成	色 調	備考
S I - 01	Po 1 5 14	418	土器断 面	①17.9mm ②8.8mm	外傾する複合口縁。口縁部は 丸くおさまる。脇曲部の腹は水 平方向に突出する。	背面内部へラケツリ。他の内外 面ヨコナダ。	1mm程度の 砂粒含む	やや不良	内外面赤 黄褐色
	Po 2 5 14	420	土器断 面	①14.9mm ②9.5mm	外反気泡に外縁する複合口縁。 口縁部は丸くおさまる。脇曲 部の腹は水平方向へ突出する。 外縁に突出する。	内外面ヨコナダ。	密、石英、 長石を含む	不良	内外面赤 黄褐色
S I - 03	Po 1 5 14	687	土器断 面	①25.6mm ②12.8mm	外傾する複合口縁。口縁部は 丸くおさまる。脇曲部の腹は水 平方向に突出する。両部外縁に平 行沈線と波状文を這らす。	背面内部風化のため調査不良。	細胞を含む	良好	内外面赤 褐色
	Po 2 9 14	683	土器断 面	①14.0mm ②4.1mm	外反気泡に外縁する複合口縁。 口縁部は丸くおさまる。脇曲部の 腹は水平方向へ突出する。外縁に平 行沈線と波状文を這らす。	背面内部へラケツリ。他の内外 面ヨコナダ。	1~2mmの 砂粒を含む	良好	内外面赤 褐色
S K - 02	Po 1 45 15	364、373	直筒器 环底	①13.6 ②6.6	口縁部はやや内傾斜に底立す る。口縁部の腹は内傾する段をもつ。 外縁には鋸い縫をもつ。	天井部外表面凹回転へラケツリ。 天井部内面不整方向ナダ。他の 内外面ヨコナダ。	細砂粒を含 む	不良	内外面赤 褐色
	Po 2 45 15	369	直筒器 环底	①14.8 ②5.0	口縁部はやや内傾斜して外方へ 下りる。口縁部の腹は内傾する 段を持つ。外縁には鋸い縫をも つ。	天井部外表面凹回転へラケツリ。 天井部内面不整方向ナダ。他の 内外面ヨコナダ。	細砂粒を含 む	不良	内外面赤 褐色
S K - 02	Po 3 46 15	362、371 374	直筒器 环底	①25.0 ②6.2	口縁部はやや内傾斜に下立す る。口縁部の腹は内傾する 段をもつ。外縁には鋸い縫をも つ。	天井部外表面凹回転へラケツリ。 天井部内面不整方向ナダ。他の 内外面ヨコナダ。	細砂粒を含 む	不良	内外面赤 褐色
	Po 4 46 15	361	直筒器 环底	①14.1 ②4.9	口縁部はやや内傾斜して外方へ 下りる。口縁部の腹は内傾する 段をもつ。外縁には鋸い縫をも つ。	天井部外表面凹回転へラケツリ。 天井部内面不整方向ナダ。他の 内外面ヨコナダ。	細砂粒を含 む	不良	内外面赤 褐色
S K - 02	Po 5 46 15	370、372	直筒器 环底	①14.7 ②6.1	口縁部は直筒形状に下立す。 口縁部の腹は内傾する段をもつ。 外縁には鋸い縫をもつ。	天井部外表面凹回転へラケツリ。 天井部内面不整方向ナダ。他の 内外面ヨコナダ。	細砂粒を含 む	不良	内外面赤 褐色
	Po 6 46 15	368	直筒器 环底	①14.5 ②4.4	口縁部は直筒形状に下立す。 口縁部の腹は内傾する段をもつ。 外縁には鋸い縫をもつ。	天井部外表面凹回転へラケツリ。 天井部内面不整方向ナダ。他の 内外面ヨコナダ。	1~2mmの 砂粒を含む	良好	内外面灰 色
S K - 02	Po 7 45 15	367	直筒器 环身	①12.3 ②4.9	立ち上がりにはほぼ直立する。 立ち上がり部分は丸くおさまる。 受部は水平方向へ引き出すよ うにしておさめる。底盤は 堅平だ。	体部外部凹回転へラケツリ。底 盤部内面不整方向ナダ。他の内外 面ヨコナダ。	細砂粒を含 む	不良	内面赤 褐色 外面灰 色
	Po 8 45 15	363	直筒器 环身	①12.8 ②5.5	立ち上がりにはほぼ直立する。 立ち上がり部分は丸くおさまる。 受部は水平方向へ引き出すよ うにしておさめる。底盤は 堅平だ。	体部外部凹回転へラケツリ。底 盤部内面不整方向ナダ。他の内外 面ヨコナダ。	細砂粒を含 む	不良	内外面赤 褐色
S K - 02	Po 9 46 15	362	直筒器 环身	①12.6 ②4.8	立ち上がりにはほぼ直立する。 立ち上がり部分は丸くおさまる。 受部は水平方向へ引き出すよ うにしておさめる。底盤は 堅平だ。	体部外部凹回転へラケツリ。底 盤部内面不整方向ナダ。他の内外 面ヨコナダ。	細砂粒を含 む	不良	内面赤 褐色 外面灰 色
	Po 10 46 15	366	直筒器 环身	①12.6 ②6.2	立ち上がりにはほぼ直立する。 立ち上がり部分は丸くおさまる。 受部は水平方向へ引き出すよ うにしておさめる。底盤は 堅平だ。	体部外部凹回転へラケツリ。底 盤部内面不整方向ナダ。他の内外 面ヨコナダ。	細砂粒を含 む	不良	内外面赤 褐色
S K - 02	Po 11 46 15	372	直筒器 环身	①12.6 ②6.3	立ち上がりにはほぼ直立する。 立ち上がり部分は丸くおさまる。 受部は水平方向へ引き出すよ うにしておさめる。底盤は 堅平だ。	体部外部凹回転へラケツリ。底 盤部内面不整方向ナダ。他の内外 面ヨコナダ。	細砂粒を含 む	不良	内外面赤 褐色
	Po 12 46 15	365	直筒器 环身	①12.0 ②4.8	立ち上がりは直線的に内傾する。 立ち上がり部分および受部は丸 くおさまる。底盤は堅平だ。	体部外部凹回転へラケツリ。底 盤部内面不整方向ナダ。他の内外 面ヨコナダ。	細砂粒を含 む	良好	内外面灰 色
S K - 09	Po 1 52 14	198	土器質土器 焰	①18.0mm ②4.5mm	口縁部は内傾して立ち上がり。 口縁部の腹は半球形になす。	外表面によるナダ。内面ナダ。 密	良好	内外面赤 褐色	外側にスス付 着
	Po 2 52 14	196	土器質土器 焰	①31.3mm ②4.6mm	口縁部は内傾して立ち上がり。 口縁部の腹は半球形になす。	外表面によるナダ。内面ナダ。 密	良好	内外面赤 褐色	
S K - 25	Po 1 58	195	唐津 器	①23.0mm ②4.4mm	体部は胡蝶状に開き、口縁を外 に折り曲げる。	密	良好	内面灰 色 外面灰 色	
	Po 2 58	376	唐津 器	①12.0mm ②3.1mm	口縁部は外反し、口縁部はつ まみ上げる。	密	良好	内面灰 色 外面白 銀、茶色	
S K - 61	Po 1 74 14	679	染め付け 器	①15.0mm	低い高台のつく底盤。	密	良好	内外面青 白色	
	Po 2 74 14	681	直筒 器	②2.2mm	高い高台のつく底盤。	密	良好	内面茶褐 外面灰褐 色	砂粒有り

出土位置	植物番号 採取箇所 採取番号	取上番号	種類 規格	法量(cm)	形 態	手 法	粉 土	角 度	色 調	備 考
内側周溝 (T-29) (T-30)	Po 1 79 14	414	土縫器 高坪	①15.0cm ②12.5cm	外側する延長した複合口縫。口縫端部は丸くおさめる。底部以下にはあまり張りがない。	外側ナデ。複合内側ユビオサエ。内側内面ヘラケズリ。	砂粒。小砂を含む	良好	内外混色 褐色	
Po 2 79	26		土縫器 高坪	①16.0cm ②14.5cm	複合を有する口縫。口縫端部は丸くおさめる。	外側前面下半ハケメ。他は内外兼用。	砂粒。小砂を含む	良好	内外混色 褐色	
Po 2 79	22		土縫器 高坪	①1.8cm	複合の底部。	外側放射状のハケメ。内側剥離のため調整不明。	砂粒・土質。砂粒を含む	良好	内外混色 褐色	外側赤褐色 發達
Po 3 79	164、165 165		土縫器 坪	②0.8cm	内側して立ち上がる複合と聞く複合。底部は複合端部で内側剥離を防ぐ。	複合内面ヘラケズリ。他は内外兼用。	砂粒	良好	内外混色 褐色	
Po 4 79	163		土縫器土器 皿	①0.4cm ②0.2cm	複合。口縫部は内側して立ち上がる。平底。	口縫部内面ナデ。底部内外側風化のため調整不良。	砂粒を含む	良好	内外混色 褐色	
Po 1 80 14	670		縄文土器 押型文	③4.4cm	外側に押型文（樹円文）を施す。	外側縦線の楕円文。内側削仕切跡。内面には斜行沈線。	砂粒含む	やや不良	内外混色 褐色	
Po 2 80 14	670		縄文土器 押型文	③7.0cm	外側に押型文（樹円文）を施す。	外側縦線の楕円文。内面ナデ。	砂粒含む	やや不良	内外混色 褐色	
Po 3 89 14	670		縄文土器 押型文	③5.0cm	外側に押型文（楕円文）を施す。	外側縦線の楕円文。内面ナデ。	砂粒含む	やや不良	内外混色 褐色	
Po 4 89 14	670		縄文土器 押型文	③4.9cm	外側に押型文（楕円文）を施す。	外側縦線の楕円文。内面ナデ。	砂粒含む	やや不良	内外混色 褐色	
Po 5 80 14	467		縄文土器 鉢	③3.7cm	口縫端部の上部に刻み目を施す。	内外曲ナデ。	砂粒含む	良好	内外混色 褐色	
Po 6 80 14	453		縄文土器 鉢	③0.6cm	口縫端部の上部に刻み目を施す。	内外曲ナデ。	砂粒含む	良好	内外混色 褐色	
Po 1 85 16	567		土縫器 甕	①15.0cm ②4.9cm	外側して立ち上がる複合口縫。口縫端部は丸くおさめる。口縫部下端は外へ突出する。口縫部内面の段は不規則。	外側風化のため調整不良。	細砂粒を含む	やや不良	内外混色 褐色	
Po 2 86 16	585		土縫器 甕	①13.2cm ②1.5cm	わずかに外反しながら外傾する複合口縫。口縫端部は丸いが上端はすこしに見える。口縫部下端は内方へ突出する。口縫部内面の段は不規則。	複合内面右方向ヘラケズリ。他は内面ナコナ。	砂粒を含む	良好	内外混色 褐色	
Po 3 86 16	571		土縫器 甕	①13.8cm ②0.5cm	わずかに外反しながら外傾する複合口縫。口縫端部は丸くおさめる。口縫部下端は内方へ突出する。	外側ヨコナデ。	1mm程度の砂粒を含む	良好	内外混色 褐色	
Po 4 86 16	636		土縫器 甕	①13.0cm ②4.3cm	口縫部は外反ししながら外傾する複合口縫。口縫端部は丸くおさめる。口縫部下端は内方へ突出する。	外側内面ヘラケズリ。他は内面ナコナ。	粗。1mm程度の砂粒を含む	良好	内外混色 褐色	
Po 5 86 16	254		土縫器 甕	①15.8cm ②0.5cm	口縫部は外傾して短く立ち上がる複合口縫。口縫端部上面は丸くナカタわざずには凹む。口縫部下端は外へ突出する。	外側ヨコナデ。	1mm程度の砂粒を含む	良好	内外混色 褐色	
Po 6 86 16	351、352 358、413		土縫器 甕	①15.7cm ②0.9cm	口縫部は内側して短く立ち上がる複合口縫。口縫端部上面は丸くナカタわざずには凹む。口縫部下端は内方へ突出する。口縫部下端は外方へ突出する。	外側外ヨコカハ。内面ヌビオサエ。下端ヘラケズリ。他は内面ヨコナ。	1~2mmの砂粒を含む	良好	内外混色 褐色	西側周溝内
Po 7 86	200、201 203		土縫器 高坪	①14.9cm ②6.8cm	複合の形態を有する。内側して立ち上がる複合口縫。口縫端部上面は丸くおさめる。口縫部と底端との境には丸い段をもつ。	風化のため内外調整不良。	1~2mmの砂粒を含む	やや不良	内外混色 褐色	
Po 8 86	69		土縫器 高坪	①14.5cm ②6.8cm	深い窪みを有する口縫。内側して立ち上がる複合口縫。	外側内面ヨコナデ。内面風化のため調整不良。	粗粒。石英。雲母を含む	良好	内外混色 褐色	
Po 9 86	456		土縫器 高坪	②1.7cm	口縫部の裏片。	内面曲ナデ。	1~2mmの砂粒を含む	良好	内外混色 褐色	
Po 10 86	389		土縫器 高坪	②2.8cm	口縫部の破片。	内面内面ヨコナデ。内面不整方向ナデ。	1~2mmの砂粒を含む	やや不良	内外混色 褐色	
Po 11 86	513		土縫器 低窪环剥部	②2.2cm	「ハ」の字状に開く脚部。	脚部の外側ヨコナデ。内面風化のため調整不良。	石英。雲母を含む	やや不良	内外混色 褐色	
Po 12 86	251		土縫器 低窪环剥部	②1.8cm ④4.8cm	「ハ」の字状に開く脚部。	内面ヨコナ。	石英。黄玉を含む	良好	内外混色 褐色	
Po 13 86	474		土縫器 落台	①22.0cm ②3.8cm	外反して開く底部。端部は平底。表面をなす。	外側ヨコナデ。内面丁寧なナデ。	砂粒。雲母を含む	良好	内外混色 褐色	
Po 14 86	652		土縫器 落台	②0.3cm ③26.0cm	直線的。「ハ」の字状に開く台座。端部は平場面をなす。	外側ナデハケ。内面風化のため調整不良。	石英。雲母を含む	良好	内外混色 褐色	

出土位置	遺物番号 標印番号 図版番号	取上面	種類 形質	性状(cm)	形 態	手 法	施 土	施 成	色 調	備 考
	Po 1 95 16	715	土器部 裏	⑩12.2× ⑩4.1△	外反気味に外側する複合口縁。口縁部は丸くおさまる。底面 の腰部は水平方に突出する。	脚部内面へラケツリ。他の内外 面ヨコナダ。	密	良好	内外面赤 黄褐色	
	Po 2 95 16	392	土器部 裏	⑩29.4× ⑩3.9△	口縁部は外側して短く立ち上がる複合口縁。口縁部上面は強 くナデ(むすび)に凹(こま)せる。口 縁部下端は外方に突出する。	両面部内面へラケツリ。他の内外 面ヨコナダ。	粗粒。1mm の砂粒を含む	良好	内外面淡 黃褐色	
	Po 3 95 16	332	上部器 裏	⑩4.8× ⑩4.8△	外反する「く」の字状口縁。口 縁部はわずかに肥厚し、丸く おさまる。	背面内面へラケツリ。他の内外 面ヨコナダ。	粗粒。1~2 mm程度の砂 粒を含む	良好	内外面淡 黃褐色	
	Po 4 95	296	上部器 環	⑩29.0× ⑩3.0△	外反するく形口縁。端部は平坦 面をなす。	背面ヨコナダ。内面ヨコナダ後 縁は縫合線。	中や粗。石 英・長石を 含む	良好	内外面赤 黄褐色	縫合付
	Po 5 95	618	上部器 裏?	⑩10.9× ⑩2.6△	II型脚部は外傾脚部で立ち上がり、 端部は平行脚部で丸くおさまる。	内外面ナダ。	密	良好	内外面赤 色、 黄褐色	内外面赤 色、 黄褐色
	Po 6 95 356	384, 289 384, 356	底器部 环	⑩13.7 ⑩4.3	口縁部は内側して下方方に開く。 口縁部は外側して下方方に開く。 腰部は丸くおさまる。底面 をもつ。外面上に横(よこ)い模様をもつ。	先端部外周面へラケツリ。 先端部内周面へラケツリ。 腰部ヨコナダ。底面ヨコナダ。	密	良好	内外面淡 黃褐色	腰 底面周縁内
	Po 7 95 16	297, 288 344, 354 360	底器部 环	⑩13.5 ⑩3.5	底盤模様(まみの付く處)。内面 腰部は丸くおさまる。外面上に横(よこ) い模様をもつ。口縁部と天井部の境 界はやや斜めである。	天井部外周面右方向へラケツリ。 腰部ヨコナダ。	中や粗。1 mm程度の砂 粒を含む	良好	内外面赤 色、 黄褐色	天井部全体 に斜め 腰面周縁内
	Po 8 95 16	439, 441 446, 447 449, 451	底器部 环舟	⑩11.8× ⑩2.5△	立ち上がりは直角形状でほぼ直 立する。立ち上がり腰部は内面 に高い段(だん)をもつ。受部は水平方 向に引出するようにしておさま る。	底盤外周面右方向へラケツリ。底 盤内面不整面ヨコナダ。舟は内面ヨコ ナダ。	密	良好	内外面淡 黃褐色	主体部内
	Po 9 95 16	267, 286 363, 356 356	底器部 环舟	⑩12.4× ⑩4.7△	立ち上がりは内側してやや内傾 し、端部は丸くおさまる。受部は水平方 向に引出するようにしておさま る。	底盤外周面右方向へラケツリ。底 盤は内面ヨコナダ。	密	良好	内外面淡 黃褐色	
	Po 10 95 16	6, 348	底器部 环舟	⑩12.6× ⑩4.9△	立ち上がりは直角形状で内面に高 い段をもつ。上りきり腰部は丸く おさまる。受部は水平方向に引 出するようにして丸くおさまる。 底盤内面に凹(こま)い模様が認 識される。	底盤外周面右方向へラケツリ。底 盤内面ヨコナダ。舟は内面ヨコナダ。	密	良好	内外面淡 黃褐色	腰ヨコナダ 北側周縁内
18号棟	Po 11 95 16	6, 348 349	底器部 环舟	⑩15.1 ⑩20.6 ⑩9.2	舟端部は内側して外傾し、 口縁部は外反する。腰部は丸く おさまる。舟端部は外反して、 腰部は外傾して外反する。腰部 は下外側へ外反してのび、腰 部で内側へ折曲(ねじり)せる。腰部 は丸くおさまる。腰部3方向に 丸くおさまる。	舟端部内面腰部は外傾方向ナダ。 舟端部外周部は外反方向ナダ。舟 端部外側腰部は外傾方向ナダ。舟 端部内側腰部ヨコナダ。舟は内面ヨコ ナダ。	粗粒。1mm をむすびに 含む	良好	内外面淡 黃褐色	北側周縁内
	Po 12 95 16	276, 345 279, 366	底器部 高环	⑩14.2 ⑩21.4 ⑩9.3△	舟端部口縁部は内側して外傾し、 口縁部は外反する。腰部は丸く おさまる。舟端部に3つの凸部(こぶ) がある。舟端部上面は斜めで、舟 端部は下外側へ外反してのび、舟 端部で内側へ折曲(ねじり)せる。腰部 は丸くおさまる。腰部3方向に 丸くおさまる。	舟端部内面腰部不整面方向ナダ。 舟端部外周部外反方向ナダ。舟 端部外側腰部ヨコナダ。舟は内面ヨコ ナダ。	密	やや不良	内外面淡 黃褐色	北側周縁内
	Po 13 95 16	308, 355	底器部 高环	⑩17.0 ⑩21.4 ⑩9.1	舟端部内面で外傾し、 口縁部は外反するようになり る。舟端部上面に3つの凸部(こぶ) がある。舟端部には斜めで、舟 端部は下外側へ外反してのび、舟 端部で内側へ折曲(ねじり)せる。腰部 は丸くおさまる。腰部3方向に 丸くおさまる。	舟端部内面腰部不整面方向ナダ。 舟端部外周部外反方向ナダ。舟 端部外側腰部ヨコナダ。舟は内面ヨコ ナダ。	密	良好	内外面淡 黃褐色	腰ヨコナダ 西側周縁内
	Po 14 95 17	375	底器部 把手付舟	⑩13.9 ⑩9.8△	舟端部底から直角的に立ち上 る。舟端部上面は斜めで、舟 端部に3つの凸部(こぶ)があ る。舟端部上面は斜めで、舟 端部は下外側へ外反してのび、舟 端部で内側へ折曲(ねじり)せる。舟 端部は丸くおさまる。舟端部3方向に 丸くおさまる。	舟端部外周部不整面方向ナダ。 舟端部外周部外反方向ナダ。舟 端部外側腰部ヨコナダ。舟は内面ヨコ ナダ。	密	良好	内外面淡 黃褐色	西側周縁
	Po 15 95 17	107, 108	底器部 底	⑩11.6△ ⑩11.6△	腰部は丸くタップ(たぶ)に閉じて、 舟端部は内側して外傾し、 舟端部上面は斜めで、舟 端部に3つの凸部(こぶ)があ る。舟端部上面は斜めで、舟 端部は下外側へ外反してのび、舟 端部で内側へ折曲(ねじり)せる。舟 端部は丸くおさまる。舟端部3方向に 丸くおさまる。	舟端部内面下平脚部へラケツリ。 舟端部ヨコナダ。	0.5mm 程度 の砂粒を含む	良好	内外面淡 黃褐色	舟端部周縁
	Po 16 95	357, 448 449	底器部 脚部	⑩20.9△ 脚部	外延平行クリテク後削(さく)いキヨ。 内面周円内クリテク。	密	良好	内外面淡 黃褐色	東側周縁内	
	Po 17 102 17	520	土器部 腰部腰台	⑩14.4 ⑩27.4 ⑩13.5	受部はわずかに内側して外傾し、 腰部は外傾して丸くおさまる。 舟端部は外傾して丸くおさまる。 舟端部は外反して丸くおさまる。舟 端部の後削(さく)は丸く外方に突出 する。舟端部上面に3条の突起部(こぶ) がある。舟端部上面は斜めで、舟 端部は下外側へ外反してのび、舟 端部で内側へ折曲(ねじり)せる。舟 端部は丸くおさまる。	受部舟端クリテクミヨキ。舟端 ヨコナダ。タップ(たぶ)とガキ。腰部 外延脚部ヘラミヨキ。内面左方 脚部ヘラミヨキ。	密	良好	内外面淡 黃褐色	第3主体部
19号棟	Po 2 104 17	189, 191 193, 194	土器部 裏	⑩18.4△ ⑩26.0△	I型脚部は腰削して短く立ち上 る。腰部は丸くおさまる。舟端部は内側 して外傾し、舟端部上面は斜めで、舟 端部は下外側へ外反してのび、舟 端部で内側へ折曲(ねじり)せる。舟 端部上面に3条の突起部(こぶ)あ る。舟端部上面は斜めで、舟 端部は下外側へ外反してのび、舟 端部で内側へ折曲(ねじり)せる。舟 端部は丸くおさまる。	内面はハケ日焼後脚部ヘラケツリ。 内面は斜めで、舟端部上面は斜めで、舟 端部は下外側へ外反してのび、舟 端部で内側へ折曲(ねじり)せる。舟 端部上面に3条の突起部(こぶ)あ る。舟端部上面は斜めで、舟 端部は下外側へ外反してのび、舟 端部で内側へ折曲(ねじり)せる。舟 端部は丸くおさまる。	細粒。小砂 粒を含む	良好	内外面 黄褐色 外 ス 付 着 者 内 面 に 灰 化 物 付 着 周 溝	

插表4 石器觀察表

遺物番号	取上番号	標図番号	図版番号	出土位置	器種	石材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	調整	備考
S 1	30-1	81	14	10トレンチ	調整石器	黒曜石	3.00	1.93	1.15	5.8		
S 2	30-2	81		10トレンチ	調整石器	黒曜石	3.15	1.97	1.50	6.2		
S 3	30-3	81	14	10トレンチ	石刃状石器	黒曜石	3.64	1.08	0.35	0.9		
S 4	615	81	14	18号墳墳丘下	ナイフ形石器	黒曜石	5.43	2.32	0.75	6.6		
S 5	505	81	14	19号墳第2主体部	石鎌	サスカイト	1.64	1.30	0.36	0.6	両面	平基無茎
S 6	268	81	14	18号墳周溝内	磨製石斧	無斑晶安山岩	3.0	3.4	0.8	15.6		刃部先端

# 付論